

75 普陀寺（ほだじ）

表75-1

寺院名	大泉山普陀寺	所在地	安中市松井田町新堀1186
宗派	曹洞宗	所有者・管理者	宗教法人 普陀寺
主本尊	觀音如來	仏事	半僧坊大祭(4/17)
創立・沿革	室町時代初期の応永7年(1400)に無極慧徹禪師が開山として創建されたとされる。当初は草庵であった。無極慧徹禪師が美濃国の大泉山普陀寺の住職時代の弟子で跡を継いだ月江正文(尾張楞嚴寺、上野雙林寺、武藏普門院を開山)が、寺号を移した事で正式な寺院となり自らを2世とした。本堂は明和3年(1766)に再建された(架札より)。		
文化財指定	なし		

位置・配置 (図75-1、写75-1)

普陀寺は安中市松井田に位置し、旧松井田宿を抜けてすぐ右側(渋川松井田線・旧中山道北側)にある。道路(旧中山道)よりすぐ総門があり、総門を潜り北へ40m程、参道を進むと中門がある。途中、年数の経過した見応えがある立派な赤松の木が4本ある。中門を潜り、さらに参道を30m程進み、階段を4段上がり18m程進むと本堂正面となる。中門西には、観音堂があり、観音堂北に御真殿があり、中門北東、本堂南に鐘楼がある。本堂は旧庫裏を含み向拝はないが、代わりに玄関が備えられている。本

堂東に庫裏があり、便所棟が内部用と外部用がある。東側道路(渋川松井田線)より入り駐車場があり、敷地の南東と北東、北側が墓地となっている。境内には多くの樹木が生えており、参道にある赤松と同じく立派な赤松の木も多くある。



写75-1 境内全景



図75-1 配置図

由来および沿革

普陀寺は室町時代初期の応永7年(1400)に無極慧徹禪師が開山として創建されたとされる。当初は草庵だったが、無極慧徹禪師が美濃国の大泉山普陀寺の住職時代の弟子で跡を継いだ月江正文(尾張楞嚴寺、上野雙林寺、武藏普門院を開山)が兵火にあい当寺に来て無極慧徹とともに堂宇を完成させ、美濃国の大泉山普陀寺の寺号を移した事で正式な寺院となり、月江正文は自らを2世とした。慶安元年(1648)徳川家光より41石2斗の御朱印を寄進されたが、明治維新の際ほとんどが上地された。

本堂 (図75-2、表75-2、写75-2～75-7)

本堂の建造年は廊下虹梁下に付けられた梁牌に「明和大年丙戌之秋七月吉旦一工数二千七百餘日」と記されており、明和3年(1766)に再建されたもの

である。

西側本堂と東側旧庫裡は接して建てられており、一体化しているため境界は明確では無いが廊下東にある玄闇までを本堂とすると、その規模は、正面12間（本堂8間、庫裡4間、側面10間、寄せ棟造、平入、銅板葺、向拝無してある。平面は廊下、6間取りを基本とし、西に通路、北西に開山堂を配し、北と東に縁を廻す。以前は廊下全体が土間であった（住職聞き取り）。現在、西端に土間が残っている）。軒は二軒疎垂木で、組物は身舎外部、舟肘木、外陣、内陣に迎柱上、拳鼻付出組である。

昭和3年(1928)茅葺から銅板に葺替、その後

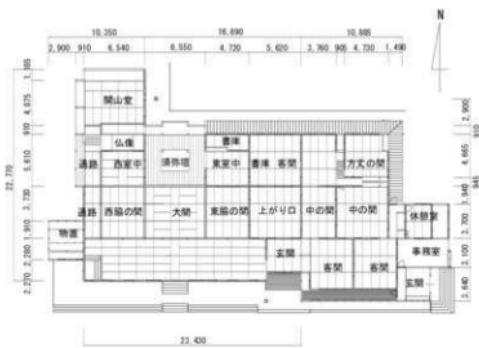


図75-2 平面図(本堂)

表75-2 本堂

建造年代／根拠	明和3年(1766)／(本堂梁牌)	構造・形式	正面23.43m、側面22.77m、寄棟造、平入、銅板葺
工 匠	[大工]不明 [彫工]外陣廊下境欄間:花輪住 星野慶輔熙興彫刻	基 础	石基礎(内部は自然石、南外周部は切石)
軸 部	[身舎]角柱、内法長押	組 物	[身舎外部]舟肘木 [来迎柱上部]拳鼻付出組 [内外陣境]拳鼻付出組 [外陣廊下境]無し
中 備	[内外陣境]はめ込み彫刻	軒	二軒疎垂木
妻 飾	なし	柱 間 装 置	土壁漆喰壁、木製引違硝子戸
縁・高欄・脇障子	北、東に切目縁	床	[内外陣、廊下、その他の室]畳敷
天 井	[内陣]格天井 [外陣]竿縁天井 [廊下]竿縁、垂木現	須弥壇・厨子・宮殿	[内陣]須弥壇
塗 装	素木・拭漆(虹梁)、黒塗装(虹梁絵様)	飾 金 物 等	なし
絵 画	天女[内陣奥] 他 [東室中、西室中、東の脇間、西の脇間]欄間	材 質	[来迎柱、内外陣境丸柱、虹梁]櫛 [内外陣境角柱]檜
彫 刻	[身舎外部]正面虹梁(若葉)、内陣虹梁(若葉)、内外陣境欄間(龍、雲、鳳凰)、側面蔓股(植物)、内外陣境木鼻(獅子)、外陣廊下境欄間(サイ、麒麟)、虹梁(若葉)、廊下虹梁上(拳、雲、他)、木鼻(獅子)		



写75-2 全景



写75-3 外陣・内陣



写75-4 廊下



写75-5 外陣内陣境欄間彫刻



写75-6 東脇の間・欄間



写75-7 内陣欄間彩色絵

平成5年(1993)再葺替を行なう。本堂西の倉庫、旧庫裡南広縁、旧庫裡東事務室、旧庫裡東玄関は増築と考えられるが、詳しい年代は不明である。

内部は、外陣は竿縁天井、内陣は格天井で、どちらも5m程の高い天井高である。

彫刻は廊下外陣正面にサイと麒麟の透彫の欄間、廊下虹梁上に結綿を付け、外陣内陣境中央に龍、鳳凰、雲の透彫の欄間が嵌め込まれている。外陣廊下境欄間の裏に「花輪住 星野慶輔熙典彫刻」と銘あり、花輪の彫刻師の作である。須弥壇両脇には明治26年(1893)頃製作の天人天女の彩色画の欄間や、東の脇間、西の脇間鶴居上にも同彩色画の欄間が嵌め込まれている。塗装は外陣虹梁が拭漆、虹梁絵様は黒塗である。

旧庫裡は東奥に方丈の間を設けた8間取りで、一部2階が設けられているが、全体の高さが低いため、改修の可能性が高いと考える。

鐘樓 (図75-3、表75-3、写75-8~75-10)

鐘楼の建造年は、「補蛇寺の歩み」によると、本堂と同年明和3年(1766)の建立と伝えられている。唐草絵様など細部の造りから、18世紀後期と推定する。

その規模は、正面1間、側面1間、入母屋造、樓造、瓦葺、二軒疎垂木で、材料は檜で塗装は素木、

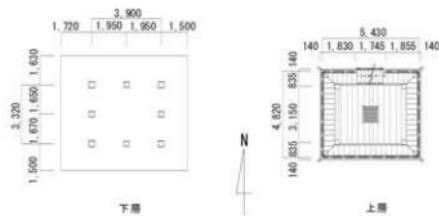


図75-3 平面図(鐘楼)

平成20年(2008)頃に垂木、組物、斗、木鼻、幕股などの小口を白塗装で仕上げた。昭和41年(1966)までは茅葺であったが、瓦に葺替えた。独立切石の上に245角の柱が四方転びで建ち、現在、切石の周りをコンクリートで固めている。

組物は、出三斗、頭貫木鼻は拳、台輪を廻し、中備は幕股である。1階天井組入天井、2階天井、格天井で、北面より階段を上り、四方に縁を廻す。縁には擬宝珠高欄を付け、架木、平行を斗束、桶束で支える。

梵鐘はかなり大きく、寛政7年(1795)に造られた。信州小県郡上田住人の鶴物師、小島久兵衛藤原弘文と小島友吉藤原国一により造られた旨の銘文がある。

表75-3 鐘楼

建造年代／根拠	18世紀後半／建築様式	構造・形式	正面1間(5.43m)、側面1間(4.82m)、入母屋造、樓造、瓦葺
工 匠	不明	基 础	独立切石
軸 部	角柱、内法長押(内外)台輪	組 物	[外部]出三斗
中 備	[外部]幕股 [内部]大瓶束、斗	軒	二軒疎垂木
妻 飾	蕉懸魚	柱 間 裝 置	なし
縁・高欄・監障子	四方切目縁、擬宝珠高欄	床	板張
天 井	[1階]組入天井 [2階]格天井	須弥壇・扇子・宮殿	なし
塗 装	素木、白塗装(組物、斗、木鼻、幕股、小口)	飾 金 物 等	なし
繪 画	なし	材 質	檜
彫 刻	木鼻、幕股(若葉)		



写75-8 全景正面



写75-9 全景側面



写75-10 2階

總門（図75-4、表75-4、写75-11～75-13）

總門の建造年は、「補陀寺の歩み」によると、本堂と同年明和3年(1766)の建立と伝えられている。唐草絵様など細部の造りから18世紀後半と推定する。

その規模は正面1間1戸、高麗門、切妻造、瓦葺、組物は大斗肘木、妻に猪目懸魚を付ける。材料は檜で、塗装は素木、平成20年(2008)頃に垂木、組

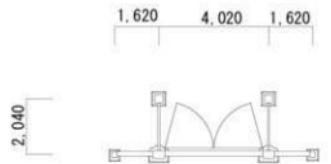


図75-4 平面図(總門)

表75-4 總門

建造年代／根拠	18世紀後半／建築様式	構 造 ・ 形 式	1間1戸高麗門(4.02m)、側面1間(2.04m)、切妻造、平入、瓦葺
工 匠	不明	基 础	切石
軸 部	角柱	組 物	大斗肘木
中 備	なし	軒	一軒疊垂木
妻 飾	猪目燕懸魚	柱 間 装 置	
縁・高欄・脇障子	なし	床	なし
天 井	なし	須弥壇・扇子・宮殿	なし
塗 裝	素木、白塗装(組物、斗、木鼻、幕脛、小口)	飾 金 物 等	なし
絵 画	なし	材 质	檜
彫 刻	木鼻、虹梁(若葉)		



写75-11 全景正面



写75-12 全景背面



写75-13 全景

表75-5 中門

建造年代／根拠	18世紀後半／建築様式	構 造 ・ 形 式	1間1戸高麗門(2.71m)、側面1間(1.83m)、切妻造、平入、瓦葺
工 匠	不明	基 础	切石
軸 部	角柱	組 物	大斗肘木
中 備	なし	軒	一軒半疊垂木
妻 飾	大瓶束変形、燕懸魚	柱 間 装 置	
縁・高欄・脇障子	なし	床	なし
天 井	なし	須弥壇・扇子・宮殿	なし
塗 裝	素木、白塗装(組物、斗、木鼻、幕脛、小口)	飾 金 物 等	なし
絵 画	なし	材 质	檜
彫 刻	木鼻、虹梁(若葉)		



写75-14 全景正面



写75-15 全景背面



写75-16 全景

ているが、総門同様、唐草絵様など建築様式から18世紀後半と推定する。

その規模は、正面1間1戸、薬医門、切妻造、瓦葺、組物は大斗肘木、妻飾りは大瓶束笠形、燕懸魚を付ける。材料は檜で塗装は素木、平成20年(2008)頃に垂木、組物、斗、木鼻などの小口を白塗装で仕上げた。

正面に大泉山の額を付ける。

まとめ

補陀寺現本堂の建造年は、本堂虹梁に取付けられた銘板の通り、明和3年(1766)に再建されたものである。向拝は無いが、本堂玄関が設けられており、旧庫裏と一緒に造りで本堂、庫裡とともに保存状態が良く、総門、中門、鐘楼、観音堂、御真殿などの境内配置も良く、参道や境内の立派な松などの樹木も見所の一つである。

製作年代は不明であるが、本堂の欄間彫刻は「花輪住 星野慶輔熙興彫刻」と銘がある通り、花輪住星野慶輔熙興の作である。本堂入り口虹梁の唐草絵様は簡素であり、明和らしく、内部虹梁の唐草絵様も18世紀後半の特徴を表している。来迎柱の頭貫に

地紋彫が施されていることは特徴的であり、外陣天井は竿縁天井、内陣は格天井で、彫刻の無い天井板支輪が付き、どちらも5m程の高い天井高で、外陣と両脇間の境は虹梁のみで建具、小壁、欄間などの備えが無いのも特徴である。北と東に縁を廻している。

鐘楼は四方軒び角柱2階建で、寛政7年(1795)に造られた梵鐘はかなり大きく、見応えがある。

総門は男木と女木の唐草絵様から伝承通り明和の建立と考えられる。

同様に唐草絵様等から推察すると中門も伝承通り18世紀後半の建立と考えられる。

境内の主な建物は18世紀後期の建築様式を知ることが出来る貴重な建築物である。

また、補陀寺を創建した無極慧徹禅師は曹洞宗の今日の発展の基を築いた瑩山禅師直系の弟子であることも興味深い。

(久保田和人)

【参考文献】

『群馬県近世社寺建築緊急調査報告書』群馬県教育委員会

昭和54年

『補陀寺の歩み』大泉山補陀寺 平成2年

76 乾窓寺〔けんそうじ〕

表76-1

寺院名	三宝山乾窓寺	所在地	安中市松井田町土塙2331
宗派	曹洞宗	所有者・管理者	宗教法人 乾窓寺
主本尊	真言密教の仏迦如来	仏事	お盆供養(檀家 8/13)
創立・沿革	延徳2年(1490)安中市上後閑の長源寺十四世秀堂大逸和尚によって開山され、創建当時は真言密教の寺と伝えられ、現在は曹洞宗である。慶安2年(1650)10月徳川家光將軍より寺領朱印地高六十二石二斗余を賜り、明治元年(1868)明治維新的際に上地する。		
文化財指定	乾窓寺山門(市重文 昭和62年2月)、乾窓寺のもくせい(市天記 昭和62年2月)		

位置・配置(図76-1、写76-1)

当地は安中市松井田町の北西にあり九十九川の清流に面する傾斜地に位置している。石段を登り総門、山門、本堂が整然と並ぶその景観は素晴らしいものである。総門は簡素な四脚門であり、さらに山

門は入母屋造り、3間1戸楼門で正面3間、側面2間の八脚門である。本堂は正面口12間、側面8間である。

由来および沿革

延徳2年(1490)安中市上後閑の長源寺十四世秀堂大逸和尚によって開山された曹洞宗。

慶安2年(1650)10月徳川家光將軍より寺領朱印地高六十二石二斗余を賜り、明治元年(1868)明治維新的際に上地する(略記より)。

山門(図76-2、表76-2、写76-2~76-7)

山門上層正面に市重文の「僧伽爛漫」と大書され宝寿大梅書と書ある。大梅は信州の高僧である。また裏面に文化元年(1804)甲子歳四月二十八日三宝山乾窓寺十三世泰安と花押がある。大梅は佐久市正安寺十六世(1682~1757)で天和2年(1682)の生まれたため禪師の後継者の可能性もある。建立時期は唐草絵様の巻きや中央側面の虹梁も簡素な事から18世紀前期と推定される。

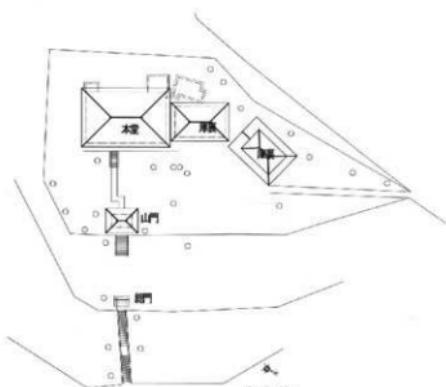


図76-1 配置図



写76-1 境内全景

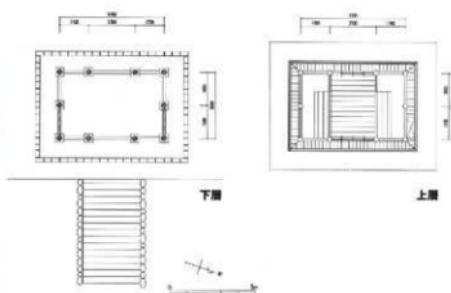


図76-2 平面図(山門)

表76-2 山門

建造年代／根据	18世紀前期／建築様式	構造・形式	正面3間、側面2間 鋼板葺入母屋造
工 匠	不明	基 础	正面3間、側面2間 鋼板葺入母屋造
軸 部	丸柱	組 物	平三斗 拳鼻付出組
中 備	幕股	軒	繁垂木 平行垂木
妻 飾	なし	柱 間 裝 置	正面：障子戸
縁・高欄・船椅子	高欄四周、擬宝珠高欄	床	板
天 井	板	須弥壇・扇子・宮殿	なし
塗 装	なし	飾 金 物 等	なし
絵 画	なし	材 質	柱：檜
影 刻	幕股、木鼻、虹梁		



写76-2 全景



写76-3 側面



写76-4 背面



写76-5 水引虹梁内部(下層)



写76-6 組物



写76-7 内部(上層)

まとめ

石段を登り総門、山門、本堂の一直線の配列のその景観は美しい。山門は入母屋造りで楼門で江戸時代初期からの名刹であったと考えられる。

(三好建正)

【参考文献】

「細野の歴史散歩」細野の昔話愛好会編

78 中正寺〔ちゅうしょうじ〕

表78-1

寺院名	中越山三笠山世尊院中正寺	所在地	多野郡上野村甲146
宗派	天台宗	所有者・管理者	宗教法人 西福寺(前橋市)
主本尊	釈迦如来	仏事	火渡りの行事が中正寺の裏山で毎年4月17日に行われていたが、最近では5月3日に行われる。1月3日年始、春秋彼岸、新盆、大般若経11月中旬。
創立・沿革	延長年中(923~931)比叡山東塔北谷の僧円忍坊実仙が釈迦如来の像を背負い来て草堂一字を創建する。永正9年(1512)洪水にて院室流亡する。その後、天正年中(1573~1592)僧須海が中興する(『上野国多胡郡寺院明細帳』より)。		
文化財指定	中正寺のシダレザクラ(県天記 昭和33年8月)、中正寺の火渡り(村重無民 昭和55年7月)		

位置・配置(図78-1、写78-1)

檜原地区は上野村西部にわたり、中正寺は南牧村や信州に抜ける街道沿いに位置する。

石垣を登った正面に本堂、その左側に庫裏が建つ。庫裏の脇に記念碑、碑、川側に身体清め場を配置している。石段右には県指定天然記念物の見事なしだれ桜がそびえている。仏乗桜とも呼ばれ、樹齢500年以上と推定される。近くには国指定重要文化財の旧黒澤家住宅がある。

由来および沿革

延長年中(923~931)比叡山東塔北谷の僧円忍坊実

仙が釈迦如来の像を背負い来て草堂一字を創建する。永正9年(1512)洪水にて院室流亡する。その後、天正年中(1573~1592)僧須海が中興する(『上野国多胡郡寺院明細帳』より)。

毎年恒例の火渡りの行事は、山伏姿の行者が中正寺で冷水をかぶり、ホラ貝を高らかに響かせながら素足で裏山に上がって火渡りの行を行っている。かつては御嶽山と関係があり、須郷集落で行われていたが昭和36年(1961)現在地に移った。本堂内に足利三笠山講の額がある。70年前から前橋市の西福寺が管理している。村内檀家70戸、棟名、埼玉、東京、関西に信者がいる。

本堂(図78-2、表78-2、写78-2~78-7)

本堂は正面6間(12.17m)、側面5間(11.445m)入母屋造り鉄板葺。せがい造の軒から当初は茅葺であった事が伺える。向拝は無く、内部の間取りは通常廊下に6室のところ、4室で構成されており、内外陣の右側に以前は2室あった可能性もあるが、洪水による再建で4室になった事も推測される。外陣、内陣を見ると、永正9年の洪水で土石流

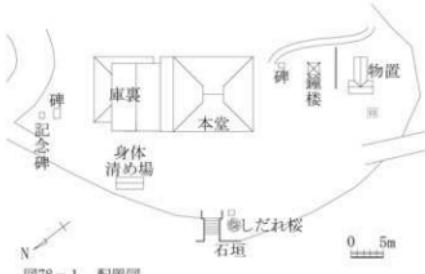


図78-1 配置図



写78-1 景観写真

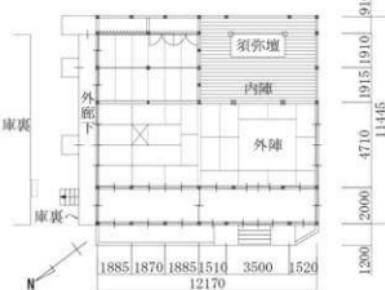


図78-2 平面図(本堂)

によって院室流亡すると記された事の証として内外陣境の角柱や彫刻欄間（彫刻は波に蓮で植物に限定され全体的に厚みがない）、内陣の来迎丸柱、水引虹梁、木鼻等が天井下で終わり宙に浮いている。伝説では下流から拾い上げ再利用されたという記述も残る。いずれにしても原型の創建は虹梁の唐草絵様や木鼻のシカミ等から18世紀中期とするが、来迎柱部や内外陣境等はその後改造をしていると推定する。

昭和8年(1933)天井板、欄間修理、昭和43年(1968)屋根土台修理疊替え、昭和62年(1987)本堂修理、平成16年(2004)アルミサッシ・ガラス改修、平成18年(2006)本堂修理、平成30年(2018)内陣床改修を実施。

まとめ

寺では洪水に見舞われたという口伝が江戸末期にもあり、建物は簡素な造りである。現在も村内外からの行者や講による信者の集り、火渡りの行事等が引き継がれている。境内の身体清め場からつづら折りの山道を登り裏山の火渡り場に至る景観は、自然と一緒にになった上野村独特の寺院と言える。

(松井良一)

[参考文献]

- 『上野村の民俗（改訂版）』上野村誌（IV） 上野村教育委員会編 平成31年
- 『上野村の文化財・芸能・伝説』上野村誌（V） 上野村教育委員会編 平成13年
- 『上野国寺院明細帳3』（上野国多胡郡寺院明細帳）群馬県文化事業振興会 平成7年

写78-2 本堂

建造年代／根据	18世紀中期／再利用されている来迎柱の柱脚に残る槍鉋仕上の痕跡や内外陣境の彫刻欄間(波に蓮の植物)、内外陣境の水引虹梁の太い唐草絵様、木鼻のシカミ等	構 造 ・ 形 式	正面6間(12.17m)、側面5間(11.44m)、平入、入母屋造鉄板葺(当初茅葺)
工 匠	不明	基 础	基礎石、外周部コンクリート布基礎
軸 部	角柱、丸柱(後陣來迎柱)	組 物	船肘木
中 備	なし	軒	せがい造軒天板張り
妻 飾	なし	柱 間 裝 置	漆喰壁、建具アルミサッシ
縁・高欄・脇障子	なし	床	桧板張、骨組
天 井	聯合板格天井 ケイカル板張り(内陣)、合板及び杉板竿縁天井、聯合板格天井(外陣)	須弥壇・扇子・宮殿	禅宗様
塗 装	素木、唐草、絵様	飾 金 物 等	なし
繪 画	なし	材 质	杉、櫻、栗
彫 刻	内外陣境彫刻欄間(波に蓮)、内陣木鼻(鯨鈍)		



写78-2 全景



写78-3 側面



写78-4 庫裏



写78-5 欄間彫刻、水引虹梁裏側



写78-6 本尊、来迎柱、虹梁、木鼻



写78-7 内外陣境水引虹梁

80 千手寺〔せんじゅじ〕

表80-1

寺院名	龍浦山芋屋寺	所在地	神流町万場甲999
宗派	曹洞宗	所有者・管理者	宗教法人 千手寺
主本尊	千手觀音菩薩	仏事	不明
創立・沿革	宝積寺(甘楽町)五世、不尽全種大和尚を招して開山となし、由来宝積寺末寺として現在に至っている。古い記録や文書などは未整理のまま失われてしまって詳しく知ることが出ない。本尊の千手觀音は身代わり觀音として信仰の厚い觀音である(『多野郡誌』多野郡教育会 1927年)。		
文化財指定	なし		

位置・配置(図80-1、写80-1)

千手寺は国道462号を上野方面に向かい、神流町万場市街地にある群馬銀行万場支店角を右に折れ、道なりに登りつめた町を見下ろす高台にある。急な石段を登り、門をくぐりさらに石段を登ったところに本堂があり、全体は南面する。本堂左に聖天堂があり、本堂右に隣接して庫裡が並ぶ。

由来および沿革

寺伝で宝積寺(甘楽町小幡)5世、不尽全種大和尚を招して開山となし、由来宝積寺末寺として現在に至っている。

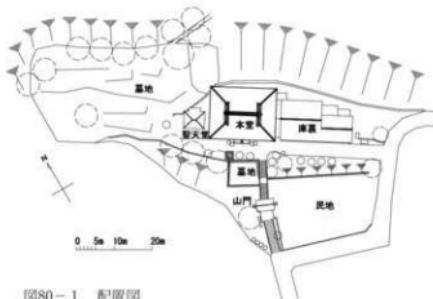


図80-1 配置図



写80-1 境内

古い記録や文書などは未整理のまま失われてしまって詳しくは知ることは出来ない。本尊の千手觀音は身代わり觀音として信仰の厚い觀音である。また別棟の聖天堂は当寺21世、洞嶽全隆和尚が建立したもので正面扉に16瓣菊花紋章がある中には大聖歡喜天像3体が置かれている。これは商売繁盛の仏様として人気があり、一つの寺に三体もの歡喜天像があるのは県内では珍しいとされる。

本堂 (Main Hall) (図80-2、表80-2、写80-2~80-6)

境内中央に本堂はあり南面する。東西正面7間、側面南北5間入母屋屋根、鉄板瓦棒葺で覆われており、正面1間に唐破風の向拝がつく。屋根は鉄板葺で、軒は二軒疎垂木としている。西面のみに縁を付け、脇障子は無い。組物も特に無く、船肘木で軒桁を支える。

基礎は自然石の石場建で、柱は角柱とし、柱間は硝子戸で、切目長押、内法長押を設け、柱上部は船

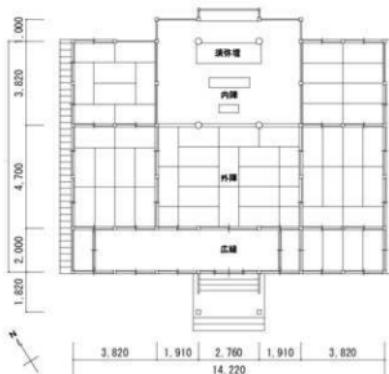


図80-2 平面図(本堂)

肘木とする。

平面は南に1間の広縁を設け、その奥中央に17畳半の外陣、両脇にそれぞれ10畳の脇陣、外陣奥に間口3間半、奥行2間半の内陣とした6間取形式である。内陣と外陣の間には櫛の円柱が建ち、唐草絵様の彫られた虹梁が付く。その上の組物は出三斗で中備に幕股となっている。欄間彫刻などは無く、漆喰仕上で、天井は簡易な格天井となっているが後補である。

まとめ

須弥壇の裏に天保15年(1844)の墨書があるが、虹梁の渦の巻具合、若葉の形態、内部幕股の肩の張具合、内陣両脇に欄間が無く下がり壁となっていることなどから、18世紀中期の建築の可能性が高い。

(羽鳥 悟)

[参考文献]

『多野郡誌』多野郡教育会 昭和2年

表80-2 本堂

建造年代／根拠	18世紀中期／建築様式	構造・形式	正面7間(14.22m)、側面5間(10.52m)、入母屋造、平入、向拝1間、鉄板葺
工 匠	不明	基 础	石場建
軸 部	〔身舎〕角柱、切目長押、内法長押 〔向拝〕角柱、水引虹梁	組 物	〔身舎〕舟肘木 〔内部〕出三斗
中 備	〔身舎〕幕股	軒	二軒疊垂木
妻 飾	板張	柱 間 装 置	正面硝子戸、側面硝子戸
縁・高欄・脇障子	西面のみ縁	床	板張
天 井	格天井	須弥壇・扇子・宮殿	須弥壇(墨書きあり)
塗 装	〔身舎外部〕素木 〔内部〕素木	飾 金 物 等	なし
絵 画	なし	材 質	櫛、檜
彫 刻	〔身舎内部〕木鼻、幕股		



写80-2 正面



写80-3 向拝



写80-4 内陣



写80-5 内部虹梁



写80-6 須弥壇裏墨書き

81 清泉寺〔せいせんじ〕

表81-1

寺院名	安養山成就院清泉寺	所在地	甘楽郡下仁田町下仁田626
宗派	天台宗	所有者・管理者	宗教法人 清泉寺
主本尊	阿弥陀如来	仏事	正月参り(1/16)、施餽鬼会(4月第2日曜日)、子育て地蔵祭(5/5)、盂蘭盆寺参り(8/16)、除夜祭(12/31)
創立・沿革	開祖は後堀河天皇の御代(1230頃)で、源頼朝の臣である源氏の武将畠山重忠の弟重俊大僧都といわれ、相模国二俣川の合戦に於いて、北条氏に討たれた兄重忠の菩提を弔うために現在地に建立したと伝えられている。開山当時は、鎌倉幕府源氏の末期、室町～頼經の時代で執権北条泰時時代である。その後堂宇荒廃するも、元禄年間(1700頃)に当山中興の祖といわれる第20世仙海僧正の代に至り本堂、書院を建立した(清泉寺縁起)。		
文化財指定	清泉寺の梵鐘(町重文 昭和54年6月)、清泉寺の宝鏡印塔(町重文 平成6年3月)		

位置・配置(図81-1、写81-1)

下仁田町の東、富岡市から国道254号線を上信電鉄下仁田駅方面に向かって、県立下仁田高等学校を過ぎたところに建つ標柱を右折し、踏切を渡った正面の山際に位置する。東西に長い境内は、北側が山側で小高くなっている。南に道路、東・東北に墓地、西に道路に接している。南の道路より山門に入りすぐには石段を登ると正面に本堂、並びに客殿、書院、庫裡がある。東側に地蔵堂、山門の東道路の石積上部に鐘楼が配されている。

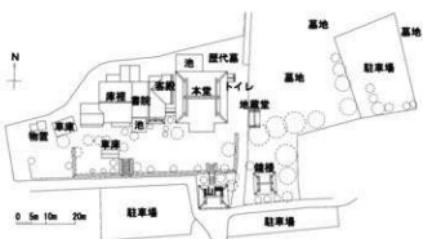


図81-1 配置図



写81-1 境内全景

由来および沿革

開祖は後堀河天皇の御代(1230頃)で、源頼朝の臣である源氏の武将畠山重忠の弟重俊大僧都といわれ、相模国二俣川の合戦に於いて、北条氏に討たれた兄重忠の菩提を弔うために現在地に建立したと伝えられている。その後堂宇荒廃するも、元禄年間(1688～1704)に当山中興の祖といわれる第20世仙海僧正の代に至り本堂、書院を建立した。通称、「お東さん」といわれているお寺で本尊は阿弥陀如来である。いくたびかの火災でその記録を失ったが、第27世の沙門義峰住職が梵鐘(町重文)にこのお寺の概略を記録している。その梵鐘には、「畠山家先祖の追福のためにこの鐘楼を建立した」とあり、畠山重忠にゆかりがあることがわかる。

本堂(图81-2、表81-2、写81-2～81-7)

文化2年(1805)に南牧火事といわれる大火があり、その飛び火で彫刻欄間を除き本堂及び書院を焼失した。その後再建は文政11年(1828)、第28世晃觀僧正代に信州諏訪の矢崎豊前照方により建造されたと棟札に記録が残されている。

規模は正面5間、側面6間、南向きで入母屋造、銅板葺き、正面1間側面1間の向拝をもつ。木階三段を設け四方に切目縁を廻す。基礎は自然石で、軸部は身舎柱を角柱とし、地貫、内法貫、飛貫、頭貫で固め、地長押、内法長押を廻す。来迎柱上部には台輪が廻る。向拝の正面は虹梁により柱頭を連ね獅子の木鼻を虹梁の両端に出す。柱頭には三斗組を置いて丸栱をささえ、龍の彫刻を入れる。梁間方向には本柱と向拝柱頭柱を海老虹梁でつなぐ。組物は内陣出組、外部大斗肘木、軒は、身舎は一軒半繁垂

木、向拝は二軒半繁垂木とする。

内部は3間3間の外陣とそれを囲む縁・対面所・位牌堂・外陣に分かれる。内陣奥に須弥壇、天井は竿縁天井、中陣の天井は折り上げ格天井で、鏡板には花鳥が描かれている。

山門（図81-3、表81-3、写81-8～81-10）

建造年代は宝暦年間（1751～1763）第24世仏運禪僧正の代と伝えられている。南向きの楼門は、下層が正面3間、側面2間、正背面両側に幕板を配置し、中央に出入口の通路があり、上層も正面3間、側面2間の2階建の3間1戸、八脚門で、屋根は入母屋

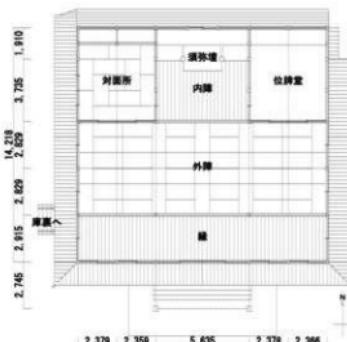


図81-2 平面図(本堂)

表81-2 本堂

建造年代／根拠		文政11年(1828)／棟札	構造・形式	正面5間(15.11m)、側面6間(14.21m)、入母屋造銅板葺、向拝1間
工 匠	[大工]矢崎豈前監方 [彫工]安永4年(1775) 東上州勢多郡花輪物語 小倉彌八季郎ほか4名(欄間裏墨書き)	基	礎	自然石基礎
軸 部	[身舎]角柱、丸柱、地長押、内法長押、飛貫、頭貫、台輪 [向拝]角柱、水引虹梁、海老虹梁	組	物	[身舎]大斗肘木 [向拝]三斗組 [来迎柱上部]出組
中 備	[内陣]三斗組 [中陣]なし [向拝]三斗付肘木	軒		[身舎]-軒疊垂木 [向拝]二軒疊垂木
妻 飾	狐格子	柱間裝置		板戸引違、棟唐戸、板張、白壁
縁・高欄・脇障子	四方切目縁	床		[外陣]拭板 [内陣]拭板 [中陣]景敷
天 井	[外陣・内陣]竿縁天井板 [中陣]折上格天井(天井画)	須弥壇・扇子・宮殿		[内陣]須弥壇
塗 装	黒漆(格天井縁)、黒赤漆(欄間彫刻の額縁)	飾金物等		釘隠金物
繪 画	格天井内花鳥(中陣)	材質		不明
彫 刻	[身舎]虹梁、支輪、肘木、欄間彫刻 [向拝]水引虹梁、海老虹梁、木鼻(獅子、狹)、中備(龍)、手挾			



写81-2 外観正面



写81-3 外観側面



写81-4 向拝虹梁・彫刻



写81-5 内部彫刻欄間



写81-6 中陣格天井(花鳥画)



写81-7 内陣須弥壇

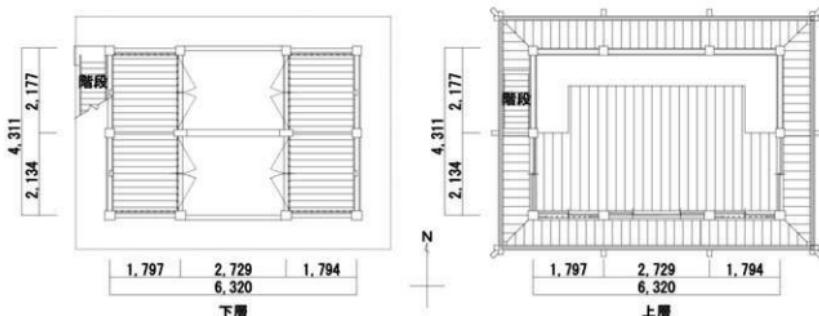


図81-3 平面図(山門)

表81-3 山門

建造年代／根据	18世紀中期／建築様式	構造・形式	3間1戸八脚門(6.32m)、側面2間(4.31m)、入母屋造、平入、瓦葺
工 匠	不明	基 础	自然石基礎
軸 部	[上層]角柱、地貫、腰貫、内法貫　[下層]礎盤、角柱、地貫、腰貫、内法貫、頭貫	組 物	[上層]肘木　[下層]持送
中 備	[上層]なし　[下層]幕股、(正面・背面)	軒	二軒半繁垂木
妻 飾	虹梁大瓶束	柱 間 裝 置	[上層]蓮子窓、板唐戸、他板張、白壁　[下層]板張、白壁、阿闍梨格子戸、嚴格子
締・高欄・脇障子	[上層]四方切目縁、擬宝珠高欄	床	[上層]拭床　[下層]拭板、土間
天 井	[上層]格天井　[下層]鏡天井	須弥壇・扇子・宮殿	なし
塗 装	朱塗(全体的)、黒漆(腰板、嚴格子、格子、天井縁)、白(肘木小口)、虹梁眉、間斗束、持送)	飾 金 物 等	なし
繪 画	[上層]天井画(鳥、龍、その他)　[下層]天井画(龍)	材 质	不明
彫 刻	虹梁、肘木、幕股		



写81-8 外観正面



写81-9 外観侧面



写81-10 2階内部仏像

造、瓦葺きである。自然石基礎の上に礎盤を置き、角柱を据え、地貫、腰貫、虹梁、頭貫、切目、腰貫、軒桁で固めている。組物は、舟肘木とし、中備は正・背面に幕股をもちいる。妻飾りは虹梁大瓶束で、軒は二軒半繁垂木である。通路両側の四室には四天王の多聞天、持国天、廣目天、增長天が甲冑をまとい、安置されている。上層の縁には擬宝珠高欄を廻らす。内部は仏壇の中央部に千手觀音と觀音を護持する觀音二十八部衆の仏像が安置されている。下・上層ともに天井画が描かれている。

まとめ

境内には、本堂並びに客殿、書院、庫裡、鐘樓、山門が建ち並び、奥には墓地を配してまとまった形態を呈しており、地域における信仰の歴史をうかがうことができる。棟札や梵鐘など建造年代やお寺の

沿革が記録された史料が多く残存しているのは貴重なことである。本堂は信州大隅流の矢崎豈前掾照方による再建であるが、向拝の彫物は見事である。

内部では欄間彫刻と天井画が一際目を引く。彫刻欄間の裏に、安永4年(1775)東上州勢多郡花輪彫物師（小倉彌八季郡、星野政八昌興、松嶋文藏雅朝、松嶋金蔵、星野市郎左衛門）の墨書きがあり、再建前のものであることがわかる。

平成8～11年(1996～1999)にかけて、本堂屋根の大改修や鐘楼・書院屋根の葺替を行っている。梵鐘や宝篋印塔などの町指定重要文化財があり歴史あるお寺である。

(久保喜由)

【参考文献】

『群馬縣北甘楽郡史』本田亀三著 昭和3年

『下仁田町史』下仁田町 昭和46年

『上野国寺院明細帳3』群馬県文化事業振興会 平成7年

『群馬県近世社寺建築緊急調査報告書』群馬県教育委員会
昭和54年

『甘楽野古寺巡參』深澤武著 昭和57年

84 黒瀧山不動寺（くろたきさんふどうじ）

表84-1

寺院名	黒瀧山竈前院木動寺	所在地	甘樂郡南牧村大字大塙沢字黒瀧甲1266
宗派	黄檗宗・潮音派	所有者・管理者	宗教法人 不動寺
主本尊	執事如意、金鉢不動明王	仏事	初不動(1/28)、春季金鉢不動尊祭(4/28~29)、秋季金鉢不動尊祭(10/28)、潮音禪師開山忌(12/8)、不動尊例月祭(毎月28日)
創立・沿革	寺の名前の由来は、行基菩薩の作と言われる金鉢不動明王の本尊名による。延宝3年(1675)潮音禪師が来山し中興開山となる。開基に当ったのが地元の市川半兵衛・小柏八郎白石六郎・市川清平ら。開山堂は寛永5年(1628)火災に遭い安政5年(1858)に再建したもの。		
文化財指定	黒瀧山不動寺(村史跡 昭和53年7月)、黒瀧山の大スギ(県天記 昭和27年11月)、絹本着色七師七友図(県重文 平成11年4月)		

位置・配置（図84-1、写84-1）

県道45号下仁田上野線の途中から、大塙沢へ向かう県道202号黒瀧山小沢線に乗り換え5kmほど西に位置する。普通車ですれ違いが困難な狭い道路を進むと、後半は急な九十九折が続く。

黒瀧山不動寺は、上州南牧谷の奥深い黒瀧山(870m)の南東腹にあって、岩壁から滝しぶきの舞う處。寺に到着すると、まず鐘楼、山門、不動堂、大雄宝殿、黒瀧泉そして開山堂へと続いている。

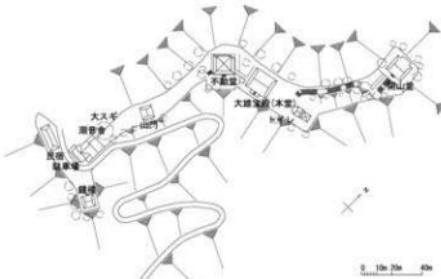


図84-1 配置図



写84-1 境内全景

由来および沿革

黄檗宗・潮音派の寺院で、名前の由来は行基菩薩の作と言われる金鉢不動明王の本尊名による。延宝3年(1675)潮音禪師が来山し中興開山となる。開基に当ったのが地元の市川半兵衛・小柏八郎・白石六郎・市川清平らとされる。

開山堂（図84-2、表84-2、写84-2～84-7）

正面3間、側面3間、背面中央1間張出、入母屋、平入、銅板葺。内部は一室空間とし、最奥部に宮殿を置く。正面・側面には奥行600mm程の棚が設置されており、床は土間とする。軸部は、差鴨居、頭貫、台輪で固めている。



図84-2 平面図(開山堂)

組物は出組とし、中備は撥束、彫刻嵌め込みとする。柱間装置は、開戸（桟唐戸）、引戸（舞良戸）、板壁とする。軒は一軒繁垂木（背返し）とし、妻飾は蕉懸魚鰯付を飾る。

「真寂塔」というのが潮音禪師の名付けた名称。寛政6年(1794)潮音禪師の百年遠諱にあたって再建。嘉永5年(1852)火災に遭い安政5年(1858)再建されたものが現在の開山堂である。

奥後部を張り出して宮殿としている。この宮殿中央の仏龕に等身大の寿像を安置し、その左右に歴代住職の位牌および開基居士や栄三道尼の肖像が安置されている。

天井にある雲龍の図は、安政2年(1855)に法眼真祐が描いた。

山火事で類焼した経蔵は、現在は基壇しか残って

いない。

不動堂（図84-3、表84-3、写84-8～84-10）

正面5間、側面6間、重層方形、三方裳階付、向拝5間、鉄板葺。内部は開山堂と同様に一室空間とし、最奥部に宮殿を置く。床は土間とし、両側面には土間面より400mm程高い板張りの座禅席を設ける。西側座禅席北・宮殿北の1間は、柱に貫穴や木舞穴の痕跡が見られることから、あとから付け加えたものと考える。軸部は、差鶴居、頭貫、虹梁で固めている。

組物は舟肘木とし、柱間装置は、引戸（格子戸）、格子窓、軒は一軒疊垂木とする。外壁は真壁造白漆喰仕上、右側側面と背面は白色カラー鉄板張、腰壁は板張。

表84-2 開山堂

建造年代／根拠	江戸末期／建築様式	構造・形式	正面3間(8.83m)、側面3間(7.92m)、背面中央1間(1.82m)張出、入母屋造、平入、鋼板葺
工 匠	不明	基 础	基壇、切石基礎
軸 部	角柱、差鶴居、頭貫、台輪	組 物	出組
中 備	撥束、彫刻	軒	一軒繁垂木
妻 飾	蕉懸魚鰯付	柱 間 裳 階	開戸（桟唐戸）、引戸（舞良戸）、板壁
縁・高欄・脇障子	已崩しの高欄	床	土間コンクリート
天 井	競天井	須弥壇・扇子・宮殿	宮殿
塗 装	素木、彩色(彫刻)	飾 金 物 等	なし
繪 画	天井画(雲龍)、安政2年(1855)法眼真祐	材 質	不明
彫 刻	板支輪(鶴、亀、雲、波)		



写84-2 外観：正面



写84-3 外観：側面・背面



写84-4 外観：組物・彫刻支輪



写84-5 内部：宮殿



写84-6 内部：組物・彫刻



写84-7 内部：天井画

表84-3 不動堂

建造年代／根拠	天保14年(1843)／棟札	構造・形式	正面5間(11.58m)、側面6間(10.37m)、重層方形造、三方廻附付、向拝5間、鉄板葺
工 匠	[大工]棟梁：小林源藏、田村伊三良	基 础	基壇、切石基礎
軸 部	[身合]角柱、頭貫、差鶴居、虹梁 [向拝]角柱、	組 物	舟肘木
中 備	なし	軒	一軒破垂木
妻 飾	なし	柱 間 装 置	引戸(格子戸)、格子窓、壁：漆喰塗、白色カラー 鉄板張、腰壁：板壁
縁・高欄・船障子	高欄	床	[内陣]板張ゴザ敷仕上 [外陣]土間コンクリート 〔座禅席〕板張
天 井	[内陣]小組格天井 [外陣・座禅席]竿縁天井	須弥壇・扇子・宮殿	扇子、宮殿
塗 装	素木、彩色(建具枠)	飾 金 物 等	素木飾
繪 画	なし	材 質	不明
形 刻	なし		



写84-8 外観：正面・側面



写84-9 外観：側面



写84-10 内部：厨子・宮殿

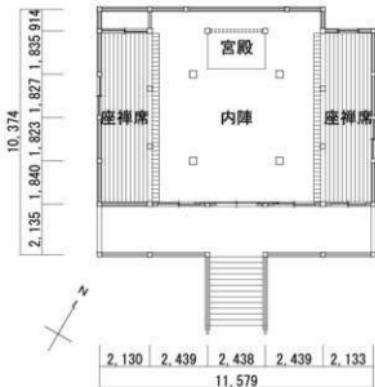


図84-3 平面図(不動堂)

内部には厨子が置かれ、その中には金輪不動明王像が安置されている。正面から見て左右に、一段高くなつた座禅席が設けられ、床は板張となつてゐる。座禅席奥と宮殿の境柱には、貫穴と木舞壁の痕跡がある。正面入口は現在引戸となつてゐるが、かつては開き戸であった痕跡が残る。

天保14年(1843)再建時の棟札が残されている。

山門(図84-4、表84-4、写84-11~84-13)

1間1戸四脚楼門、入母屋造、平入、鉄板葺。下層が桁行4、248mm、梁間3,644mmで、正面1間、側面2間。上層は桁行3,954mm、梁間3,303mm。正面・側面ともに1間で、下層よりもやや柱間間隔が狭くなっている。四方に擬宝珠高欄付の縁を廻らし、正面・背面には火灯枠があり、その内側に引分けのガラス格子窓がある。西面には跳ね上げ式のガラス格子窓が付き、東面は出入口となる引分け戸が付く。上層はもともと鐘楼であったとの事なので、いずれも後から付けたものであろう。軸部は、虹梁、頭貫、長押、地覆で固めている。

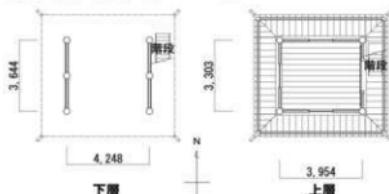


図84-4 平面図(山門)

表84-4 山門

建造年代／根拠	18世紀後期／建築様式	構造・形式	1間1戸四脚櫻門(4.25m)、側面2間(3.64m)、入母屋造、平入、鉄板葺
工 匠	不明	基 础	切石独立
軸 部	丸柱、虹梁、頭貫、長押、地覆	組 物	出組、三手先
中 備	なし	軒	二軒扇垂木
妻 飾	不明	柱 間 装 置	火灯窓、格子窓、板壁
縁・高欄・脇障子	四方切目縁、擬宝珠付高欄	床	〔上層〕板張 〔下層〕砂利敷、中央部切石敷
天 井	〔上層〕竿縁天井 〔下層〕上層部床板現し	須弥壇・扇子・宮殿	なし
塗 裝	素木(上層内部)、外部朱塗、垂木黒塗、彩色(彫刻)	飾 金 物 等	なし
絵 画	なし	材 質	不明
彫 刻	板支輪(亀、波)、隅木下部(波)		



写真84-11 外観：正面



写真84-12 外観：背面



写真84-13 外観：組物・彫刻支輪

組物は、出組、三手先とし、柱間装置は火灯窓、格子窓、板壁、軒は二軒扇垂木とし、妻飾は未確認である。彫刻は板支輪に亀、波、隅木下部に波が彫られている。

外部は朱色に塗装されているが、内部は素木である。屋根は真反りの二軒扇垂木とする。

上層は鐘樓として梵鐘が下げてあったが、戦時の供出によって今は無い。

この山門も再建されたものとされているが、軸部や組物の建築様式から18世紀後期と推定する。

まとめ

黒滝山不動寺は黒滝山の険しく複雑な地形に建てられた、下界の喧騒届かぬ山深くのお寺であり、檀家を持たない禪の修行場である。境内には鐘楼、潮音舎、山門、不動堂、大雄宝殿（元禄7年(1694)建

立、明治16年(1883)再建とされる）、開山堂と黒滝山の岸壁に沿うように建てられている。不動堂の裏には竜神の滝と不動明王が鎮座している。

土間床や疋崩しの高欄など、黄檗宗の特徴をよく表している。山門屋根の真反り二軒扇垂木は、県内でも数が少なく、大変貴重な建物と言える。

(齊藤朋行)

【参考文献】

- 『甘楽野古寺巡参』深澤武著 昭和57年
- 『関東の仙境 黒滝山 不動寺と南牧村を歩く……』関口ふさの著 平成6年
- 『群馬縣北甘楽郡史』本田亀三著 昭和3年
- 『上野国神社明細帳10』群馬県文化事業振興会 平成17年
- 『富岡甘楽平成神社明細誌』群馬県神社總代会富岡甘楽支部 平成5年
- 『緑樹 潤音禪師三百年遠誼大法会記念誌』潤音禪師三百年遠誼大法会実行委員会 平成6年

85 慈眼寺 [じげんじ]

表85-1

寺院名	西光山魯鈞院慈眼寺	所在地	甘楽郡南牧村千原字下千原407
宗派	天台宗	所有者・管理者	宗教法人 慈眼寺
主本尊	阿彌陀如來	仏事	般音祭(4/18)、除夜祭(12/31)
創立・沿革	建久6年(1195)伊豆国久須美城から慈眼尼がその孫工藤房丸祐時を伴って、宇藤塚に寺を建設し、慈眼寺と名付けたとされる。享保年間(1716~1736)と文化2年(1806)の二度火災により焼失しているがその都度再建され、文化10年(1814)十八世妙寛が再建した物を補修しつつ現在に至る(『群馬縣北甘楽郡史』、住職聞き取り)。		
文化財指定	なし		

位置・配置(図85-1、写85-1)

県道45号下仁田上野村線を下仁田から南牧へ向け西進し、県道202号黒竜山小沢線との分岐から1kmほどに位置する。南牧川の北側にあり、小高い斜面の中腹にある。境内正面の参道に面して旧磐戸中学校の校舎と校庭が広がり、その北東には南牧小学校がある。

山門をくぐると、左手に鐘楼、正面に本堂、右手に庫裡、正面の高台には観音堂が設けられている。観音堂の本尊は「千原觀音」として信仰の対象となっている。



図85-1 配置図



写85-1 境内全景

由来および沿革

建久6年(1195)伊豆国久須美城から慈眼尼がその孫工藤房丸祐時を伴って、宇藤塚に寺を建設し、慈眼寺と名付けたとされる。寺のあったところは、南牧川と大塩沢川の合流点の三角州の辺りで、その後、大塩沢川の氾濫によって流没し、現在は一つの古墳を残すのみである。

境内には江戸時代末期の幕臣で、明治元年(1868)に結成された彰義隊副頭取だった天野八郎の墓碑が建立されている。

本堂(図85-2、表85-2、写85-2~85-7)

『群馬縣北甘楽郡史』によると、享保年間(1716~1736)と文化2年(1806)の二度火災により焼失しているがその都度再建され、文化10年(1814)十八世妙寛が再建した物を補修しつつ現在に至ると伝える。

規模は正面7間、側面8間、入母屋造、妻入、銅板葺。内部は6間取り、手前から、縁、外陣一室、内陣、内陣左に不動の間、右に上座となる。内陣には須弥壇を置く。

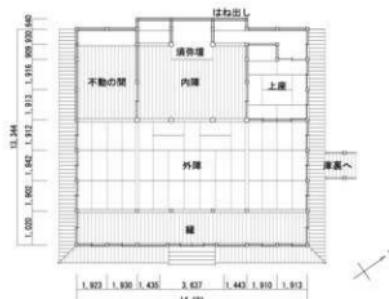


図85-2 平面図(本堂)

外部は、正側面三方縁を廻らし、木階三級を付す。軸部は、切目長押、内法長押、頭貫、台輪で固めている。

組物は出組、大斗肘木、中備は幕股、彫刻嵌め込みとする。柱間装置は、正面中央1間を棟唐戸、その両脇1間を火灯窓とし、それ以外は漆喰塗壁、アルミサッシとする。軒は一軒疊垂木とし、妻飾は蕪懸魚鰯付、笈形、虹梁。彫刻は木鼻、水引虹梁、幕股、支輪、欄間と多く見られるが、そのほとんどが内部であり、外部は簡素に作られている。内部は、豊數の外陣と上座、板張りの内陣、不動の間と縁、はねだし部からなり、天井は内陣と外陣中央は格天井、外陣両脇、上座、不動の間と縁は竿縁天井とする。

屋根は当初瓦葺であったが、大正10年(1921)トタン葺とし、平成10年(1998)に現在の銅板葺となる。

まとめ

内部には簀欄間や多数の彫刻欄間が施されており、裏面に大谷政五郎の墨書きのあるものが内外陣境の欄間にある。このことから文化10年(1813)に再建された建物とみてよかろう。外陣の天井には天井画があり、十二支、天女、達磨、花などが描かれている。中央部分には格子9個分の大きな龍が描かれている。

向拝はなく外観は簡素であるが、内部には様々な彫刻が施されており見ごたえがある。

(齊藤朋行)

【参考文献】

『群馬縣北甘楽郡史』本田亀三著 昭和3年

『上野国寺院明細帳3』群馬県文化事業振興会 平成7年

『甘楽野古寺巡参』深澤武著 昭和57年

表85-2 本堂

建造年代／根据	19世紀前期／建築様式	構造・形式	正面7間(14.19m)、側面8間(13.98m)、入母屋造、妻入、銅板葺
工 匠	不明	基 础	基礎、礎石
軸 部	角柱、頭貫、台輪、内法長押、切目長押	組 物	出組、大斗肘木
中 備	幕股、彫刻	軒	一軒疊垂木
妻 飾	蕪懸魚鰯付、笈形、虹梁	柱 間 彫 置	引戸(棟唐戸)、火灯窓、アルミサッシ、漆喰塗壁
縁・高欄・脇障子	三方切目縁	床	〔上座・外陣〕壇 〔内陣・不動の間・縁〕板張
天 井	〔内陣〕格天井 〔外陣〕格天井(天井画) 〔外陣両脇・不動の間・上座・縁〕竿縁天井	須弥壇、扇子、宮殿 須弥壇	須弥壇、扇子、宮殿
塗 裝	素木、極彩色(欄間、組物、妻飾)	飾 金 物 等	隅木飾
絵 画	〔外陣〕天井画(十二支、天女、達磨、花、龍、人物)	材 質	不明
彫 刻	支輪(雲、波、鳥、松、菊、牡丹、团扇、扇子)、欄間(天女、雲、波、龍、鶴)、木鼻(獅子頭、狛)、幕股(花)		



写真85-2 外観：正面



写真85-3 外観：側面



写真85-4 外観：妻飾り



写真85-5 内観：天井画



写真85-6 内観：外陣 組物・欄間彫刻



写真85-7 内観：須弥壇

86 (星尾)吉祥寺 ((ほしお)きちじょうじ)

表86-1

寺院名	量産山多聞院吉祥寺	所在地	甘樂郡南牧村大字星尾182
宗派	天台宗	所有者・管理者	宗教法人 吉祥寺
主本尊	毘沙門天(多門天)	仏事	威怒半歲不動尊祭(4/28)、花祭り(5/8)、除夜祭(12/31)
創立・沿革	天正年間(1573~1592)重守法印の開基と伝えられ、開基以来数度の火災にあう。元禄巳年(1689)下仁田の清泉寺の末寺となつたが、明治11年(1878)1月同寺を離れ、明治14年(1881)12月、比叡山延暦寺の末寺となり現在に至る。		
文化財指定	なし		

位置・配置 (図86-1、写86-1)

南牧村の西寄り、荒船山の南に位置する。旧尾沢小学校(現南牧村民族資料館)の正門前を右折し、谷に沿って進むと、間もなく左手石垣上にある寺が見える。寺の三叉路を右折して北上すれば、道場を経て毛無岩に至る。一方左に進むと、中庭、大上を経て線ヶ瀧、威怒半歳不動を経て、星尾峠頂上、荒船山頂に達する。境内南に位置する山門をくぐると、右手に鐘楼、威怒半歳不動堂と続き、正面に本堂がある。

由来および沿革

天正年間(1573~1592)重守法印の開基と伝えられ、開基以来数度の火災にあう。元禄巳年(1689)下仁田の清泉寺の末寺となつたが、明治11年(1878)1

月同寺を離れ、明治14年(1881)12月、比叡山延暦寺の末寺となり現在に至る。



写86-1 境内全景

本堂 (図86-2、表86-2、写86-2~86-7)

規模は正面7間、側面10間、入母屋、平入、向拝1間唐破風屋根、銅板葺。内部は手前から、縁、外



図86-1 配置図

0 5m 10m 20m



図86-2 平面図(本堂)

陣一室、内陣、内陣左手前に方丈の間、奥に地袋付の和室、右手前に和室、奥に床の間・床脇付の和室となる。内陣には須弥壇を置き、奥には位牌壇があり、さらに奥には1段下がった位牌堂を配置する。位牌堂西側には納戸があるが、後から増築されたものである。内陣兩脇の和室が、当初からそれぞれ2室に分かれていたかは解明できなかった。屋根の形状等から、当初は側面も7間で位牌壇の部分まであり、それより北の下屋部分は後から増築を行ったと推測する。

外部は、正側面三方縁を廻らし、木階3級を付す。軸部は、切目長押、内法長押、差鶴居、頭貫で固めている。

組物は、身舎では拳鼻付二手先、平三ツ斗、大斗肘木、向拝は拳鼻付出組とし、中備は身舎・向拝ともに臺股とする。柱間装置は、正面中央1間の両脇1間のみ火打窓とし、それ以外はアルミ棊唐戸とする。軒は身舎が二軒疊垂木で、向拝は一軒疊垂木とし、妻飾は身舎が猪目懸魚鱗付で、向拝唐破風に兎毛通を飾る。彫刻は身舎では内部欄間に龍、雲、波、天女、向拝では臺股に花、兎毛通に亀と波が彫られている。内部は、疊敷の外陣と板張りの内陣とはねだした位牌堂からなり、天井は外陣が棹縁天井、内陣が格天井とする。欄間彫刻は龍・天女が彫られ、彩色はわずかである。向拝の唐破風懸魚・海老虹梁には

表86-2 本堂

建造年代／根柢	18世紀後期／建築様式	構造・形式	正面7間(13.31m)、側面10間(17.24m)、入母屋造、平入、向拝1間軒唐破風屋根、銅板葺
工 匠	不明	基 础	礎石
軸 部	[身舎]丸柱、八角柱、角柱、切目長押、内法長押、差鶴居、頭貫 [向拝]角柱、海老虹梁	組 物	[身舎]拳鼻付二手先、平三ツ斗、大斗肘木 [向拝]拳鼻付出組
中 備	[身舎]臺股 [向拝]臺股	軒	[身舎]二軒疊垂木 [向拝]一軒疊垂木
妻 飾	[身舎]猪目懸魚鱗付 [向拝]兎毛通、菱形	柱 間 装 置	ガラス格子戸、火打窓
縁・高欄・船障子	切目縁	床	[内陣]板敷 [外陣]疊
天 井	[内陣]格天井 [後陣]竿縁天井 [外陣]竿縁天井	須弥壇・扇子・宮殿	[内陣]須弥壇
塗 装	素木、極彩色(欄間彫刻、海老虹梁、兎毛通)	飾 金 物 等	向拝柱: 香巻
繪 画	なし	材 質	不明
彫 刻	[身舎]欄間(龍、雲、波、天女) [向拝]臺股、兎毛通(亀、波)		



写真86-2 外観：正面



写真86-3 外観：側面・軒



写真86-4 外観：向拝 正面



写真86-5 外観：向拝 側面



写真86-6 内部：組物・欄間彫刻



写真86-7 内部：須弥壇

極彩色が用いられ、絵様は青を基調とした配色となっている。

向拝は、組物や唐草絵様、色彩の違いから、身舎と同年代ではなく増築（江戸末期）と推定する。

山門（図86-3、表86-3、写86-8～86-10）

1間1戸四脚門、入母屋造、平入、銅板葺。両脇に仁王堂を構える。軸部は、頭貫、腰貫で固めている。組物は、平三ツ斗、出三ツ斗とし、中備は幕股とする。柱間装置は両開き板扉、軒は一軒半繁垂木

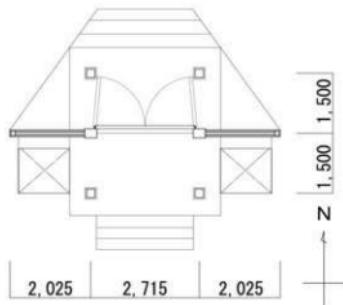


図86-3 平面図(山門)

表86-3 山門

建造年代／根据	19世紀中期／建築様式	構造・形式	1間1戸四脚門(2.72m)、側面2間(3.00m)、入母屋造、平入、銅板葺
工 匠	不明	基 础	コンクリート基礎
軸 部	角柱、頭貫、腰貫	組 物	平三ツ斗、出三ツ斗
中 備	幕股	軒	一軒半繁垂木
妻 飾	懸魚、笈形	柱 間 装 置	両開き板扉
縁・高欄・脇障子	なし	床	なし
天 井	格天井	須弥壇・扇子・宮殿	なし
塗 装	素木、極彩色(虹梁)	飾 金 物 等	小口銅板瓦
絵 画	なし	材 质	不明
彫 刻	幕股(松、雲、波)、木鼻(波)		



写86-8 外観：正面



写86-9 外観：背面



写86-10 外観：組物・彫刻

とし、妻飾は懸魚、笈形とする。彫刻は幕股に松、雲、波、木鼻に波が彫られている。階段・土間部のコンクリート打ちは、後補によるものと考える。虹梁の絵様は、本堂の向拝同様に青を基調とした配色である。

まとめ

本堂・山門ともに建造年代を特定する資料がないため、彫刻や虹梁の若葉の模様等から本堂の向拝と山門は19世紀中期頃と推定する。本堂身舎については、向拝・山門の様に彫刻や組物があまり見られず、簡素なことから、もう少し前の年代18世紀後期と推定する。

床脇、床の間、位牌堂、地袋、納戸部分は後から増築したものと推定するが、いつ頃行われたのか等解明できていない。

(齊藤朋行)

【参考文献】

『甘楽野古寺巡禮』深澤武著 昭和57年

『群馬縣北甘樂郡史』本田亀三著 昭和3年

『上野国寺院明細帳3』群馬県文化事業振興会 平成7年

『南牧村誌』南牧村 昭和56年

89 向陽寺（こうようじ）

表89-1

寺院名	斐伊山高福寺	所在地	甘楽町大字天引甲1401
宗派	曹洞宗	所有者・管理者	宗教法人 向陽寺
主本尊	般若半地菩薩	仏事	不明
創立・沿革	武田信玄の四男（親族との説あり）、武田信綱（法名莊山道嚴大和尚という）が天正10年（1583）5月11日に開山とする。その後徳川の時代と三代家光より慶安2年（1649）8月24日付けで朱印状が下る（『甘楽町誌』甘楽町教育委員会 昭和54年）。		
文化財指定	向陽寺の天井画（町重文 平成25年2月）		

位置・配置（図89-1、写89-1）

向陽寺は国道254線を富岡方面に向かい、甘楽町金井の信号を左折、金井小幡線を南進し甘楽CCへの分岐を左折し300mほどにある。

道路から南に向かい、参道を進むと本堂に至る。右に長屋門裏、その奥に客殿と庫裏が並ぶ。

由来および沿革

向陽寺の由来については、寺伝によると、天長年間（824～834）に鎮護国家の寺として、現在地より約500m東方の入木屋の地に創建されたという。天文

年間（1532～1555）に武田氏一門の望月三郎氏が開祖となり所領九石を寄進して当地に移し、新たに曹洞宗の寺院として再興されたとされる。その後武田信玄の四男（親族との説あり）、武田信綱（法名莊山道嚴大和尚という）が天正10年（1583）5月11日に開山したとする。その後徳川の時代となり三代家光より慶安2年（1649）8月24日付けで朱印状が下った。

本堂（図89-2、表89-2、写89-2～89-6）

境内正面に本堂は位置し北面する。平面は正面9間、側面7間、銅板葺（平成6年（1994）瓦葺から改修）入母屋屋根で平入、正面に向拝は無い。軒は一軒疎垂木で、縁は両側面、背面3面に切目縁が付き高欄、脇障子は無い。身舎は方柱で基礎は切石で土台を廻す。柱間は正面、側面共硝子入のアルミサッシで他は漆喰壁とする。

外部に向拝は無く、組物も無く、柱頂部の舟肘木をしている。入母屋の妻飾は格子組とし、これは平成6年の屋根改修の際に付けられたものであろう。

平面は6間取形式で両脇に入側を持つ。北面の出

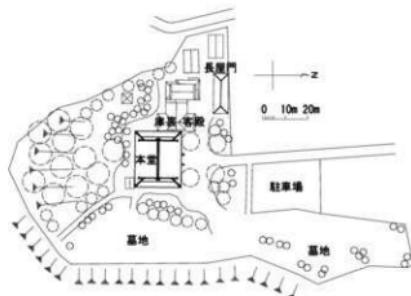


図89-1 配置図



写89-1 境内

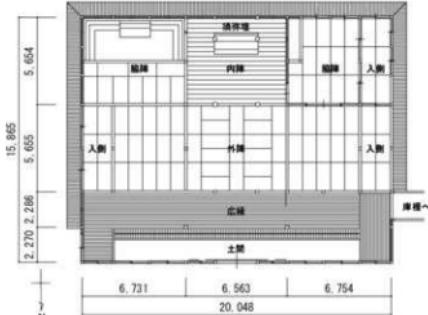


図89-2 平面図(本堂)

表89-2 本堂

建造年代／根拠	18世紀前期／寺伝・虹梁・唐草絵様	構造・形式	正面(20.05m)、側面(15.87m)、入母屋造、平入、銅板葺
工 匠	不明	基 础	切石基礎
軸 部	〔身舎〕角柱	組 物	〔身舎〕舟肘木 〔内部〕出三斗
中 備	なし	軒	一軒疊垂木
妻 飾	格子	柱 間 裝 置	正面アルミサッシ、側面アルミサッシ
縁・高欄・脇障子	東西、南3面に切目縁	床	骨敷一部板張
天 井	格天井	須弥壇・扇子・宮殿	須弥壇
塗 装	〔身舎〕OS塗装	飾 金 物 等	なし
絵 画	〔内部〕天井(龍) 狩野探林門人藤原守應筆	材 質	櫻、檜
彫 刻	〔身舎内部〕虹梁(唐草絵様)		



写真89-2 全景



写真89-3 土間 広縁



写真89-4 内陣



写真89-5 天井絵



写真89-6 檻間影刻



写真89-7 須弥壇裏墨書き

入口を入ると、土間その先に広縁、さらに外陣、内陣と続き、両側に脇陣と入側を配し、間口9間の大寺院である。広縁天井に龍の色彩画が描かれている。狩野探林守美(1732~1777)の門人であった藤原守應が18世紀中頃に描いたとされ甘楽町指定重要文化財に指定されている。

広縁上には、繫虹梁が渡され唐草絵様が彫られている。外陣と内陣の境の柱は櫻の円柱で唐草絵様の彫られた虹梁を渡す。欄間は両側が彩色の透かし彫りの天女の図柄で、中央は龍の彫物である。内陣外陣とも天井は格天井であるが、新しく平成24年(2012)の改修である。

まとめ

建造年については寺伝では正徳4年(1714)の建築とするが、それを証明する資料は見当たらなかった。

虹梁の彫と簡素な渦の巻き方から判断すると寺伝の正徳4年(1714)の可能性は高く、18世紀前期の建造とみる。

(羽鳥 悟)

【参考文献】

『甘楽町誌』甘楽町教育委員会 昭和54年

92 正覚寺（しょうがくじ）

表92-1

寺院名	法藏山大蓮院正覚寺	所在地	沼田市鍛冶町938
主宗派	浄土宗	所有者・管理者	宗教法人 正覚寺
主本尊	阿彌陀如来	仏事	般音祭(4/29)、節分(2/3)
創立・沿革	正応元年(1288)に沼田三郎平景長というものが、今の棟名町に創建した。戦功を上げた2人が出家し、法藏坊と正覚坊と改め、法藏山正覚寺と称した。天正2年(1574)現在の觀音堂付近に移る。慶長17年(1612)真田信之から現在の地を賜り慶応2年(1866)本堂と庫裡を焼失、明治6年(1873)本堂を庫裏跡に再建した(『沼田万華鏡』)。		
文化財指定	正覚寺山門(市重文 平成13年10月)、絹本著色地蔵十王図(県重文 平成6年3月)、大蓮院殿の墓(市重文 昭和51年3月)、正覚寺のコウヤマキ(市天記 昭和51年3月)		

位置・配置(図92-1、写92-1)

沼田市鍛冶町、沼田台地南西端部に位置し眼下に利根川が流れる。県道269号線から石塔・六地蔵が並ぶ入り口から西に参道を進む。正面の山門を潜って境内に入ると直ぐ右に觀音堂、左に墓地が広がり駐車場となる。少し進むと右に蔵、左にコウヤマキ(市指定天然記念物)と稲荷堂がある。さらに進むと正面に地蔵堂(本堂跡)、左に大蓮院墓所と御玉星、右の藤棚の奥に本堂・庫裏がある。本堂西側は庭園となっている。

由来および沿革

『利根郡誌』、『沼田万華鏡』によると、正応元年(1288)に沼田三郎平景長というものが棟名町に清雲庵を創建し、その後応永12年(1405)法善覺心上人が、この庵に住まわれ念佛を広める。応永年間(1400年頃)に沼田勘解由左衛門尉平景世の家臣二人が出家し法藏坊・正覚坊と名乗った。天正2年(1574)に現在の觀音堂付近に移り、法藏山正覚寺と改めた。慶長17年(1612)沼田城主真田伊豆守信之が城下町割



写92-1 境内全景

を改正し現在地を賜り移転する。元和6年(1620)に真田信之室小松姫が死去、分骨にて当寺に埋葬、大蓮院として靈廟(現在は昭和30年代に再築したもの)を築く。これにより本多家より三葉立葵の家紋を用いることを許された。真田家より多くの寄付を受けて、寛文8年(1668)には本堂庫裏靈廟の修理も行われているが、真田氏改易により寄付地は没収されてしまう。慶応2年(1866)8月3日山門を残して全焼してしまい、明治6年(1873)現本堂を庫裏跡に仮の本堂として庫裏を再建した。当寺に正本堂再建



図92-1 配置図

の図案が残されている。昭和51年(1976)大運院殿の墓が市重文、正覚寺のコウヤマキが市天然記念物、平成6年(1994)絹本著色地蔵十王図が県重文、平成13年(2001)正覚寺山門 附-小彫刻「亀仙人」が市重文にそれぞれ指定される。

本堂・庫裏(図92-2、表92-2、写92-2~92-7)

建造年代は寺伝万地由来が書かれている文書による、明治6年(1873)が建築様式で見ても妥当である。当初の本堂は慶応2年(1866)に焼失している。

正面34.53m、側面14.06m、入母屋造平入鋼板瓦棒葺(当初不明 昭和初期に改修されていると考察)で本堂正面に1間の向拝が付く、本堂と庫裏が横に一体となっている建物で、左が本堂、右が庫裏

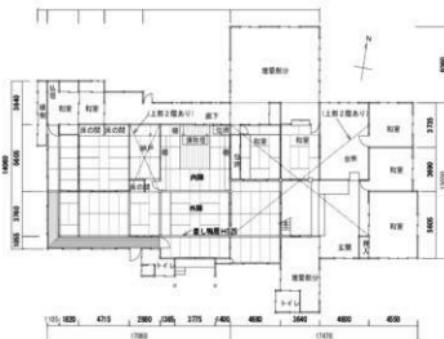


図92-2 平面図(本堂・庫裡)

表92-2 本堂

建造年代／根拠	明治6年(1873)／伝承	構 造 ・ 形 式	正面34.53m、側面14.06m、入母屋造、平入、向拝1間、鋼板瓦棒葺(当初不明)
工 匠	不明	基 础	基壇一段
軸 部	[身舎]土台、角柱、内法長押、差鶴居 [向拝]角柱、水引虹梁	組 物	[身舎]なし
中 備	[身舎]なし [向拝]彫刻蟇股	軒	[身舎]二軒繁垂木、板支輪(彫刻) [向拝]二軒繁垂木、肋垂木
要 飾	虹梁斗拱(一重)、燕懸魚	柱 間 装 置	アルミサッシ、漆喰壁
縁・高欄・脇障子	なし	床	[外陣]疊敷 [内陣]板張 [その他]居室は疊敷
天 井	[外陣]格天井、[内陣]竿縁天井 [その他]竿縁天井	須弥壇	須弥壇、厨子
塗 装	素木、極彩色(欄間彫刻)	飾 金 物 等	なし
絵 画	[内陣]天井画(龍)	材 質	檜、杉
彫 刻	[身舎外陣]欄間彫刻(十六羅漢) [向拝]木鼻(獅子)、裏股(波と雀)、毛毬通(亀)、虹梁(唐草絵様)		



写92-2 全景



写92-3 側面



写92-4 向拝



写92-5 向拝虹梁と組物



写92-6 外陣から内陣



写92-7 内陣須弥壇と厨子

となっていて庫裏部分には2階もある。本堂外陣内陣と庫裏の古い部分の柱は檼で、庫裏玄間に1尺を超える柱がある。また、内陣の差し鶴居には高さ500mm超えるものが使われている。本堂西側の柱は杉で材料を違えているが、小屋裏を見ると梁が一体に架けられているので同時期の建築であると思われる。庫裏を本堂に先駆けて再建し仮本堂としたためか装飾は少なく、組み物・彫刻は向拝に見る程度である。同時期に土岐沼田城の払い下げが行われていることもあり、沼田城の古材が使われている部分があるとの伝承がある。柱内法寸法が3.62m(11.94尺)であること、一部斜材(筋交い)が使われていることなどから19世紀末期、明治期であろうと推定できる。増築改造が各所行われている。

山門 (図92-3、表92-3、写92-8~92-13)

寺伝によれば、建造年は万延元年(1860)とされている。建築様式から見ても万延元年頃が妥当である

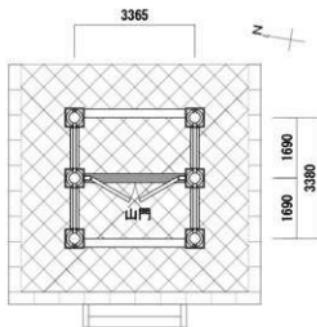


図92-3 平面図(山門)

表92-3 山門

建造年代／根拠	江戸末期／建築様式、寺伝	構造・形式	1間1戸四脚門(3.36m)、側面1間(3.38m)、入母屋造、平入、千鳥破風付、軒唐破風付、銅板瓦葺蓋
工 匠	[影工]豊琳斎(初代岸亦八 新田郡山神村)	基 墓	礎 基壇1段、礎盤
軸 部	角柱、地貫、腰貫、頭貫、台輪	組 物	実肘木付二手先
中 備	彫刻嵌込、彫刻棗股	軒	二軒垂木
妻 飾	彫刻懸魚	柱 間 装 置	棟唐戸
縁・高欄・脇障子	なし	床	石正方形斜敷
天 井	格天井	須弥壇・扇子・宮殿	なし
塗 装	素木	飾 金 物 等	[线唐戸]丁番、隅金具、辻金具、一文字金具
繪 画	なし	材 質	檜
彫 刻	虹梁(唐草文様)、木鼻(獅子)、嵌込彫刻(物語人物像)、彫刻棗股(龍)、鬼毛通、懸魚		



写92-8 全景



写92-9 侧面



写92-10 背面



写92-11 軒



写92-12 組物



写92-13 扉上彫刻

うと推定する。棟梁は不明であるが、彫工は門扉上部欄間彫刻左下に名があり、豊琳斎（岸亦八）である。

1間1戸の四脚門で正面3.36m、側面3.38m、入母屋造平入銅板瓦葺、正面に千鳥破風と唐破風を持つ、全体が素木造りで彫刻が上部に多く施されている。彫刻は絵様彫刻が梁上にあり、鉄揚仙人、鶴仙人と亀仙人他二十四孝の一つなどの図と上段に鶴、その下に唐獅子の図が彫刻されている。門柱上部の柱自体に彫刻が施されているのは珍しい。組物は実肘木付手先としている。沼田市内に現存の山門は少なく、建築技法や彫刻に江戸時代後期の特徴を見ることができる。

豊琳斎とは県内の多くの寺院、神社、祭屋台に彫名を残す岸亦八であり、彫刻師集団 亦八グループの彫刻及び足跡を知る事ができる建築物である。彫

刻の密度、冠木の唐草文様の装飾化、台輪を二重に設けて間を欄間彫刻で埋めて柱まで彫刻を施すなど各所に珍しい様式を用いており、江戸末期の建築様式を顕著に表している。

かんのんどう 観音堂 (図92-4、表92-4、写92-14~92-19)

建造年は江戸時代後期～明治初期と建築様式などから推定できる。創建は、縁起書によると、天正2年(1574)となっているが、観音堂証文によると元禄16年(1703)となっている。屋根の葺き替えは昭和52年に行われている。

正面6.48m、側面6.43m、お堂造寄棟屋根銅板瓦棒葺（当初茅葺）で正面に1間の向拝がある。外部の造りは素朴で、壁は大壁となっており後世の改修によると思われる。内部は一室で来迎柱上部に出三斗、台輪付木鼻を持っている。天井は格天井で鏡板

表92-4 観音堂

建造年代／根拠	江戸時代後期から明治初期／建築様式	構 造 ・ 形 式	正面6.48m、側面6.43m、寄棟造、向拝1間 唐破風屋根、銅板瓦棒葺（当初茅葺）
工 匠	不明	基 础	切石、礎盤
軸 部	[身舎]丸柱(内部4本)、角柱、土台、虹梁〔向拝〕角柱、虹梁	組 物	[身舎]拳鼻、実肘木付出三斗(来迎柱)
中 備	板幕股	軒	一軒疎垂木
妻 飾	なし	柱 間 装 置	蔀戸、折戸、漆喰壁
縁・高欄・脇障子	なし	床	板張
天 井	格天井	須弥壇・厨子・宮殿	須弥壇・厨子
塗 装	素木	飾 金 物 等	なし
絵 画	天井画(龍、家紋、動植物)	材 質	檜、杉
彫 刻	木鼻(溝)、葵股(凸紋)、虹梁(唐草文様)		



写92-14 全景



写92-15 全景



写92-16 背面



写92-17 須弥壇



写92-18 組物



写92-19 天井画

に龍と家紋と動植物の絵が描かれ明治18年(1885)の年号が見られる。須弥壇上には、厨子を中心と100体観音が並ぶ。毎年4月29日に御開帳され観音祭が行われる。

来迎柱上部木鼻の文様が珍しく渦が小さく若葉を持つ、墓股も建ちは高いが脚の末端が渦になってしまいなどの特徴から推定する。

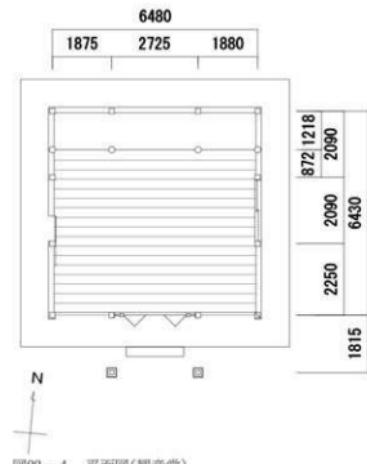


図92-4 平面図(観音堂)

地蔵堂 (図92-5、表92-5、写92-20~92-22)

建造年は江戸末期～明治初期と焼失した本堂跡に建っていることにより推定する。

1辺1.03mの六柱造銅板平葺、軒を扇垂木としている。切石の上に土台敷丸柱を6本立て貫構造とし、切目縁、長押を廻す。出組は六角形に合わせて変形したものが付く、柱上部のみ色彩があり外部は朱塗り、内部は板彩色で塗られ墓股に彫刻もある。子安地蔵が安置されている。

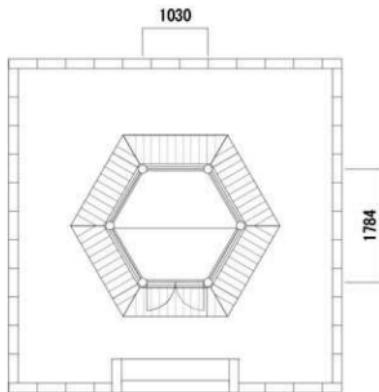


図92-5 平面図(地蔵堂)

表92-5 地蔵堂

建造年代／根据	江戸末期から明治初期／建築様式	構造・形式	六柱造一辺1.03m、銅板平葺
工 匠	不明	基 础	切石
軸 部	丸柱、地長押、内法長押、頭貫、台輪、土台	組 物	拳鼻、実肘木付出組変形
中 備	斗付板墓股	軒	一軒扇垂木
妻 飾	なし	柱 間 裝 置	棟唐戸、板壁
締・高欄・船障子	六方切目縁	床	板張
天 井	板張	須弥壇・厨子・宮殿	なし
塗 装	朱塗、板彩色(内部柱上)、素木	飾 金 物 等	【長押】出隅金具 【棟唐戸】隅金具、一字金具
絵 画	なし	材 質	檜
彫 刻	拳鼻・実肘木(渦)、墓股内側(植物)		



写92-20 全景



写92-21 外部軒裏



写92-22 内部

表92-6 鐘樓

建造年代／根拠	江戸末期から明治初期／建築様式	構造・形式	正面1間(2.69m)、側面1間(2.69m)、切妻造、銅板瓦棒葺、待腰付
工 匠	不明	基 础	切石
軸 部	角柱、地貫、腰貫、桁、梁	組 物	なし
中 備	幕股	軒	一軒疊垂木
妻 飾	なし	柱 間 裝 置	「額」下見板張
縁・高欄・脇障子	なし	床	板
天 井	なし	須弥壇・扇子・宮殿	なし
塗 装	素木、檜彩色(幕股)	飾 金 物 等	なし
絵 画	なし	材 質	檜、松
彫 刻	幕股(波)		



写92-23 全景



写92-24 側面



写92-25 幕股

2690

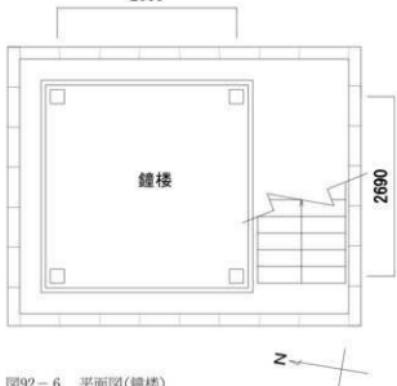


図92-6 平面図(鐘楼)

木鼻、実肘木の渦と幕股の形状をみると19世紀後期の様式と思われる。

鐘 樓 (図92-6、表92-6、写92-23~92-25)

建造年は江戸末期～明治初期と慶應2年(1866)に焼失していることから推測する。第二次大戦において鐘と大仏像を軍に供出し、現在の鐘は昭和29年(1954)に檀家寄進により再製されたものである。大仏も昭和58年(1983)に再建されている。

正面2.69m、側面2.69m、切妻造銅板瓦棒葺(当初不明)妻入、正面にのみ幕股を持つ、切石の上に土台敷、角柱を傾斜させて立て頭を桁で繋いだ鐘楼の形式である。

年代の様式を装飾で見られるのは幕股のみで脚が大きく伸びていて19世紀後半と思われる。

まとめ

真田家に加護を受けた当寺は、真田家に関する文化財が多く残されている。真田昌幸が沼田を訪れた際、小松姫(大蓮院)によって城中に入れず、後に正覚寺にて休まれたのは有名な話である。沼田市において重要な役目を負った人の墓が多くあり、沼田公園を私財により造営した久米民之助氏の墓もある。観音祭は、祇園祭と並び人手が多く出る縁日であり、沼田の歴史の上で重要な寺院であり、山門は彫工の確定、彫刻密度、江戸末期の年代様式において貴重な建物である。

(櫻澤 齊)

[参考文献]

『沼田市文化財台帳』沼田市 平成13年

『沼田市史 別巻2 沼田の建造物』沼田市 平成11年

『利根郡誌』群馬県利根教育会 昭和5年

『沼田万華鏡 第25号』沼田郷土研究会 昭和60年

93 町田坊〔まちだぼう〕

表93-1

寺院名	町田坊	所在地	沼田市町田町甲425
宗派	天台宗寺門宗	所有者・管理者	宗教法人 町田坊
主本尊	聖観音	仏事	春祭(4月)、小祭(10月)
創立・沿革	町田坊は天台宗西京聖護院末派に属し、天仁元年(1108)に修驗万福院良圓によって開基・創建された。何度も火災に見舞われて、文政13年(1830)に焼失し、天保3年(1832)再建され現在の建物観音堂となった(「薄根村誌」)。		
文化財指定	町田坊觀音堂(市重文 平成25年3月)		

位置・配置 (図93-1、写93-1)

町田坊は沼田市街から北側の薄根川を挟んだ河岸段丘下に位置する天台宗寺院である。南西道路より境内に入ると広い整地された場所があり、右奥に石仏・石宮群、東側に集会所、北側正面の一段高い地盤上に沼田市街を向いて觀音堂が建っている。觀音堂左側奥に石仏・石塔・石宮群が並び、その手前は庭園となっている。

由来および沿革

「薄根村誌」によれば、町田坊は天台宗西京聖護院末派に属し、天仁元年(1108)に修驗万福院良圓によって開基・創建され、幕岩山町田坊と称し、後に觀音寺と号した。また、開基年が元永年との記載が『上野国寺院明細帳』にある。天正時代に住職の一音院にちなんで一音坊と称したこともある。何度も火災に見舞われ、近くは文政13年(1830)に觀音堂が焼失し、天保3年(1832)に再建されたのが、現在の觀音堂である。明治7年(1874)に近江國園城寺末派に属す。現在は、天台宗寺門派に属する、本堂や庫裏は現存しない。

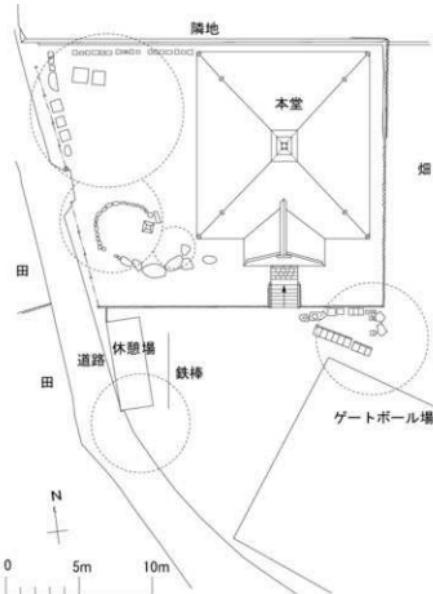


図93-1 配置図

觀音堂 (図93-2、表93-2、写93-2~93-7)

觀音堂の創建は不明である。諸説あるが一説によると、他の地にあった草堂が野火により焼失したため、由緒ある町田坊境内にお堂を建てて本尊を安置した。本尊は聖観音像の小黄金仏で、秘仏とされている。その後、火災により觀音堂が焼失。棟札の写しに天保3年(1832)に再建された旨が記載されている。昭和53年(1978)に屋根を瓦葺から銅板葺に改修されている。

規模は正側3間、側面4間の方形造の小堂で、正



写93-1 境内全景

面に1間の唐破風の向拝が付く。内部は一室で境に2本の丸柱を建て、手前2間を外陣で疊敷、奥2間を内陣で板間とし、須弥壇上に多くの木像、中央に厨子を置く。四方に擬宝珠付高欄が付いた切目縁が廻る。

組物は、外部を尾垂木・拳鼻・実肘木付二手先、内外部外陣を拳鼻・実肘木付出三斗、向拝を実肘木付二手先としている。軒は二軒繁垂木で、向拝の兎毛通に鳳凰の彫刻が見られる。

彫刻は、小林源太郎の作で虹梁の唐草文様、水引虹梁上部、手挟、欄間、天井支輪、軒支輪、木鼻などに見られる。手挟、軒支輪、天井支輪、内部欄間に極彩色を施すが、全体的に櫛の素木造りである。中でも身舎側面の木鼻に見られる透かし彫りの牡丹の匠さと、向拝の木鼻の獅子は全身が象られ非常に躍動的である。また内陣部の格天井には、数々の動植物、縁起物が描かれている。

厨子は入母屋造千鳥破風、唐破風付きで漆塗り金箔で装飾されている。

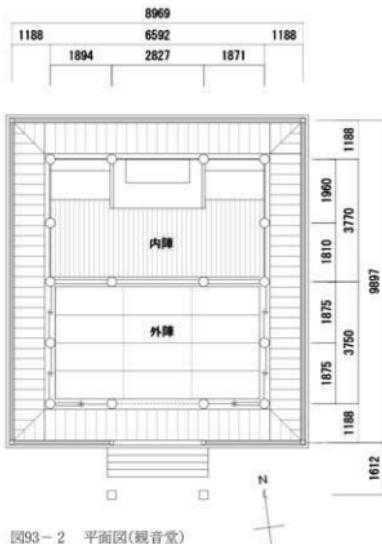


図93-2 平面図(観音堂)

表93-2 観音堂

建造年代／根据	天保3年(1832)/棟札	構造・形式	正面3間(6.59m)、側面4間(7.52m)、方形造、向拝1間唐破風付、瓦型銅板葺(当初瓦葺)
工 匠	[大工] 棟梁 群馬郡新井村 松岡出雲正藤原富盛、脇梁 群馬郡 原沢芳五郎保嘉 [彫工] 小林源太郎正俊	基 础	礎 切石丸面取
軸 部	[身舎] 土台、丸柱、地長押、内法長押、差鴨居、頭貫、台輪 [向拝] 角柱、水引虹梁、海老虹梁、手挟	組 物	[身舎外部] 尾垂木・拳鼻・実肘木付二手先 [身舎内部] 拳鼻・実肘木付出三斗(外陣) [向拝] 実肘木付二手先
中 備	[身舎]なし [向拝] 彫刻嵌込	軒	[身舎] 二軒繁垂木、板支輪(彫刻) [向拝] 二軒繁垂木、助垂木
妻 飾	なし	柱 間 裝 置	蔀戸、格子戸(正面)、格子戸、板壁
縁・高欄・脇障子	四方切目縁、擬宝珠高欄	床	[外陣] 疋敷 [内陣] 板張
天 井	[外陣] 格天井 [内陣] 等縁天井	須弥壇・厨子・宮殿	須弥壇、厨子
塗 装	素木、極彩色	飾 金 物 等	なし
繪 画	天井画(植物、動物、縁起物)	材 質	檜、杉
彫 刻	[身舎外部] 虹梁(唐草文様)、木鼻(獅子、牡丹)、拳鼻(渦)、板支輪(波、鶴、草花、鳥、物語、童子)、欄間(物語) [身舎内部] 虹梁(唐草文様)、天井支輪(波、花、物語)、欄間(親子獅子) [向拝] 虹梁(波に雀)、木鼻(龍)、彫刻蔓股(龍)、手挟(松と鳥)、兎毛通(鳳凰)		



写93-2 全景



写93-3 侧面



写93-4 向拝



写93-5 向拝海老虹梁



写93-6 内部虹梁



写93-7 内陣須弥壇と厨子

まとめ

観音堂は沼田市町田町の住民により大切にされ、現在まで素晴らしい姿を見せている。明治維新から昭和初期にかけて一時屋根が崩れるほどの荒廃した時期があったが、近隣地域の人々の多くの寄進により修繕されている。現存する近世寺院建築の仏堂において、彫工は権名神社双龍門を手掛けた名工小林源太郎であり、彫刻が細かく立体的になる江戸後期寺社建築の装飾化を良く表し、今回棟札は確認でき

なかったが、棟札写しにより建造年代も特定できていって、方形造の平面形式など時代を表した優れた建築物である。

(櫻澤 齊)

【参考文献】

『沼田市史 別巻2 沼田の建造物』沼田市 平成11年
『薄根村誌』薄根村誌編纂委員会 昭和34年

94 遊葉山龍華院（かしょうざんりゅうげいん）

表94-1

寺院名	遊葉山龍華院	所在地	沼田市上堀町445
宗派	曹洞宗	所有者・管理者	宗教法人 遊葉山龍華院
主本尊	聖観世音菩薩	仏事	三朝祈願（1/1-3）、節分（2/3）、祝迦降誕祭（5/8）、祇園祭（8/3-5）、積尊成道会（12/8）
創立・沿革	嘉祥元年（848）円仁（慈覚）大師が国家安泰の鎮守寺としたのが始まりである。康正2年（1456）天台宗から曹洞宗に改宗した。現在は本尊、聖観世音菩薩を祀る本堂、観音堂（奥の院）、遊葉堂などが点在している（『沼田市史』）。		
文化財指定	馬かくれスギ（市天記 昭和51年3月）		

位置・配置（図94-1、写94-1）

沼田より16km、北に谷川連山、東西に赤城・榛名を臨む景勝地、関東の靈域として名高い標高1,322mの遊葉山に位置する。

境内は南面に道路、東面に駐車場、西、北面が山林に接しており、本堂は南を正面として配置されている。本堂の東に書院、典座寮、便所、斎堂、籠堂、衆祭、厨房、旧職員寮が位置する。斎堂の南に洗面所、浴棟の他、危険物倉庫、車庫も見られる。籠堂の北には廊下で納屋、丈室、茶室が置かれ、茶室の北西に開山堂がみられる。西側の石段を上ると、参道の西に手水舎があり、東に受付の龍顧閣、正面に中峯堂、さらに階段を上ると奥殿がある。中峯堂から西に渡り廊下が置かれ、鐘楼、青少年研修道場へと続く。受付龍顧閣の東に中雀門が置かれ、その先、石段を上がり切った正面に遊葉堂が配置されている。

関東三大天狗の御山として知られている遊葉山。弥勒寺は近世初期の「加沢記」に「真言秘密の堂（道）場」とあり、密教や修験道の修業が伝統的に行われていた。



写94-1 境内全景

由来および沿革

嘉祥元年（848）上野国大守が比叡山より円仁（慈覚）大師を招き、國家安泰の鎮守寺としたのが始まりである。康正2年（1456）当時の住職慈雲律師が来山した天糞慶順禪師に寺を譲り、その際天台宗から曹洞宗に改宗した。後に、徳川家康公の祈願所になった。現在は本尊、聖観世音菩薩を祀る本堂をはじめ、天糞禪師が修行した和尚台（奥の院）、靈域の入口の馬かくれスギなどが広大な敷地に点在している（『沼田市史』）。



図94-1 配置図

觀音堂（奥の院）（図94-2、表94-2、写94-2～94-7）

建造年代は棟札により、享保11年(1726)とする。奥山の絶壁岩山に喰い込ませ、岩床に東を直建して、正面3間（2.73m）、側面2間（2.44m）、背面

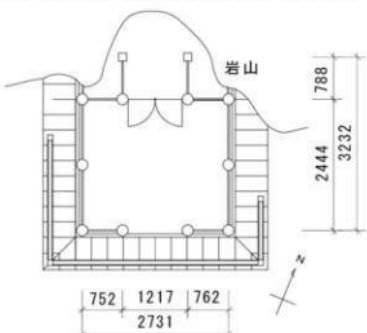


図94-2 平面図（觀音堂（奥の院））

表94-2 觀音堂（奥の院）

建造年代／根据	享保11年(1726)／棟札	構造・形式	正面3間(2.73m)、側面2間(2.44m)、寄棟造、背面中央部1間張出懸造、トタン葺
工 匠	不明	基 础	地山直束建
軸 部	丸柱、出組、地長押、内法長押、頭貫、台輪	組 物	大斗、出三斗、実肘木 身舎内外共
中 備	板幕股	軒	二軒半繁垂木
妻 飾	なし	柱 間 装 置	落込板
縁・高欄・脇障子	正面側面三方縁、高欄付	床	板張
天 井	格天井	須弥壇・扇子・宮殿	なし
塗 裝	素木	飾 金 物 等	なし
繪 画	なし	材 質	[軸部・組物] 檜 [その他] 不明
影 刻	幕股、木鼻		



写94-2 全景



写94-3 側面



写94-4 外観-大斗、出三斗



写94-5 内部-出三斗



写94-6 内部-腰付格子戸



写94-7 幕股

は岩山のままの懸造りのお堂である。東建てした床組の架台の上に建てられている。屋根は寄棟トタン葺屋根、軒は出三斗二軒半繁垂木である。身舎柱は丸柱とし、彫刻は幕股、木鼻にみられる。岩山沿いの山道より縁に入る。

天翼禪師が修行したといわれる由緒あるこの觀音堂は度重なる火災から免れている。

迦葉堂（图94-3、表94-3、写94-8～94-10）

中雀門を抜け、石段を上った先に建つお堂である。山を背にした銅板葺き漆喰塗の簡素な造りである。正面3間（5.60m）側面5間（5.58m）の方形で、正面に向拝1間が付く。側柱は角柱で大斗肘木を置く。向拝は一軒繁垂木、その他は一軒半繁垂木とする。幕股、唐草絵様、木鼻などの特徴により、18世紀前半から中期の建造と推定される。63枚の天井画および須弥壇下の腰板には草や木の花の絵柄が描かれている。

表94-3 遊葉堂

建造年代／根拠	18世紀前半～中期／建築様式	構造・形式	正面3間(5.60m)、側面5間(5.60m)、背面6間、方形造、向拝1間、銅板葺
工 匠	不明	基 础	自然石
輪 部	土台 [向拝]木鼻(拳)、手挾、海老虹梁、水引虹梁 [身舎柱・向拝柱]角柱 [来迎柱]丸柱 [内陣外陣境柱]丸柱	組 物	[向拝]大斗、出三斗積上 [来迎柱]大斗、出三斗 [内陣外陣境柱]大斗、出三斗
中 備	[向拝]板葺股 [身舎]実肘木	軒	[向拝]一軒繁垂木 [身舎]一軒半繁垂木
妻 飾	なし	柱 間 裝 置	[正面]火灯窓引分戸 [背面・側面]漆喰壁節子板張
幕・高欄・脇障子	正面及び側面(外陣部)に三方切目縁	床	板張
天 井	格天井	須弥壇・扇子・宮殿	扇子
塗 装	[内陣]木部朱塗 [外陣]木部朱塗	飾 金 物 等	なし
絵 画	絵柄彩色(天井、須弥壇)	材 質	[内陣外陣柱]檜 [来迎柱]檜 [向拝部]檜 [その他]杉、桧、他
彫 刻	虹梁唐草給様、幕股、手挾、木鼻等		



写真94-8 全景



写真94-9 向拝



写真94-10 内陣

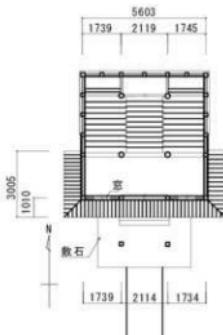


図94-3 平面図(遊葉堂)

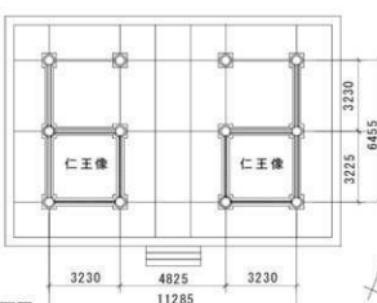
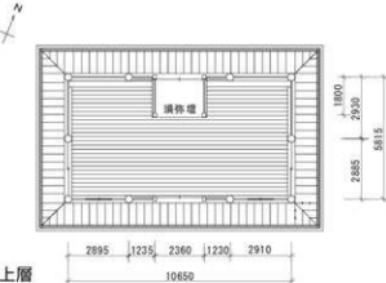


図94-4 平面図(山門)

山門 (图94-4、表94-4、写94-11～94-13)

車道脇の山道を行くと、石造の仁王が迎える。その先にある山門は、仁王像を配した楼門である。棟札に昭和7年(1932)起工、昭和11年(1936)落成ある。銅板葺入母屋造の自然石で基礎を積み上げた3間1戸二階二重門である。上層の屋根は尾垂木、隅尾垂木を配し、三手先積上の二軒扇垂木としている。

表94-4 山門

建造年代／根拠	昭和11年(1936)／棟札	構造・形式	3間1戸二階二重門(11.28m)、側面2間(6.45m)、入母屋造、平入、銅板葺
工 匠	[棟梁]沼田町杉田六太郎、池田村能登安太郎 (棟札)	基 础	基礎、礎盤、地覆石
軸 部	丸柱、地貫、虹梁、頭貫、台輪、木鼻(猿、象)	組 物	[内部]出三斗積上　[外部]下層：二手先積上、上層：三手先積上、尾垂木　[来迎柱]木鼻、台輪、出三斗
中 備	[外部]本蔕胶、彫刻嵌込、琵琶板	軒	下層：二軒繁垂木、上層：二軒繁垂木、隅扇垂木
妻 鮎	懸魚、木束格子、三ツ斗、妻虹梁	柱 間 裝 置	落込板、火灯窓、引分棟唐戸、引違舞良戸
緋・高欄・脇障子	擬宝珠高欄四方	床	拭板張
天 井	[下層]格天井　[上層]板張	須弥壇・扇子・宮殿	須弥壇
塗 装	朱塗、白塗、檍彩色(彫刻琵琶板、絵様)	飾 金 物 等	なし
繪 画	天井画	材 質	[丸柱]櫛
彫 刻	[下層]台輪上大斗の間に雉の彫刻、龍1対　[上層]正面台輪上に唐獅子1対、仁王像前虹梁上に龍の彫刻1対		



写94-11 全景



写94-12 出隅 - 組物



写94-13 1階 - 格天井

る。朱色を基調とした彩色で、琵琶板、彫刻を極彩色とし、小口は白としている。下層の柱、虹梁は素木とし、出三斗で格天井を配している。格天井には板絵が描かれている。

昭和年代に於ける伝統工法の建造物である。

まとめ

天狗のお寺として名高い迦葉山龍華院弥勒寺は、沼田市北部、武尊山系に連なる深山幽谷の浄境、迦葉山にある。通称・迦葉山として親しまれている当院は日本一の天狗面があることでも知られており、京都の鞍馬寺、東京の高尾山薬王院とともに日本三大天狗として数えられている。奉納されている天狗面は天狗神輿として沼田まつりに市内を渡御する。

当院は嘉祥元年(848)、比叡山三祖円仁慈覚大師により鎮守護国寺として開創、その後天翼禪師により改宗開山された。

明治12年(1879)の火災で、本堂、開山堂、衆寮、學寮、鐘楼、回廊、經藏、庫裏、延寿堂、玄関、東司、浴室等を焼失したが、觀音堂は被災を免れている。昭和4年(1929)にも火災があったが迦葉堂、開山堂、土蔵3棟は被災を免れた。その他の現存建物は昭和以降のものである。

(石坂孝司)

【参考文献】

『沼田市史 別巻2 沼田の建物編』沼田市 平成11年
『加沢記』『沼田市史資料編Ⅰ』別冊 平成7年
『利根郡史』群馬県利根教育会 昭和50年

95 東禅寺〔とうぜんじ〕

表95-1

寺院名	福山東禪寺	所在地	沼田市下川田町2550
宗派	臨済宗建長寺派	所有者・管理者	宗教法人 東禪寺
主本尊	勝軍地蔵尊	仏事なし	
創立・沿革	享保2年(1717)に池田地区中発知で開祖し、火災により焼失したため明治26年(1893)に愛宕山勝善寺跡(西倉内町)に移転した。勝善寺は寛保2年(1742)沼田真初代藩主頼念の時建立され、文政10年(1827)沼田真田9代頼功の時、先祖ゆかりの將軍地蔵尊を祀るために大改修し建てられたものである。平成6年7年に移築修理工事が行われ現在地に移された(『沼田市史』)。		
文化財指定	勝軍地蔵雨宝殿(市重文 昭和52年5月)、勝軍地蔵と厨子(市重文 昭和52年5月)、不動明王坐像(市重文 昭和52年5月)		

位置・配置 (図95-1、写95-1)

東禪寺は沼田市の西に位置する臨済宗寺院である。西側駐車場より石段を下り東に進むと、左に参道が曲がり正面に勝軍地蔵雨宝堂があり、その東に渡り廊下で繋がれた庫裏・衆寮が建つ。参道入口より南に、鳥居、土岐家墓地、があり、庫裏西を庭園とし灯籠が数基建っている。

由来および沿革

『沼田市史』によれば、寛保2年(1742)土岐初代藩主頼念が駿河の地より沼田へ封ぜられ、勝善寺(現在の東禪寺)を祈願寺として寛保3年(1743)に建立。先祖ゆかりの勝軍地蔵を愛宕尊殿として祀る。文政10年(1827)9代頼功の時に愛宕殿を大改修

し現在の雨宝殿となる。明治維新後、廃寺となり民間所有となる。明治26年(1893)に東禪寺が買い取り雨宝殿を本堂とした。平成6～7年(1994～1995)に移築改修工事が行われ、現在の地に移った。



写95-1 境内全景



図95-1 配置図

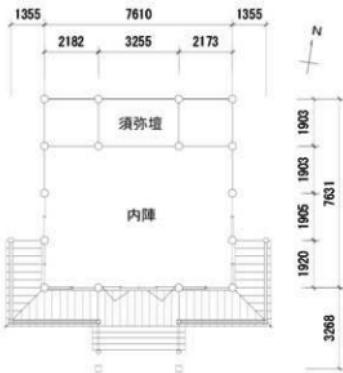


図95-2 平面図(勝軍地蔵雨宝殿)

1. 本調査：寺院建築

勝軍地蔵雨宝殿（図95-2、表95-2、写95-2～95-7）

勝軍地蔵雨宝殿の創建は寛保3年(1743)愛宕殿として建てられた後、文政11年(1828)大改修を行い現在の雨宝殿となる。高欄の擬宝珠全てに年号が刻印されていて、2種の刻銘を残している。

その規模は正面3間、側面4間の入母屋造りので、正面に千鳥破風と1間の唐破風の向拝が付く。

表95-2 勝軍地蔵雨宝殿

建造年代／根拠	文政11年(1828)／高欄擬宝珠刻印	構造・形式	正面3間(7.61m)、側面4間(7.63m)、入母屋造、平入、千鳥破風付、向拝1間唐破風付、銅板瓦棒葺
工 匠	不明	基 磡	基壇1段切石3層、龟腹、礎盤
軸 部	[身舎]土台、丸柱、地長押、内法長押、差鶴居、腰貫、頭貫、台輪 [向拝]角柱、水引虹梁、海老虹梁、手挾	組 物	[身舎外部]拳鼻・実肘木付出三斗 [身舎内部]拳鼻・実肘木付出三斗(来迎柱) [向拝]拳鼻・実肘木付出組と実肘木付二手先の連斗複合斗構
中 備	[身舎]嵌込彫刻 [向拝]嵌込彫刻	軒	[身舎]二軒繁垂木、板支輪(彫刻) [向拝]二軒繁垂木
妻 飾	虹梁斗横(一重)、漆喰錦絵、懸魚(蕉)	柱間裝置	棟唐戸折戸(正面)、舞良戸、漆喰壁
縁・高欄・脇障子	三方切目縁(正面と側面の1間まで)擬宝珠高欄、脇障子(板)	床	疊敷
天 井	格天井	須弥壇・厨子・宮殿	須弥壇、厨子(須弥壇中央と左右)
塗 装	素木、極彩色(内部天井支輪)	飾金物等	内部長押:釘隠(桔梗)、格天井:辻金具、垂木:小口金具、棟唐戸:隅金具、辻金具、一文字金具、千鳥破風・向拝唐破風:拌み、腰、破風戸金具
繪 画	天井画(桔梗紋、龍、花文様)	材 質	檜、杉
彫 刻	[身舎外部]虹梁(波、唐草文様)、木鼻(獅子)、拳鼻(渦)、板支輪(波)、欄間(人物)、棟唐戸(亀、虎、鳥、龍) [身舎内部]虹梁(唐草文様)、天井支輪(波と蓮)、欄間(人物) [向拝]虹梁(波)、木鼻(龍)、彫刻幕戸(人物)、手挾(葡萄)、兎毛通(鳳凰)		



写95-2 全景



写95-3 背面・側面



写95-4 向拝



写95-5 向拝海老虹梁



写95-6 身舎木鼻



写95-7 内部須弥壇と厨子

内部は一室で手前3間を畳敷、奥1間を須弥壇とし、須弥壇上に厨子を置く。

組物は、外部および来迎柱上部を拳鼻・実肘木付出三斗、向拝の組物は柱上部と虹梁端部唐破風母屋を受ける位置に連続してあり、柱上部は側面に実肘木付二手先とし、正面方向を拳鼻・実肘木付出三斗積上、間に一斗積上を挟んで破風母屋受け位置は、内側に二手先、正面に実肘木付二手先である。軒は

二軒繁垂木で、妻飾りは一重虹梁斗栱で漆喰部分に移築前の漫絵が再現してある。

彫刻は、向拝部分：軒唐破風兔毛通の鳳凰、水引虹梁と海老虹梁、木鼻の龍の尾は海老虹梁に絡みついている、棊股部分は全面彫刻で剣を振るう人物、手挾の葡萄、身舎部分：水引虹梁、木鼻の獅子、欄間彫刻の人物象、板支輪、内部：欄間彫刻の人物像、極彩色の彫刻板支輪などの部分に多く施されている。また格天井には土岐家の家紋である桔梗をあしらった唐紋様が描かれている。本尊の愛宕尊が收められている厨子は入母屋造妻入唐破風付で組物を尾垂木付三手先にし、細かな彫刻と金箔が貼られ見事な造りである。建物の高さが高い事、彫刻の進化度合いと唐草文様のレリーフ化などから見て江戸後期と建物形式からも推定できる。

まとめ

かつて勝軍地蔵雨宝殿は沼田城の城門跡近く沼田市中心部にあり、沼田藩主土岐家の祈願寺として建てられた。見事な造りから土岐家と多くの寄進を出した沼田町の隆盛が感じ取れる。明治期になると土岐家の加護を受けられなくなったことなどにより廢寺となり、東禅寺によって再興されるも、檀家が少なく次第に寂れてしまった。昭和年代には向拝下に大きな赤い提灯が下げられていたが、今は飾られていない。土岐家の歴史、沼田市の歴史を紐解く上にも貴重な建物であり、市内で現存する近世寺院建築の仏堂において、彫刻の進化と細工の細かさ、建造年代の確定、歴史的価値など優れた建築物である。

(櫻澤 齊)

【参考文献】

『勝軍地蔵雨宝殿移築修理工事報告書』東禅寺 平成7年
『沼田市史 別巻2 沼田の建造物』沼田市 平成11年

97 実相院〔じっそういん〕

表97-1

寺院名	龜陀落山實相院	所在地	沼田市星形原町689
宗派	真言宗御室派	所有者・管理者	宗教法人 実相院
主本尊	大日如來	仏事	大般若經転読法要(4/8)
創立・沿革	延暦年代(782~805)実相坊が当地に小庵を開いたことが始まりである。元禄13年(1701)仁和寺御室派總法務親王庁下分寺として、菊花御紋章の使用を許された。現在の本堂、山門はその頃のものである(「文化8年(1812)辛未金剛後應師撰碑による」)。		
文化財指定	なし		

位置・配置(図97-1、写97-1)

利根川と片品川との合流点の西側、直線距離で約700m、子持山山麓東面、星形原町額田に位置し、南北に走る東側の市道を参道の起点としている。

参道を西に進み、石段を上がって山門を抜けると正面に本堂があり、その北に庫裏が連続して置かれ

ている。庫裏の西、石段を上がったところに村の頭訪大明神の社殿も置かれている。山門の北に蔵、その西に味噌蔵、庫裏の東に物置2棟、戸井の覆屋、駐車場がある。境内南側に永大供養塔、鐘楼(平成20年)がある。墓地は本堂の南、畑を挟んで、山裾に広がっている。山門前の石段の上り口の両脇に石塔、西に銅製の地蔵菩薩像、庚申塔、石灯籠が置かれ、南に石仏群が祀られている。参道入口は1対の石柱の門構えとなっており、参道に入ると六地蔵尊が立ち並び、石灯籠が1対ある。石段を上り石畳の参道は山門へと続く。参道の東側は、車道となっている。



図97-1 配置図



写97-1 境内全景

由来および沿革

延暦年代(782~805)に当地篭尾で、実相坊が仏道修行を積む傍ら地域住民の教化に努め小庵を開いたことが始まりとされる。元禄13年(1701)仁和寺御室派總法務親王庁下分寺として、菊花御紋章の使用を許された(「文化8年(1812)辛未金剛後應師撰碑」による)。

本堂 (図97-2、表97-2、写97-2~97-7)

建造年代は棟札より延享2年(1745)である。正面9間、側面6間の寄棟トタン板葺（一軒疊垂木）に唐破風の向拝を付ける。正面出入口の両脇を火灯窓、正面中央間と左側面の各間を3本溝、他を2本溝とする。前方及び側面の一間通りを縁とし、前後3室の計6室を設ける。内部の柱は来迎柱の2本を丸柱とし、他を角柱とする。来迎柱には出三斗を置く。天井は内陣を格天井、他を竿縁天井、内陣の床は上段とし、内陣の後方部と縁を板張、他を畳敷とする。向拝は組物を三斗積上とし、海老虹梁で身舎となぐ。

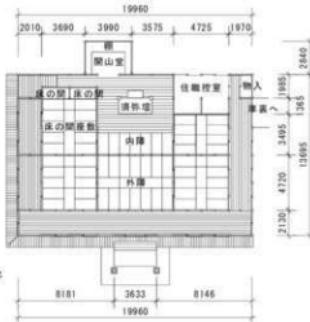


図97-2 平面図(本堂)

表97-2 本堂

建造年代／根拠	延享2年(1745)／棟札	構造・形式	正面9間(19.96m)、側面6間(13.69m)、寄棟造、平入、向拝1間唐破風屋根、トタン板葺(当初茅葺)
工 匠	[大工]宮塚甚平(棟札)	基 础	コンクリート
軸 部	[来迎柱の2本]丸柱 [その他]角柱	組 物	[身舎]舟肘木(外部)、出三斗(内部) [向拝]三斗積上
中 備	[外部]なし [内部]幕股 [向拝]幕股	軒	一軒疊垂木
要 飾	なし	柱 間 装 置	アルミサッシ、火灯窓、漆喰壁
縁・高欄・監障子	二方切目縁	床	[内部]縁は板張 [その他]畳敷
天 井	[外陣]竿縁天井 [内陣]格天井	須弥壇・扇子・宮殿	須弥壇
塗 装	素木、極彩色(欄間彫刻)	飾 金 物 等	なし
絵 画	天井画(向拝)	材 質	[向拝・来迎柱]漆 [その他]杉、桧
彫 刻	虹梁(唐草模様)、幕股、欄間彫刻		



写97-2 全景



写97-3 背面・側面



写97-4 向拝



写97-5 外陣 - 彫刻欄間



写97-6 内陣



写97-7 外陣-組子欄間

山門（図97-3、表97-3、写97-8～97-10）

建造年代は建築の各種特徴から18世紀初期～中期と推定する。トタン板葺（当初は茅葺）に1間1戸の向唐門である。柱は丸柱とし、連三斗を置く。彫刻は虹梁の唐草絵様・蔓股・笈形・木鼻（拳）などにみられる。建物の主要部は檼の素木造とする。

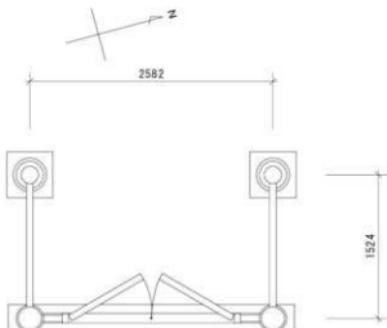


図97-3 平面図(山門)

表97-3 山門

建造年代／根拠	18世紀初期～中期／建築様式	構 造 ・ 形 式	1間1戸向唐門(2.58m)、側面1間(1.52m)、トタン板葺(当初茅葺)
工 匠	不明	基 础	礎石削出、礎盤
軸 部	丸柱、頭貫、木鼻、台輪	組 物	連三斗
中 備	本蔓股	軒	一軒疊垂木
要 飾	虹梁、大瓶束、笈形	柱 間 裝 置	桟唐戸門扉
縁・高欄・脇障子	なし	床	土間コンクリート
天 井	格天井	須弥壇・扇子・宮殿	なし
塗 装	素木、黒塗(垂木、格縁)	飾 金 物 等	なし
繪 画	なし	材 質	[軸部・組物]檼
彫 刻	虹梁(唐草絵様)・蔓股・笈形・兎毛通		



写97-8 正面



写97-9 唐破風



写97-10 柱頭

まとめ

駐車場の手前に実相院縁起碑（平成6年(1994)）が置かれている。歴史は古く延暦年代(782～805)から地域住民に密着していたことなどが刻まれている。

本堂の彫刻欄間の墨書き銘には安永5年(1776)と記されおり、後補の物である。およそ240年の歳月を経てなお極彩色に色褪せなど劣化はほぼない。向拝は出三斗積上とし、虹梁にて身舎に繋ぐ。正面、側面とも本蔓股にて桁を受ける架構である。山門も向拝と同様に大瓶束、笈形、妻虹梁、兎毛通、蔓股、木鼻などの彫を華美にせず簡素な造形としている。4本の丸柱に両端を木鼻加工の頭貫に台輪、大斗、肘木と重ね、皿斗を配した連三斗、実肘木にて妻虹梁、丸桁を受ける構造としている。

(石坂孝司)

【参考文献】

『沼田市史 別巻2 沼田の建物編』沼田市史編さん委員会 平成11年
『利根郡史』群馬県利根教育会 昭和5年

99 昌龍寺 [しょうりゅうじ]

表99-1

寺院名	大成山昌龍寺	所在地	沼田市利根町大原字大成木722
宗派	曹洞宗	所有者・管理者	宗教法人 昌龍寺
主本尊	般若如来	仏事	
創立・沿革	新田義貞の臣、栗生頼友が白沢で敗れた義貞の遺児、義宗の戦死を悼み一宇を建立したのが始まりといわれる。白井城主長尾伊玄入道の弟、万翁宗寿禅師により大永5年(1526)大平山昌龍庵が、開堂された。南嶺長薰和尚の代になり、永禄5年(1562)大成山昌龍寺となる(『利根村史』より)。		
文化財指定	なし		

位置・配置 (図99-1、写99-1)

昌龍寺は、沼田市東部旧利根村大原宿字大成木に、位置する。旧会津街道から参道を70m程たどり、石段13段を上ると、山門がある。山門をくぐ

ると境内があり、左手に鐘撞堂右手に庫裏、正面に本堂がある。本堂左手及び裏手は、山に連なる樹木に囲まれている。

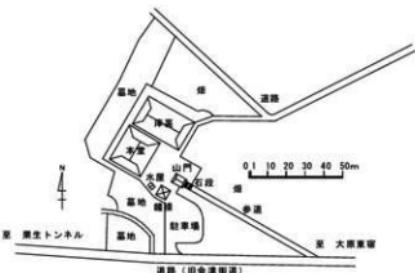


図99-1 配置図



写99-1 境内全景

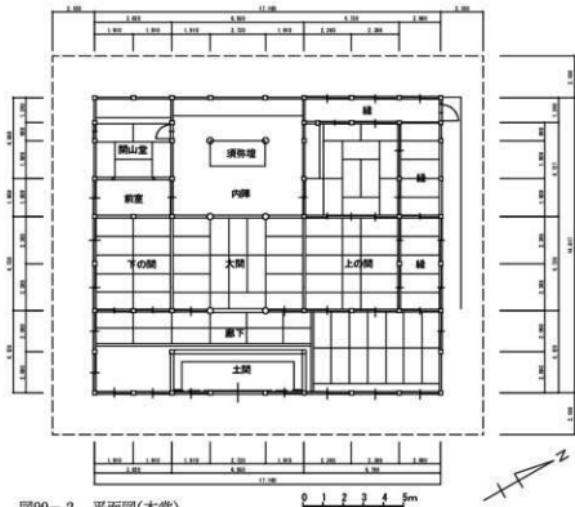


図99-2 平面図(本堂)

表99-2 本堂

建造年代／根拠	明和元年(1764)／古文書	構造・形式	正面8間(17.16m)、側面8間(14.81m)、入母屋造、平入、銅板瓦葺(創建当時茅葺)
工 匠	不明	基 础	切石基礎 直土台
軸 部	[身合]角柱 腰 長押 貫 虹梁 [内陣柱 来迎柱]丸柱	組 物	[身合]大斗肘木 [内陣]一手先
中 備	なし	軒	二軒簷垂木
妻 飾	なし	柱 間 装 置	棟唐戸(両引、引違)
縁・高欄・船障子	なし	床	[大間]疊敷 [内陣]板張
天 井	[大間 内陣]格天井 [広縁、その他の間]竿 縁天井	須弥壇・扇子・宮殿	須弥壇(禅宗様)
塗 裝	なし	飾 金 物 等	なし
繪 画	欄間 天井画	材 質	不明
彫 刻	外虹梁 内虹梁 海老虹梁 欄間		



写99-2 正面



写99-3 側面



写99-4 廊下・土間



写99-5 大間方向を見る



写99-6 大間



写99-7 大間格天井

由来および沿革

利根村史によると、新田義貞の臣栗生顯友が白沢で敗れた義貞の遺児、義宗の戦死を悼み一字を建立したのが始まりといわれる。白井城主長尾伊玄入道の弟、万翁宗寿禪師により、大永5年(1526)大平山昌龍庵が開堂された。南嶺長薰和尚の代になり、永禄5年(1563)大成山昌龍寺となる。

ほんどう 本堂 (図99-2、表99-2、写99-2~99-7)

本堂の創建は、寺提供資料によると、明和元年とされている。昌龍寺は宝曆11年(1762)に焼失し、明和元年(1764)万古田から大成木に移転再建されたと、いわれている。

その規模は、正面8間(17.16m)、側面8間(14.81m)の比較的大きな本堂である。正面の入り口から入ると、土間にになっており、階段を上ると疊敷きになっている。土間の左右は、改修されたと思われ、床になっている。造りは、前面3部屋後面3部屋の、6個の部屋で構成されている。組物は、大斗肘木、虹梁、一手先で組まれている。格天井には絵画が施されており、それぞれに個人の名前が記されている。その他にも、欄間彫刻が見事である。彫刻には龍や、松などが彫られている。欄間絵には天女が描かれている。

山門 (図99-3、表99-3、写99-8～99-10)

山門は、寺提供資料によると安永6年(1778)に創建されたと、寺古文書に書かれている。

その規模は、正面2.75m、側面2.94m、1間1戸向唐門寄棟鋼板葺である。軸部柱は、方柱丸柱からなっている。組物は、出三斗、軒は、一軒である。

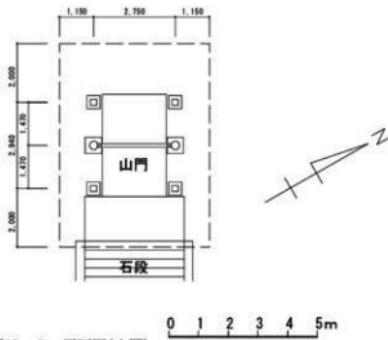


図99-3 平面図(山門)

表99-3 山門

建造年代／根拠	安永6年(1778)／古文書	構造・形式	1間1戸 四脚門向唐門(2.75m)、側面2間(2.94m)、鋼板葺
工 匠	不明	基 础	礎盤
軸 部	[門柱]丸柱 担柱 方柱 水引虹梁	組 物	出三斗
中 備	幕股	軒	一軒疊重木
妻 飾	虹梁大瓶束 大瓶束	柱間装置	なし
縁・高欄・監障子	なし	床	なし
天 井	井 輪重木 板張天井	須弥壇・扇子・宮殿	なし
塗 装	漆木	飾 金 物 等	なし
絵 画	なし	材 質	不明
彫 刻	虹梁 幕股 唐破風 唐破風(鬼子通) 木鼻		



写99-8 裏正面



写99-9 侧面



写99-10 組物

妻飾りは虹梁大瓶束、天井は、輪垂木板張り天井である。彫刻は、虹梁、唐破風、唐破風(鬼子通)木鼻に施されている。

まとめ

昌龍寺には先代住職から受け継ぐ書物や、記録が多數保存されており歴史の長さを感じさせられる、古いお寺である。虹梁の唐草絵様のわかばが、波模様になっている事や、幕股の様式から見て、記録に書かれている年代で妥当だといえる。寺で保管している石碑には、「延文元年八月昌龍寺」(1356)と書かれている。その他にも細部に渡り、彫刻が施されている見ごたえのある寺院建築である。

(三代一佳)

【参考文献】

『利根村史』利根村 昭和48年

100 大圓寺〔だいえんじ〕

表100-1

寺院名	金嶺山無量院大圓寺	所在地	利根郡片品村土出886
宗派	曹洞宗	所有者・管理者	宗教法人 大圓寺
主本尊	虚空藏大菩薩	仏事	大般若会(4/28)
創立・沿革	保元3年(1158)大圓国師によって開山(『片品村史』より)。		
文化財指定	大圓寺の觀世音像(村重文 平成元年2月)、大圓寺の間引きの絵額(村重文 平成元年2月)		

位置・配置(図100-1、写100-1)

大圓寺は沼田ICから国道120号線を日光方面に向かい国道401号線に入り、片品川に架かる尾瀬古仲橋の手前を左に入った所に位置する。南側の道路から参道をたどると正面に本堂があり、右手に庫裏、左手高台に觀音堂がある。本堂裏手は斜面になつており、墓石碑などが多い。

由来および沿革

当寺の創建は、『片品村史』によると保元3年(1158)に大圓国師によって開山された。その後衰廢したが永祿3年(1560)星野義基によって復興され、天正元年(1573)海藏寺二世巨山和尚によりそれまでの真言宗から曹洞宗の金嶺山大圓寺として開山した(『片品村史』、『群馬の古寺』より)。

本堂(図100-2、表100-2、写100-2～100-7)

建造年は不明であるが、絵様などの建築様式から



写100-1 境内全景

18世紀中期と推定する。

正面15.9m、側面15.4mの方丈形式で昭和58年(1983)の改修で屋根は寄棟茅葺屋根から入母屋鋼板葺に、基礎は、礎石から鉄筋コンクリート造になった。同時に建物の位置を南にして2間(3.6m)移設した。柱は角柱、長押と貫で固め、組物は平三

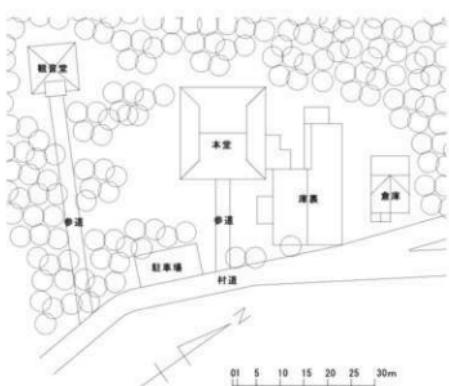


図100-1 配置図



図100-2 平面図(本堂)

表100-2 本堂

建造年代／根据	18世紀中期／建築様式	構造・形式	正面15.95m、側面15.49m、入母屋造、平入、鋼板葺
工 匠	不明	基 础	鉄筋コンクリート
輪 部	[身舍]角柱 腰 長押 貫 [内陣]来迎柱 丸柱	組 物	[身舍]平三斗組、出三斗、実肘木
中 備	彫刻蟇股	軒	一軒疊重木
妻 飾	懸魚、木連格子	柱 間 裝 置	アルミサッシ、漆喰壁
縁・高欄・脇障子	なし	床	[内陣]拭板 [外陣]疊敷き
天 井	[大間]格天井(天井画) [内陣]格天井(天井画)	須弥壇・扇子・宮殿	須弥壇(禅宗様)
塗 装	素木、極彩色、欄間彫刻、幕股	飾 金 物 等	なし
絵 画	内陣外陣天井画	材 質	檜
彫 刻	欄間、幕股、海老虹梁、虹梁、支輪		



写100-2 正面



写100-3 側面



写100-4 外部組物



写100-5 路地・土間 格天井



写100-6 来迎柱虹梁



写100-7 内陣虹梁

斗、一軒疊重木としている。向拝は設けられていない。

平面は6間取を基本とし、正面の1間通りを縁、手前の1間通りが土間であったことは、縁の床見切がはじからはじまで通っていること、側面の出入口を埋めた壁から確認できる。土間の左右の縁は後で造られたものである。内部の柱は、来迎柱の2本、内陣・大間境の2本および大間・路地境の2本の6本を丸柱、他を角柱とする。位牌堂は増築している。

組物は平三斗組、天井は内陣・大間が格天井(天井絵付)、路地の正面5間が格天井(天井絵付)、他は竿縁天井、床は内陣が拭板、他は疊敷きとする。彫刻は海老虹梁・虹梁の刻線彫による唐草絵様、内陣・大間間の極彩色透彫、欄間と彫刻支輪が設られ

ている。天井絵は内陣は龍、大間・路地が動植物となっている。

観音堂 (図100-3、表100-3、写100-8~100-10)

観音堂の創建は、不明だが文化6年(1809)と書かれた絵馬が奉納されているので、それ以前と考えられるが、卷斗が連続して並べられていることや絵様の渦が太いなど細部の様式から18世紀中期と推定する。

規模は、正面3間(5.20m)、側面3間(5.34m)、方形造、金属板葺、一軒向拝である。身舎は地長押・長押・頭貫、組物は三手先、軒天井がある。外壁の落とし込み板、床板は改修されている。外陣内陣は一室で手前3間奥行2間を外陣、奥1間

表100-3 観音堂

建造年代／根据	18世紀中期／建築様式	構造・形式	正面3間(5.20m)、側面3間(5.34m)、方形造、金剛板葺
工 匠	不明	基 础	礎石
軸 部	[身舎]丸柱 地長押 長押 頭貫 [向拝]方柱 水引虹梁 海老虹梁	組 物	三手先、出組
中 備		軒	二軒繁重木
妻 飾	なし	柱 間 装 置	舞良戸、板張
縁・高欄・脇障子	四方切目縁	床	板張
天 井	竿縁天井	須弥壇・扇子・宮殿	須弥壇(禪宗様)
塗 裝	素木、朱塗	飾 金 物 等	なし
繪 画	なし	材 質	不明
彫 刻	須弥壇 水引虹梁 木鼻		



写真100-8 正面



写真100-9 側面



写真100-10 内部

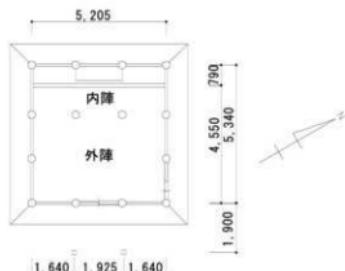


図100-3 平面図(観音堂)

を内陣として観音像他2体が安置されている。

壁から壁まで開口を広く造付けられた須弥壇は空間を異質なものとしている。

まとめ

大圓寺を開山した大圓國師の國師とは、高僧に対して朝廷から送られる諡号の1つであり、特に朝廷の師への尊称である。そのことから大圓寺には菊の御紋が本堂の水引や、屋根などの数か所に使用されている。

本堂の南側には参道があり一段高いところに観音堂が建っている。御本尊は聖觀世音菩薩で、沼田横道堂三十三観音靈場の第三十三番札所となり最終の観音様である。

大圓寺は18世紀中期の地方の禪宗の本堂建築の特徴をよく伝える建築である。

(荻野 浩)

【参考文献】

『片品村史』片品村史編纂委員会 昭和38年

102 龍滄院 [りゅうそういん]

表102-1

寺院名	松曲山龍滄院總志寺	所在地	利根郡片品村大字東小川2900
宗派	曹洞宗	所有者・管理者	宗教法人 龍滄院
主本尊	総延草尼如意輪	仏事	涅槃會(2/15)、花まつり(4/8)、大般若經(4/10)、水子供養(6/24)、秋葉三尺坊の祈願祭(10/17)、成道会(12/8)、除夜の鐘(12/31)
創立・沿革	天正元年(1573)に海藏寺2世の巨山享春和尚(土出の大円寺も開山)が曹洞宗として字松木にて開創。7世蒼海龍大和尚(1753~1785)の代に当地移り現寺院を造営する(寺伝)。		
文化財指定	龍滄院の須弥壇(村重文 平成元年2月)		

位置・配置(図102-1、写102-1)

龍滄院は村内の主要道路国道120号線(ロマンチック街道)に面した、大字東小川に位置する曹洞宗寺院である。道路脇にある古い石塔が入り口となり、北側山腹に向う登りの参道が続く。最初の階段を上った西脇に水子地蔵堂、山門をくぐると、高く積まれた石垣上の正面に本堂がある。本堂東に庫裡、南東に鐘楼、手水舎、西には小滝や中島のある池と庭園が配されている。東に少し離れて方位除けの加持稻荷神社があり、山門脇には古い石塔や石仏が多く残される。道路沿い東隣地は、檀家であり、片品地域の素封家「千明家」の靈廟がある。



写102-1 境内全景

松木にて開創、宝暦3年～天明5年(1753～1785)の7世蒼海龍大和尚の代に当地移り現寺院を造営する(寺伝)。

由来および沿革

天正元年(1573)に利根邑の海藏寺2世の巨山享春和尚(土井の大円寺も中興開山)が曹洞宗として字

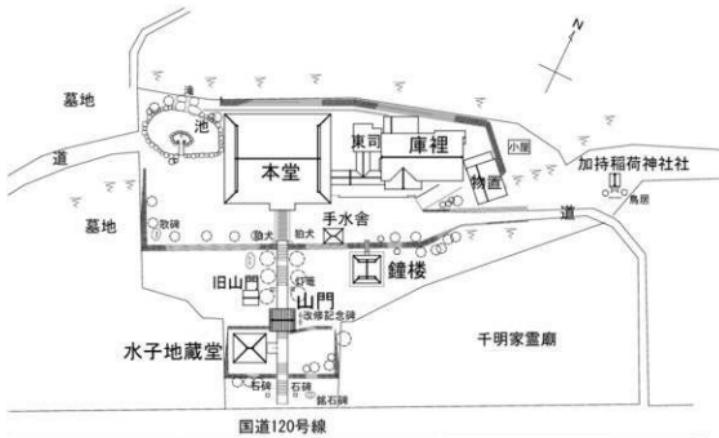


図102-1 配置図

0 5m 10m 20m

本堂は現在、正面18.05m、側面14.25m、入母屋造銅板平葺 1間流葺の向拝を付ける。昭和38年(1963)屋根を寄棟造茅葺から改修時、西面玄関・廊下を増築している。内部は南から外陣(旧土間)、次に東脇陣、大間、西脇陣、奥に室中、内陣、開山堂の計6間取に、増築された事務室、茶所、物置、玄関、廊下がある。組物は、外部を雲形大斗肘木、向拝は拳木鼻付平三斗、水引虹梁上透影刻蔓股、海老虹梁を置く。軒は二軒疎垂木、向拝部を打越二軒疎垂木とする。妻は舟型飾付木格子、破風に猪目懸魚を付ける。内部は外陣小屋繫虹梁上に、出三斗と大斗束笠型付がある。内陣・大間境は虹梁、彫刻欄間、二手先、黒色彫刻板支輪(波に紅葉)を置く。来迎柱は二手先と中央は中庸に紋付蔓股(根袴)、間に蛇腹支輪を置く。また須弥壇上に極彩色彫刻で覆い、両脇には繫虹梁(若葉唐草)と彫刻欄間が嵌められる。外陣の一部と大間天井は格天井で天井画

が描かれ、内陣天井は中央に麒麟の天井画を配する
鏡張格天井である。

本堂築造に関する記録は、『片品村史』記載の寺

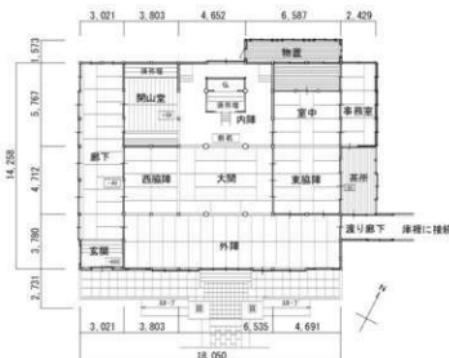


図102-2 平面図(本堂)

表102-2 本堂

建造年代／根据	18世紀中期／建築様式	構造・形式	正面18.05m、側面14.25m、入母屋造、平入、向拝1間、銅板葺(当初茅葺)
工 匠	[大工]棟梁：師田村(現みなかみ町)中澤伝兵衛 [彫工]花輪(現みどり市)住 藤原東漸(欄間・天井画)	基 础	[外周]敷石基礎 一部コンクリート造 [内部]自然石柱立
軸 部	[身舎]角柱、土台、内法長押、丸柱(来迎柱、内陣・大間境中央、大間・外陣境中央) [向拝]角柱	組 物	[外部]大斗肘木 [向拝]平三斗 [内部]〔外陣〕繫虹梁上平三斗、大斗束笠型付、〔来迎柱、内陣・大間境〕手先
中 備	[向拝]透影刻蔓股 [内部](来迎柱)中央紋付 蔓股	軒	二軒疊垂木 [向拝]打越二軒疊垂木
妻 飾	[妻壁]弓型飾付木格子 [破風]猪目懸魚	柱 間 裝 置	引違戸、塗壁
縁・高欄・脇障子	なし	床	疊敷、〔内陣・開山堂〕拭板
天 井	[外陣]格天井南側化粧星根裏 [大間]格天井 [内陣]格天井 [その他]竿縁天井	須弥壇・脛子・宮殿	須弥壇(禪宗様)
塗 装	素木、極彩色(影絵、欄間)	飾 金 物 等	向拝柱の根巻金物
絵 画	天井画：外陣(花鳥・動物・宝珠)、大間(花鳥)、内陣中央(麒麟)	材 質	櫛、杉
彫 刻	向拝幕柱(狼犬)、繫虹梁、海老虹梁(唐草絵様)、外陣・大間及び東西脇陣境欄間(天女)、大間・東西脇陣境欄間(鳳凰)、大間・外陣境虹梁上彫刻(親子獅子)、室中・東脇陣境欄間(鶴・松)、内陣・大間境欄間(中央龍・両脇天女)、来迎柱脇陣境欄間(鳳凰)		



写102-2 正面



写102-3 向挂正面



写102-4 大綵繫虹螺



写102-5 大間・外陣



写102-6 内陣・大間境彫刻欄間



写102-7 須弥壇

伝古書に、「宝暦 6 年(1756)10月15日、小川村に寺相立申候 けた行八間半、はり行七間半 大工棟梁吾妻郡横尾村（現中之条町）中沢伝兵衛に十四両と白米六石五斗にて頼む、 宝暦 7 年寺造作仕り候 大工棟梁吾妻郡原町杉原善左衛門に10両にて頼む」とある。また、同文には「宝暦13年(1763)シユミ壇上げ申候と欄間拾五枚出来申候 大工棟梁勢多郡花輪（現みどり市）の（前原）藤次郎父子、絵方棟梁は武州妻沼（現熊谷市）の忠七にて百九十五工かかり候」とある。現本堂の規模は同じであり、繋虹梁の唐草絵様、墓股の形から判断すると、18世紀中期の建物である。ただし、須弥壇は「勢多郡東村誌通史編」にも前原藤次郎父子作と記されているが、今回調査で確認した須弥壇裏の墨書には、「寶暦十三癸未年 工匠 勢多郡涌丸邑（現桐生市黒保根町）新井彌三郎正重、同所衆原與七郎、荻原村（現高崎市京ヶ島）大塚兵祐」と 3 名の銘があり、記録と違っている。前文記載の15枚の欄間は内陣・大間境 3 枚（龍・天女）、室中・東脇陣境 2 枚（鶴と松）が残っている。なお、来迎柱脇の欄間に刻彫で「文化14年(1817)上毛花輪（現みどり市）住 藤原東漢」、内陣天井画に同名の墨書があり、文化14年に改修されている。「藤原東漢」は三峰神社や熱田神

宮に銘を残す「星野慶助（星野政八の息子）」が絵画などの時に使う雅号である。また、須弥壇上と大間・外陣境虹梁上の彫刻は彩色から東漢（星野慶助）の作であろう。新しい欄間は「昭和 8 年 3 月彫刻師森桂雲」の作である。森桂雲は江戸彫工後藤桂林の門下で、東京都台東区の大円寺本堂彫刻などを手掛けている。なお、向拝は虹梁の唐草得様などから判断して後設である。

まとめ

本堂建築は村史記載寺伝古書と村重文の須弥壇墨書、大間や来迎柱組物など建築様式からみて18世紀中期の禅宗寺様式を残す建物とみて良いであろう。龍済院は素封家「千明家」をはじめ多くの檀家を持ち、改修を何度も行っているが、築造時の遺構も多い建物で、古くから地域の人々の信仰を厚く受ける巨刹の寺院である。

（岩崎謙治、貝磯博子）

【参考文献】

『片品村史』片品村史編纂委員会 昭和38年
『勢多郡東村誌 通史編』東村 平成10年

103 (門前)吉祥寺 ((もんぜん)きちじょうじ)

表103-1

寺院名	青龍山吉祥寺	所在地	利根郡川場村門前860-1
宗派	臨済宗建長寺派	所有者・管理者	宗教法人 吉祥寺
主本尊	釈迦如來坐像	仏事	初詣(1/1~7)、春駒祭り(2/11)、花祭り(4/8)、新盆供養会(8/13)、孟蘭盆施餽鬼会(8/15)、檀信徒総施餽鬼会(12/1)、除夜の鐘(12/31~1/1)
創立・沿革	鎌倉建長寺を本山とする臨済宗建長寺派の禅寺で南北朝時代の歴応2年(1339)に建長寺代42世中巖円月禪師により創建。創建後何度も焼失するが、徳川時代の延宝3年(1675)に再建されたと伝えられる(『川場村の歴史と文化』)。		
文化財指定	吉祥寺山門(村重文 昭和32年9月)、木造仏種慧濟禪師坐像(県重文 昭和63年8月)、木造広円明鑑禪師坐像(県重文 昭和63年8月)、木造釈迦如來坐像(県重文 平成18年3月)、吉祥寺十六羅漢像(村重文 昭和32年9月)、吉祥寺のヒメコマツ(県天記 昭和32年9月)		

位置・配置 (図103-1、写103-1)

川場村の西に位置し、武尊山から続く峰を背に広い境内がある。前方には武尊山からの豊富な水で田んぼが広がる。寺を中心に栄えた門前地区、観光バスも立ち寄る広い駐車場から入ると、細い石疊の参道を通り県指定天然記念物のヒメコマツを左に見ながら、上を仰ぐと「青龍山」の後光嚴天皇の筆によ

る勅額が掲げられた二層の山門に迎えられる。門を潜り、右に鐘楼、左に境内では最も古い建物と言われ、寺伝によると18世紀末に建築されたとされる釈迦堂があり、内部には県重文の木造釈迦如來坐像が置かれている。そして石疊はその先の本堂へと続く。本堂の並びには、真新しい庫裏、他には宝物殿、トイレ棟等が広い境内に配置。本殿の裏手には、大きな池と滝が涼を味わえ、その奥の山上には、先代住職の墓、更に奥に「春駒祭り」を奉納する金甲稻荷神社が鎮座する。広い境内では春夏秋冬と四季を通して草花が咲き、新緑紅葉雪景色と訪れる人を和ませてくれる場であり、花寺として奥利根地区の代表的な観光コースである。

由来および沿革

円月禪師(建長42世)が、6代大友貞宗の庇護を受け、この地に吉祥寺創建の端緒を開き、大友氏時(貞宗の子)に至って完結した。氏時公の位牌が祀られている。吉祥寺開山の円月禪師は、古今を通じ

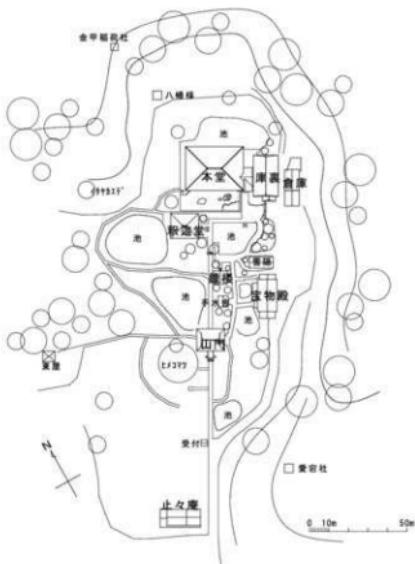


図103-1 配置図



写103-1 境内全景

ての指折の名僧であった。天正の頃（上杉謙信の関東進出の頃）に寺全体が兵火により焼失し、徳川時代に再建（延宝3年(1675)）されたというが、記録は残っていない。建長寺派400有余ヶ寺の中で一番北域に位置することから、建長寺北の門とも呼ばれている。

ほんどう 本堂（図103-2、表103-2、写103-2～103-7）

戦国時代の天正年間(1573～1592)に消失、江戸時代初期の延宝3年(1675)再建と伝承され、その後の再建の記録は確認できないが、肘木部分の彫刻や内部各所に欄間に配する構造から察すると江戸後期の特徴を成していると判断する。一時的な仮本堂として建造のために装飾がないと見るか、江戸初期の建

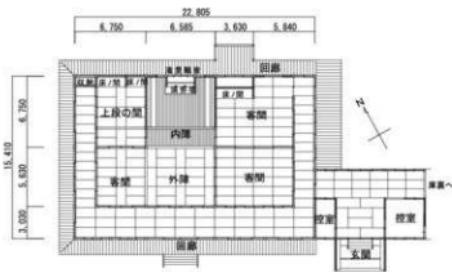


図103-2 平面図(本堂)

表103-2 本堂

建造年代／根拠	江戸後期／建築様式	構造・形式	正面22.80m、側面15.41m、寄棟造、平入、銅板葺(当初茅葺)
工 匠	不明	基 础	自然石基礎
軸 部	角柱、地貫、頭貫	組 物	〔外部〕大斗肘木
中 備	なし	軒	疎垂木
妻 飾	なし	柱 間 装 置	ガラス引連戸、塗壁
縁・高欄・船障子	四方切目縁	床	〔内陣〕拭板張 〔外陣〕疊敷 〔他〕畳敷
天 井	井 〔内陣〕格天井 〔外陣〕格天井 〔他〕竿縁天井	須弥壇・眉子・宮殿	須弥壇、厨子
塗 装	素木、極彩色(彫刻欄間)	飾 金 物 等	なし
絵 画	なし	材 質	不明
彫 刻	〔内部〕欄間彫刻(16羅漢、故事) 〔外部〕木鼻(滴)、肘木(若葉)		



写103-2 正面



写103-3 側面



写103-4 外陣・内陣



写103-5 廊下



写103-6 欄間彫刻



写103-7 外部組物

物として後期のような華やかさがないと見るか判断しづらいが、今調査に於いては江戸後期と判断した。十六羅漢像の彫刻欄間の寄進札は、嘉永7年(1854)とある。正面12間側面8.5間、南向きの入母屋造、銅板葺(別棟として唐破風付の正面2間側面1.5間の入り口、受付事務所と廊下が付属)。基礎は自然石で、柱は全て方形、長押、欄間、頭貫で固め、外部の柱頭に大斗肘木、拳鼻が付き、軒は疎垂木、寄棟にて妻飾り等はない。内部平面は1.5間幅の疊敷きの廊下を正面に付け6間取りで、東西にも1間の廊下を付け、一般拝観者のためのスペースとなる。南側及び西側はガラス戸引違で解放。外部の肘木部分以外の組物はなく、彫刻も欄間以外は見られない。外には四方に瀧れ緑を廻し庭園を鑑賞する順路となる。天井は内陣及び外陣は格天井、他は竿縁天井。火災焼失後の仮寺として建てられたため、部材は比較的細く、十六羅漢像の欄間以外に目立った彫刻も組物も見当たらないが、内陣には須弥壇が置かれ、県重文の木造仏種慧濟禪師坐像と木造広円明鑑禪師坐像の座像は重々しく安置されている。

山門(図103-3、表103-3、写103-8~103-13)

発起を文化9年(1812)、入佛を文化12年(1815)と記する棟札を残す。妻飾りの虹梁の彫刻などからも年代は江戸時代後期と裏付けられる。3間1戸二階二重門、屋根は入母屋造で、元々は茅葺であったが昭和30年代に葺き替えられ、現在は鉄板丸瓦棒葺である。妻飾は燕懸魚、虹梁大瓶束、軒は上層下層とともに二軒繁垂木である。下層内部は吹抜であるが、

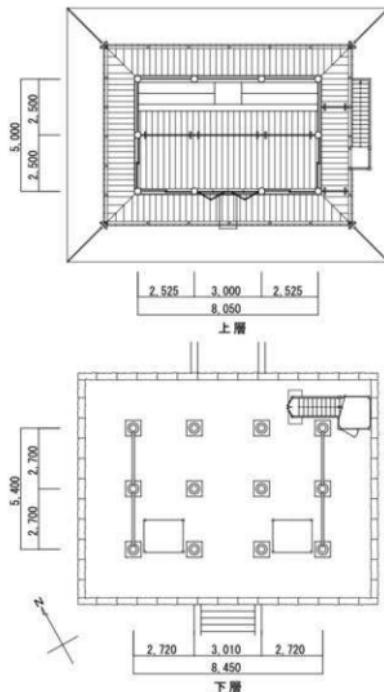


図103-3 平面図(山門)

表103-3 山門

建造年代／根据	文化12年(1815)／棟札(入佛祈禱札)	構造・形式	3間1戸二階二重門(8.45m)、側面2間(5.40m)、入母屋造、平入、鉄板瓦棒葺(当初茅葺)
工 匠	不明	基 础	礎石と礎盤(布敷)
軸 部	[上層]丸柱(粽)、頭貫、台輪 [下層]丸柱(粽)、頭貫、台輪	組 物	[上層外部]拳鼻付二手先 [上層内部]出三斗 [下層]拳鼻付岡組 [下層内部]出三斗
中 備	[上層]板幕股 [下層]板幕股	軒	[上層]二軒繁垂木 [下層]二軒繁垂木、板支輪(彫刻)
妻 飾	虹梁斗拱大瓶束、燕懸魚、鰐、菱形	柱 間 裝 置	棟唐戸(4枚両折戸)、板戸、板壁
縁・高欄・脇障子	[上層]四方切目縁、擬宝珠高欄	床	[上層]拭板張 [下層]石敷(布敷)
天 井	[上層]格天井 [下層]格天井	須弥壇・厨子・宮殿	なし
塗 装	素木	飾 金 物 等	棟唐戸:隅金具
繪 画	なし	材 質	不明
彫 刻	[上層]虹梁(若葉)、支輪(波)、木鼻(獅子)	[下層]虹梁(若葉・溝)、木鼻(獅子)、支輪(波)	



写真103-8 正面



写真103-9 側面



写真103-10 下層



写真103-11 虹梁



写真103-12 組物



写真103-13 内部

据え置き式の木枠内に仁王像を左右に設置。布敷きの石材の低い礎檻上に、方形の礎石と礎盤に粽付きの円柱が12本据えられ、柱には腰貫、飛貫、頭貫、台輪を廻して固めている。桁行、梁間中央は若葉、渦の彫刻の大きな虹梁を入れ、虹梁上に大瓶束を立て、三斗で鏡天井を受ける。下層北東に外部階段が近年設置され、2階部分には當時一般拝観が可能で容易に登ることができる。上層の南中央正面に4枚の桟唐戸が折戸形式で開き、脇間に引き違いの横棧の板戸、両側面前間も同様の板戸の引き違い戸として建て付けられている。他の側面は横板張りの板が廻らせてある。上層階の外部周囲には高欄付きの縁を四方に巡らせて通路となる。組物は、下層を出組の彫刻板支輪組物、上層を拳鼻付二手手先とし、木鼻は獅子で上層及び下層それぞれ計14頭が配置される。上層階は、正面及び左右が扉で開放され、拭板の上に敷物が敷かれ、正面奥に文殊菩薩が安置、両側には木造の等身よりはやや小さい、川場村指定の重要文化財である十六羅漢像が椅子に腰掛けて置かれている。天井は格天井で絵画等の装飾はない。小屋組みは、積雪にも耐えられるような大きな柱や梁

の骨組で、鋭で削られている。正面外部上層中央には、後光厳天皇御染筆の勅額が掲げられている。

まとめ

利根沼田地域の歴史的にも建物的にも存在価値のある寺と位置づく。二層の山門は北毛地区の泰寧寺と並び後世に残して欲しい貴重な門である。本堂に於いては、消失から一時的に建てられた建物と伝えられるが、正しくこれだけ由緒格式ある寺であるにもかかわらず組物等がほとんど見られない事からも仮本堂として建築された証であろう。十六羅漢像の欄間彫刻は素晴らしい彫刻師等の確認も望む。

(関 美和子)

【参考文献】

- 『川場村の歴史と文化』川場村役場 川場村誌編纂委員会 昭和36年
- 『川場村の文化財写真集』川場村教育委員会「川場村の文化財写真集発行委員会」昭和57年
- 『川場村誌』川場村 川場村誌編纂委員会 平成28年
- 『利根郡誌』群馬県利根教育会 昭和5年(昭和45年再版)

105 川龍寺〔せんりゅうじ〕

表105-1

寺院名	筑紫山川龍寺	所在地	昭和村貝野瀬1129
宗派	曹洞宗	所有者・管理者	宗教法人 川龍寺
主本尊	釈迦如來	仏事	花祭り(4月)、観音祭(11月)
創立・沿革	天正18年(1590)沼田市にある、成孝院の隠居寺として泉龍庵と称し、現在の地より数km北にある池替寺屋敷にあった。後に泉龍寺と改名した。元禄11年(1698)片品川対岸の火灾により焼失し、川龍寺と名を改め現在の地に移る。文化14年(1817)再度火灾に遭い、文政3年(1820)本堂が再建された。嘉永元年(1848)長屋門、嘉永6年(1853)庫裏を増築している。昭和48年(1973)屋根の葺き替え工事がされている(『系之瀬村誌』)。		
文化財指定	なし		

位置：配置（图105-1、图105-2）

昭和村北部河岸段丘上に位置し、県道255号線沿いに参道入口がある。急な参道を南向きに登ると禁芸碑があり境内に入る。参道は左に90度曲がり左に現庫裏（元は衆寮）、右に蔵と長屋門が並び、正面に本堂があり、その隣に中門造のように庫裏がある。車の通行が可能な参道がもう一つあり、西より駐車場を過ぎ長屋門に至る。本堂裏は歴代住職の墓地、長屋門と本堂の間は庭園となっている。



图105-1 配置图



写105-1 境内全景

由来および沿革

「系之瀬村誌」と寺の歴史によると、天正18年(1590)に沼田市井土上町成孝院の僧、意岩建春和尚により開祖され、現敷地より數km北、池替戸寺屋敷に隠居寺として泉龍庵が創建された。その後、成孝院5世である不岸建鎮和尚を迎えて赤城山泉龍寺として開山した。元禄11年(1698)片品川対岸上久屋町の火災により全焼してしまう。宝永2年(1705)再建に際し、現在の地に移して川龍寺と改めた。現在の地である宮原は、貝野瀬屋敷という城があったとされる場所である。文化14年(1817)再度火災に遭い全焼してしまう。文政3年(1820)現本堂を再建、天保年間に衆寮を再建、嘉永元年(1848)長屋門を新築、嘉永6年(1853)庫裏を本堂横に増築、安政元年(1854)蔵を再建した。昭和48年(1973)に本堂・庫裏・長屋門の屋根を茅葺から銅板瓦棒葺で覆う改修工事が行われた棟札が現存する。

ほんどう
本堂 (図105-2、表105-2、写105-2～105-7)

建造年代の根拠を示すものは何もなく、「糸之瀬村誌」によると文政3年(1820)、「利根郡誌」によると文政5年(1822)との異なる年号の記載があるのみである。

建築様式で見ても江戸後期が妥当であろうと思われ、前本堂は文化14年(1817)に焼失している。

正面20.74m、側面15.36m、寄棟造平入銅板瓦葺
葺（当初茅葺 昭和48年に改修 棟札による）、基壇一段の上に礎石を置き、礎石間は切石でふさぎ、
その上に土台敷、角柱を建て、貫を漆喰で塗りこん
である。上部は唐草文様付舟肘木で桁を支え、軒は
疊垂木で、屋根は茅葺の上に銅板が被せてあり、屋
根裏は茅葺の小屋組みである。

内部は入口正面に内陣外陣があり左に2間、右に

4間あり、手前に広縁があり内陣は板の間、それ以外は疊敷きとしている。当初の広縁は板の間で半分を土間としていたが改修されている。曹洞宗の建築様式を顕著にみることができる。広縁と外陣の境、内陣と外陣の境、来迎柱の計6本に樅の丸柱をおき、他は角柱である。来迎柱には台輪付拳鼻出三斗、他丸柱には拳鼻付三斗に虹梁が架けられ、広縁には須佐之男命と登り龍と降り龍の肉厚彫の見事な欄間彫刻がある。彫刻の肉厚さと内部虹梁の唐草文様の形式は江戸時代後期～末期の建築様式に当たる。

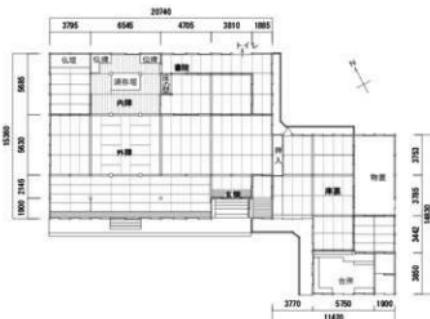


図105-2 平面図(本堂・庫裏)

表105-2 本堂

建造年代／根柢	江戸時代後期／建築様式	構造・形式	正面20.74m、側面15.36m、寄棟造、平入、鋼板瓦棒葺(当初茅葺)
工 匠	不明	基 础	礎基壇一段、礎石間切石
軸 部	[身舎]土台、角柱、丸柱6本(外陣と内陣と須弥壇)、差鶴居、虹梁、栱、頭貫(丸柱上部)	組 物	[身舎外部]唐草文様付舟肘木 [身舎内部]外陣：拳鼻・実肘木付三斗、来迎柱：台輪付拳鼻・実肘木付三斗
中 備	嵌込彫刻	軒	一軒疊垂木
要 飾	なし	柱 間 装 置	アルミサッシ、漆喰壁
緑・高欄・船障子	なし	床	[外陣]疊敷 [内陣]板張 [その他]居室は疊敷
天 井	[外陣]格天井 [内陣]竿縁天井 [その他]竿縁天井	須弥壇	須弥壇
塗 装	素木、極彩色(欄間彫刻)	飾 金 物 等	なし
絵 画	[外陣]天井画	材 質	檜、杉
彫 刻	[身舎外陣]欄間彫刻(須佐之男命・龍)、虹梁(唐草絵様)、実肘木・出組木鼻(唐草文様)		



写105-2 全景



写105-3 側面



写105-4 裏面



写105-5 内部



写105-6 須弥壇



写105-7 欄間彫刻

庫裏（図105-2、表105-3、写105-8～105-10）

建造年の根拠となるものではなく、「糸之瀬村誌」に嘉永6年（1853）の記載がある。屋根裏の建築構造を見ても本堂より後の建築であるのは明らかで、建築様式的に見て江戸後期以降の建築であるように見える。

正面11.42m、側面14.83m、入母屋造妻入り鋼板瓦棒葺（当初茅葺 昭和48年に改修 棟札による）基壇一段の上に礎石を置き、礎石間は切石でふさぎ、その上に土台敷、方柱を建て、貫は表しで漆喰が塗られている。上部は唐草文様付舟肘木で桁を支え、軒はせがい造で、屋根は茅葺の上に鋼板が被せており、妻飾りを猪目懸魚とし雲の文様があしらわれている。

内部は、入口付近の台所は板の間であるが当初は土間であったと思われる。その他は疊敷きである。

2間柱間内法は12.06尺（約3.62m）を基準としており、「群馬県における農家建築の建造年代推定」（「群馬文化341号」）に記載がある表に当てはめると19世紀以降の建物と推定でき、肘木の文様と合わせて江戸後期から末期と推定できる。本堂と庫裏が一体となった珍しい形式をとっている。

長屋門（図105-3、表105-4、写105-11～105-13）

建造年の根拠となるものではなく、「糸之瀬村誌」に嘉永元年（1848）の記載がある。庫裏の外観と船櫓造りである点と貫が表しになっている点など似ているヶ所があり、庫裏と同時期の建築と推定する。

正面12.71m、側面5.49m、寄棟造平入り鋼板瓦棒葺（当初茅葺 昭和48年に改修 棟札による）礎石を置き、その上に土台敷、方柱を建て、貫は表しで漆喰が塗られている（西面の壁は改修が行われており貫は漆喰で塗りこまれている）。上部は桁で繁

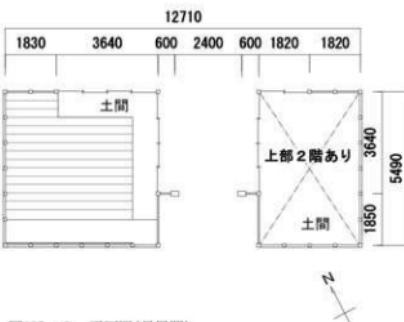


図105-3 平面図(長屋門)

表105-3 庫裏

建造年代／根拠	江戸時代末期／建築様式	構造・形式	正面11.42m、側面14.83m、入母屋造、妻入り、鋼板瓦棒葺（当初茅葺）
工 匠	不明	基 础	礎 基壇一段、礎石間切石
軸 部	土台、角柱、差鶴居、貫、桁	組 物	舟肘木
中 備	なし	軒	せがい造
妻 飾	猪目懸魚、降懸魚、虹梁拳鼻付三斗（1重）	柱 間 裝 置	アルミサッシ、漆喰壁
縁・高欄・船脚子	なし	床	疊敷
天 井	竿縁天井	須弥壇・扇子・宮鏡	なし
塗 装	素木	飾 金 物 等	なし
絵 画	なし	材 質	杉
彫 刻	舟肘木（唐草文様）、懸魚（雲）		



写105-8 正面



写105-9 側面



写105-10 軒

表105-4 長屋門

建造年代／根拠	江戸時代末期／建築様式	構造・形式	長屋門、正面12.71m、側面5.49m、寄棟造、平入、銅板瓦葺(当初茅葺)
工 匠	不明	基 础	礎石
軸 部	土台、角柱、差鴨居、貫、桁	組 物	なし
中 備	なし	軒	せがい造
妻 飾	なし	柱 間 装 置	板戸、漆喰壁
縁・高欄・脇障子	なし	床	土間一部板張
天 井	竿縁天井	須弥壇・扇子・宮殿	なし
塗 装	素木	飾 金 物 等	なし
絵 画	なし	材 質	杉
彫 刻	なし		



写105-11 正面



写105-12 裏面



写105-13 軒

ぎ、軒はせがい造で、屋根は茅葺の上に銅板が被せてある。門扉はなく、取り付けた形跡もないで当初からなかったと考えられる。現在は物置として使われていて、近くの武尊神社舞殿の舞台装置が保管されている。

利根沼田地域で現存する数少ない長屋門である。

まとめ

地域に根差したお寺として長年地域活動を積極的に行っている。本堂の大きな赤い屋根は遠くからでも望むことが出来、建物内部に当初、土間と縁があり曹洞宗の様式を見る事ができる。外陣柱と虹梁・内陣柱と虹梁・来迎柱・須弥壇は檜で作られ、

他の部分とは一線を画す。後の庫裏増築のためであるが、平面形状として中門造（曲がり屋形状）の形で一体になっており、寺院建築では珍しい形をしている。本堂と庫裏の建造年代の差は、村史によると33年であり、一体の建物で異なる建築年代様式を舟肘木の文様で確認できる。長屋門も現存少なく歴史建築資料として評価できる。

（櫻澤 齊）

【参考文献】

- 『糸之瀬村誌』糸之瀬村誌編集委員会 昭和33年
- 『利根郡誌』群馬県利根教育委員会 昭和5年
- 『群馬県における農家建築の建造年代推定』村田敬一
- 『群馬文化341号』令和2年

107 建明寺【けんめいじ】

表107-1

寺院名	寶珠山建明寺	所在地	利根郡みなかみ町湯原985
宗派	曹洞宗	所有者・管理者	宗教法人 建明寺
主本尊	伽羅陀仙延命地藏菩薩	仏事	釈尊涅槃会、釈尊成道会
創立・沿革	天文20年(1551)秀翁龍樹大和尚が開山、永禄元年(1558)古馬牧村(現みなかみ町下牧)の玉泉寺第9世海翁文寿大和尚が兼務し伝法開山する([町誌みなかみ])。		
文化財指定	なし		

位置・配置 (図107-1、写107-1)

みなかみ町の温泉街を利根川を挟んで対岸の小高い所、水上小学校の隣に位置する。

国道291号線より坂を登って墓地の間を行くと山門、山門の北側に観音堂、鐘楼を配し山門の南側には、「水上わかくりこども園」を併設しており、こ

とも園の南西には、傾斜の地形を利用して、子供用のスキー場としている。山門の西に本堂、本堂の裏山側には書院と開山堂を配している。

由来および沿革

室町時代後期、平井城主（現藤岡市）の関東管領上杉憲政公が、勢力を広げてきた武田信玄を討ち果たそうとして出兵したが、敗れて逃げのびる時に利根川上流の現みなかみ町栗沢の地に身を潜める中、従者一人、竜樹和尚が高齢の為この土地に残し、守本尊伽羅陀仙地蔵菩薩像を託した。ひとり残った竜樹和尚が、天文20年(1551)に栗沢の地に小庵の居を構え、これが寶珠山建明寺の開山となる。しかし天文22年(1553)春、野火のために焼失し、その年秋に現湯原上の平、洗の平に寺を移した。その後、現みなかみ町下牧の玉泉寺第9世住職海翁大文寿和尚が兼務となり、その後永禄元年(1558)現在地に本堂を建立し伝法開山となる。

本堂 (図107-2、表107-2、写107-2～107-7)

建明寺本堂は、建造年代は、寺伝によれば元禄元年(1558)と言われているが、昭和34年に本堂・庫裏



図107-1 配置図



写107-1 境内全景



図107-2 平面図(本堂)

の大改修を行ったが、年代が確定できる資料や棟札もなかったようだ。外陣の欄間の彫刻の厚みや虹梁の唐草模様の彫の深さ、渦と若葉の形などをみると17世紀末～18世紀初期以降と思われる。

本堂の規模は柱間正面11間、側面9間の大堂で、4室を外陣、外陣の南には、以前は、外廊下か外回廊と見られ、天井をみると垂木をそのまま表している。現在は、畳を敷き、内部としている。内陣の両脇には、1室と2室とし全体を本堂と呼んでいるようだ。本堂の裏手の西に開山堂と東に書院を南に禅堂を各渡廊下でつないでいる。

外部の組物は、平三斗や拳鼻が見られ入母屋の妻

側には、二重虹梁大瓶束で、鰐付燕懸魚も見られる。

内部の須弥壇の胴の部分は、上下に縁形の曲線でなり、羽目には文様の束を立て高欄の親柱は、逆蓮頭、握蓮と戸手の先端で唐様の特徴を表している。来迎柱欄間の板絵や格天井に花鳥絵図と俳句が書かれている。内陣を囲む欄間には、彫の深い透彫の彫刻、虹梁の唐草彫、中備には、出組や裏股が確認出来る。

まとめ

この地の温泉を海翁文寿和尚が、川辺に白煙の立つの見て利根川の所から出湯を発見し村人や湯治客

写107-2 本堂

建造年代／根据	17世紀末～18世紀初期／建築様式	構造・形式	正面24.86m、側面16.86m、入母屋造、鉄板瓦葺葺
工 匠	不明	基 础	切石(外周部)、自然石(内部)
軸 部	[身舎]角柱、長押、飛貫、頭貫、台輪 [内陣]丸柱、木鼻、海老虹梁	組 物	[外部]平三斗組 [内部]出組
中 備	嵌込彫刻、裏股	軒	二軒疊垂木
妻 飾	二重虹梁大瓶束、鰐付燕懸魚、六葉	柱間装飾	アルミサッシ、ガラス戸(窓)、漆喰(壁)、波板金属板(背面壁)
縁・高欄・監障子	なし	床	疊敷、板張(内陣・廊下)
天 井	格天井(内陣・外陣)、竿縁天井(廊下)、垂木表し(廊下)	須弥壇・扇子・宮殿	須弥壇(禅宗様式)
塗 装	素木、黒塗(海老虹梁)	飾 金 物 等	木口金具(隅木、垂木)
絵 画	来迎柱の左右欄間、格天井板(花鳥絵・俳句)	材 質	檜、檜
彫 刻	[内部]透彫(獅子・鳥・花)、透彫欄間(中国の物語)、海老虹梁、虹梁(雲と若葉)		



写107-2 全景



写107-3 側面



写107-4 妻飾



写107-5 内陣



写107-6 外陣欄間



写107-7 須弥壇

に沿せたと言われている。簡素な外観だが、大きな堂である。

開山より現在まで、火災にも遭わなかつたと伝えられていて、記録にはないが、部分的には、幾度も改修が行われているのであろう。

(増田久美子)

【参考文献】

- 『町誌みなかみ』町誌みなかみ編纂委員会 昭和39年
『利根・沼田の文化財』群馬県教育委員会文化財保護課
昭和49年
『上野名蹟図誌』小野沢敏夫 昭和59年
『建明寺誌』堀山泰学 平成14年

108 (茂左衛門地蔵尊)奥之院本堂 [(もざえもんじぞうそん)おくのいんほんどう]

表108-1

寺院名	(茂左衛門地蔵尊)奥之院本堂	所在地	利根郡みなかみ町上津807-14
宗派	なし	所有者・管理者	樹林寺(管理者 茂左衛門運営委員会)
主本尊	大宝院の覺端法印	仏事	特になし
創立・沿革	元禄6年(1693)上津大宮八幡宮として建立、昭和31年(1956)に移転改築(『月夜野町史』)。		
文化財指定	茂左衛門の奥之院本堂(町重文 昭和50年5月)		

位置・配置 (図108-1、写108-1)

みなかみ町の名勝、黒岩八景と言われる三国街道の途中、赤谷川対岸の段丘斜面で、眼下にはみなかみ町の街並みが広がり遠くは赤城山が一望出来る場所のこの地小袖坂は、杉木茂左衛門が、民の惨状を直訴したが、ひそかに帰郷し郷里の状況や妻と別れを告げ、自首を決意して江戸へ向かう途中、幕吏に捕らえられた場所で、急峻な崖のある地形である。

境内には、他に北向觀音、尼僧の住職が住んでいた住居と並んで、地形に沿った細長い位置をしている。

由来および沿革

当初この建物は、村主八幡神社と竹改戸小松八番



图108-1 配置図



写108-1 境内全景

宮と共に上津大宮八幡宮として元禄6年(1693)に建立されたと伝えられる。明治の神社合併により空宮になったが、大正時代、後閑下新道の琴刀平神社として移築され青年会等に使用された。その後、青年会も公民館に移り、当本堂も老朽化に伴い処分も検討されたが、義人茂左衛門を思慕する町組の有志が買い取り、茂左衛門が捕らわれた当地に昭和31年(1956)に移転改築した義人茂左衛門と越訴に協力したという新治村大法院の覺端法印を祀っている。

奥之院本堂 (图108-2、表108-2、写108-2~108-7)

構造は、正面3間、側面4間、背面3間、入母屋造唐破風向拝1間付で、昭和31年(1956)の移転の際には、入母屋の茅葺きの妻入りであったものを平入の瓦葺きで両側に火灯窓を新しく付け加え、神社様式の建物を寺院建築風に改築された。

向拝の唐草破風には、兎毛通が見られ裏股には、鬼の彫刻が扁額を支えている。木鼻には、獅子・象頭の彫刻、海老虹梁、一手先・二手先の出組、彫刻板支輪などが見られ神社様式を表している。屋根の一部は、令和元年(2019)の台風の倒木被害で、翌年修繕を行っている。

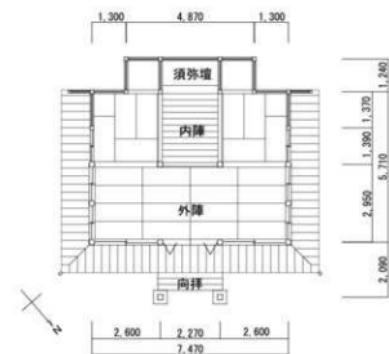


图108-2 平面図(奥之院本堂)

内部は、外陣・内陣と内陣の両脇に2室の形式とし、須弥壇には手前の板棚に茂左衛門のお位牌、その後ろには、4体の石地蔵が祀られて、内陣床は、板張の上に薄ベリ敷をしている。内部の出組は一手先、内陣の造りも社殿を寺院風に替えて新しい。昭和50年(1975)に茂左衛門の奥之院本堂として、町の重要文化財として、認定されている。

まとめ

上毛かるたにも歌われている義人茂左衛門の関わりとして、他にも千日堂・刑場跡・首塚・墓石などがある。奥之院の当地は、地元の桜の名勝でもあり眺めも良く、町民の憩いの場所でもある場所に祀られている。

構造的には、幾度の移築や改築を繰り返した様に

写108-2 奥之院本堂

建造年代／根拠	18世紀後期～19世紀初期／建築様式	構 造 ・ 形 式	正面7.47m、側面5.71m、背面4.87m、入母屋造、平入、向拝1間軒唐草破風付、瓦葺
工 匠	不明	基 磐	基壇、コンクリート(外周部)
軸 部	[身舎]丸柱、角柱、土台、長押、頭貫、台輪、木鼻(拳鼻) [向拝]角柱、海老虹梁、手扶、木鼻(獅子・象頭)	組 物	[外部]出組(一手先、二手先) [内部]出組(一手先)、平三斗組
中 備	虹梁大瓶束、鍛打彫刻	軒	二軒疊垂木、削込板支輪
妻 飾	虹梁大瓶束、鍛付燕懸魚、六葉	柱 間 裝 置	棟唐戸、ガラス入格子戸、火灯窓
縁・高欄・脇障子	三方切目縁、脇障子	床	畳敷、板張(内陣床)
天 井	格天井、彫刻板支輪	須弥壇・扇子・宮殿	須弥壇(天端板、腰板張)
塗 裝	朱塗、極彩色(脇障子、木鼻、嵌込彫刻、垂幕、手扶、海老虹梁、柱、長押、頭貫、台輪)	飾 金 物 等	木口金具(隅木、垂木)
繪 画	なし	材 贅 櫛(柱)	
彫 刻	[外部]海老虹梁(渦と若葉)、手扶(渦)、木鼻(獅子・象頭)、彫刻嵌込(波と菊)、兎毛通(鳳凰)、透欄間(雲に龍)、欄間(松に鳥)、板支輪(波に菊)		



写108-2 正面



写108-3 側面



写108-4 向拝



写108-5 脇障子



写108-6 唐破風・兎毛通



写108-7 木鼻

細部様式を見ると18世紀後半から19世紀前半の造りとされ、内部の外陣・内陣のしつらえや組物も昭和の移築時の時代と見受けられ、元禄時代の物や大正時代、昭和時代の物と混在していると思われる。

茂左衛門に関する他の建物同様、地元茂左衛門運営委員会が、掃除や手入れをしている。これからも長く後世に残したい。

(増田久美子)

【参考文献】

- 『桃野村誌 月夜野町誌・第一集』桃野村誌編集委員会 昭和36年
- 『月夜野町史』月夜野町史編さん委員会 昭和61年
- 『我がふるさと写真集 月夜野』月夜野町 昭和62年
- 『みなかみ町 文化財ハンドブック』みなかみ町教育委員会 平成28年

109 泰寧寺 [たいねいじ]

表109-1

寺院名	泰寧山泰寧寺	所在地	利根郡みなかみ町須川98
宗派	曹洞宗	所有者・管理者	宗教法人 泰寧寺
主本尊	聖観音菩薩	仏事	火防守護秋葉祈祷会、施食会法要
創立・沿革	延慶2年(1309)西国より真改と言う者一寺を建立す。臨濟時代を経て石屋禪師(山口県大寧寺)により曹洞宗となる。天文6年(1537)玉泉寺(現みなかみ町下牧)8世洞庵文曹和尚が隠居入寺して曹洞の法燈を傳法開山として中興し、以後玉泉寺末寺となり現在に至る(『新治村誌 通史編』)。		
文化財指定	泰寧寺山門(県重文 昭和28年8月)、泰寧寺本堂欄間及び須弥壇(県重文 昭和26年10月)		

位置・配置(図109-1、写109-1)

三国街道旧須川宿の「たくみの里」の寺町通り奥に位置し付近には、野仏巡りのハイキングコースもあり、参道には、赤谷川の支流、白狐沢川が流れ。この地区は以前は、吾妻郡に属していた。大道峠を越えれば吾妻郡である。山門の手前には、押野用水が引かれ須川平の水田まで流れている。境内に行くには、白狐沢川の橋を渡り石畳の参道と階段を上ると山門があり、山門をくぐり階段を上ると

正面に本堂、右に鐘楼、本堂の東に庫裏が続き、敷地西には、民家を移築した龍光庵がある。

由来および沿革

鎌倉時代末期、延慶2年(1309)西国より真改なる者が来て開創したと言われている。寺伝によると当初、天台宗(史実不詳)とした。その後、臨済宗時代を経過するが、石屋真梁禪師(山口県大寧寺開山)により曹洞宗となる。中世の動乱期の為、永住

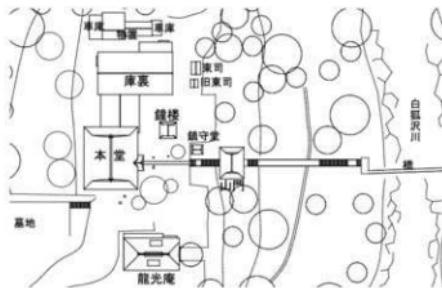


図109-1 配置図



写109-1 境内全景

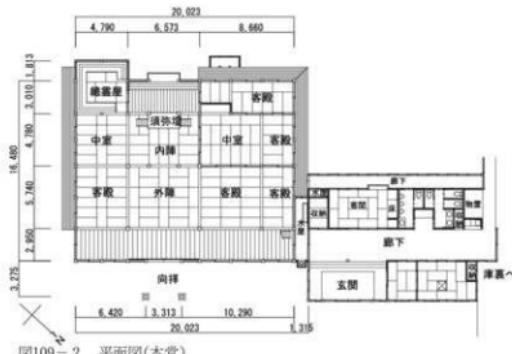


図109-2 平面図(本堂)

する住持なき時代を経過し暫く世の中静謐となり、天文6年(1537)に現みなかみ町下牧の玉泉寺8世洞庵文曹大和尚の入寺により傳法開山(中興開山)として興された、これより玉泉寺末寺となる。更に復興後の3世学庵長芸和尚の代、寛永10年(1633)に現在の須川細尾の地に寺形を整え現在に至る。尚、開基は、須川の領主、細川伊豫守源綱利とされるがこれは中興時の開基と思われる。又、山号の泉峰山は、元々裏山は泉山と言う山名にして、加えて本寺の三峰山玉泉寺の泉と峰を取り泉峰山と言わわれている。

その後、14世代に山門が宝曆7年(1757)発願起工され15世本光和尚代安永4年(1775)に竣工、更に寛政7年(1795)本堂が上棟し、18世梵光代の時代、文政11年(1828)に鐘楼堂が建立された。

ほんどう 本堂(図109-2、表109-2、写109-2~109-7)

本堂の建造年代は、山門落成後、寛政5年(1793)に起工し寛政7年(1795)に竣工している。宮棟梁は、清水兵庫頭藤原政富一子、大工棟梁は、清水宮内正藤原正俊【彫工】勢多郡花輪 高瀬忠七 繁八

表109-2 本堂

建造年代／根拠	寛政7年(1795)／棟札	構造・形式	正面20.02m、側面16.48m、入母屋造、平入、向拝1間唐破風屋根、銅板葺
工 匠	[大工]宮棟梁 群馬郡室田村 清水兵庫頭藤原政富一子、大工棟梁 群馬郡室田村 清水宮内正藤原正俊【彫工】勢多郡花輪 高瀬忠七 繁八	基 磨	切石上にコンクリート基礎(正面外周部)、自然石(側面・背面外周部、内部)
軸 部	[身舎]角柱、長押、飛貫、頭貫、台輪 [来迎柱、内外陣柱]丸柱	組 物	[外部]大斗肘木、出組 [内部]海老虹梁、出組
中 備	[向拝]幕股	軒	三軒繁垂木
妻 飾	二重虹梁大瓶束、鰯付懸魚、六葉	柱 間 裝 置	ガラス戸、舞良戸、板戸
縁・高欄・監障子	切目縁	床	[内外陣]覺 [廊下]板張
天 井	格天井 [外陣]折上格天井	須弥壇・扇子・宮殿	須弥壇(押宗様)
塗 装	素木、檜彩色(須弥壇の牡丹に唐獅子、来迎柱欄間、廊下支輪)	飾 金 物 等	木口金具(隅木、垂木)、釘隠金物(内部)
繪 画	台閣天井画(龍) [絵師]狩野法橋水春藤義信	材	質 檀
影 刻	[外部向拝]鬼毛道(飛龍)、幕股(牡丹)、木鼻(獅子、猿) [内部]来迎柱欄間(松に孔雀、桐に鳳凰)、内・外陣欄間(龍、観瀑の図、巣父・許由)		



写109-2 正面



写109-3 側面



写109-4 内陣



写109-5 来迎柱欄間(左)



写109-6 来迎柱欄間(右)

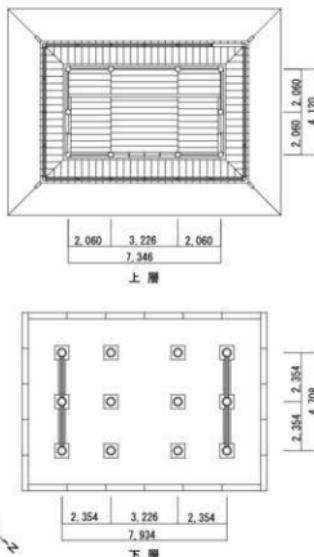


写109-7 須弥壇

にて確認出来る。本堂も山門と同じ15世本光和尚の時である。規模は、柱間正面9間、側面7間の入母屋造で向拝が1間付いている。内部の須弥壇と来迎柱の欄間は、昭和26年(1951)県の重要文化財に指定されている。須弥壇は、上下の縁型で羽目所に牡丹に唐獅子の彫刻で、高欄の親柱には逆蓮頭と握蓮と先端には蔽手になっている。来迎柱の欄間には、左側には、松に孔雀、右は、桐に鳳凰の透彫りで、いずれも桃山時代の香が高く色鮮やかに残っている。他にも内外陣の欄間には、御公儀彫物棟梁、石原吟八の弟子、勢多郡花輪出身の高瀬忠七とその門弟繁八が文化元年(1804)に完成させたと言われる観瀑の図や巢父・許由の透彫があり。格天井の中心に狩野法橋水春藤義信画の墨絵の龍図がある。

山門 (図109-3、表109-3、写109-8~109-10)

山門は、安永4年(1775)に落成した。大棟梁、清水氏要人政富、脇棟梁、清水氏要助政後でいずれも群馬郡室田村と棟札で確認出来る。形式は、3間3戸で、入母屋造の二重門で、当初は、茅葺であったが、昭和42年(1967)に銅板葺に改修した。



写109-3 平面図(山門)

表109-3 山門

建造年代／根据	安永4年(1775)／棟札	構造・形式	3間3戸二階二重門、正面7.93m、側面4.71m、入母屋造、平入、銅板葺
工 匠	[大工]大工棟梁、群馬郡室田村、清水氏要人政富 脇棟梁、群馬郡室田村、清水氏要助政後	基 础	基壇、角礎石、丸礎盤
軸 部	丸柱(粽)	組 物	[下層]拳鼻付二手先 [上層]尾垂木付三手先
中 備	換束	軒	[下層]一軒繁垂木 [上層]二軒繁垂木
妻 鈔	虹梁大瓶束、燕懸魚	柱 間 裝 置	[下層]板張 [上層]板張、板戸、火灯窓
縁・高欄	擬宝珠高欄	床	[下層]四半敷 [上層]板張
天 井	下層鏡天井、上層格天井	須弥壇、扇子・宮殿	なし
塗 装	朱塗、檜彩色(木鼻、支輪、格天井)	飾 金 物 等	なし
繪 画	[下層天井画]1本角の龍、天女、鳳凰 [上層天井画]花鳥絵	材 贊	摩(往)
彫 刻	木鼻(獅子・龍・蟹)		



写109-8 山門 正面



写109-9 山門 木鼻



写109-10 山門 内部

円柱12本の内11本は、当入須川の地にあった1本の檼の大木から取材したとあり、強風の時は、二層部分のみ南北に揺れ風の止むにつれて元の位置に戻ると言われている。上層の内部には、釈迦三尊像（文殊・普賢菩薩、迦葉・阿難、釈迦牟尼仏）と十六羅漢像が、安置されている。上層に上がるには、現在は、はしごで登らなくてはならないが、当時は、山門をくぐった階段を数段上がった途中の崖上から木製の橋が架かっていたらしく上層の高欄の一部にその形跡を確認出来る。下層の鏡天井には、一角の龍や笛を吹く天女・鳳凰が色鮮やかに描かれている。上層の格天井にも、花鳥絵が描かれ木鼻像頭や板支輪の龍や雲など消えかかってはいるが、色鮮やかに残っている。昭和28年(1953)に県の重要文化財の指定を受けている。

まとめ

泰寧寺は、日本唯一の火防靈場場の秋葉三尺防大権現様の御分体が奉安されていて、火難等一切の災難・家内安全・生業繁栄・諸願成就の祈願所でもあり、東国花の寺9番札所にも選ばれて、今では、県外の人々も訪れて広く親しまれている。山門も二層の均整の取れた禅宗様式で、参道の階段下から見上げると一層、格調高く見え建築的にも貴重で重要な建物である。

(増田久美子)

【参考文献】

- 『新治村史料集 第二集』新治村村誌編纂委員会 昭和33年
- 『新治村史料集 第四集』新治村村誌編纂委員会 昭和37年
- 『新治村誌 通史編』新治村誌編さん委員会・みなかみ町教育委員会 平成21年
- 『泰寧寺復興四百五十年報恩法会記念発行』泰寧寺廿六世山岸弘文 昭和62年

110 (宗本寺)日向見薬師堂 ((そうほんじ)ひなたみやくしどう)

表110-1

寺院名	(宗本寺)日向見薬師堂	所在地	吾妻郡中之条町大字四方4371
宗派	浄土宗	所有者・管理者	宗教法人 宗本寺
主本尊	薬師如来(湯原薬師)	仏事	春の薬師祭／日向見薬師堂大般若講(4/8)
創立・沿革	「四万温泉には、源頼光四天王の一人碓氷定光が永延3年(989)当地で夢告げを受けて靈泉を発見、守本尊の薬師如来を安置して日向見山定光寺と号したという開基伝説がある。また四万川下流の折田に定光寺の地名があり、堂はここにあったと伝える。上杉家の執事長尾昌賢が安置されていた薬師を上杉顕定に献じた。兵を率いて平井城(現藤岡市)から越後へ出兵しようとして四万の木ノ根宿に泊まった顕定は、兄上杉房能の戦死を知りて同地に薬師堂を安置した。天文6年(1537)宗次によって宮殿が完成したので、木ノ根宿から像を移したという(日向見薬師別当三光院差出状 田村家文書)」(『群馬県野の地名』より)。		
文化財指定	薬師堂(国重文 明治45年2月)、薬師堂お籠り堂(町重文 平成12年3月)		

位置・配置 (図110-1、写110-1)

四万温泉郷最奥の日向見地区の四万川支流・日向見川左岸に位置する。梅の頭(標高1,564m)の南方に迫出した尾根先端部の南西傾斜地である。南北(奥行)50m、東西(幅)30m程の縦長の境内に、鳥居、籠り堂、薬師堂を南北の軸線上に並べている。北東側は急峻な自然地形で山林となっている。旧参道は東側(山側)の少し高い位置にあり、現在の籠り堂の脇に下りていたようである。道路を挟んだ西側には足湯と共同浴場がある。

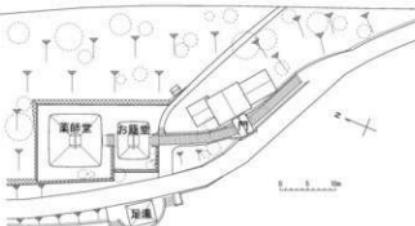


図110-1 配置図



写110-1 境内全景

由来および沿革

田村文書のほか、「天文4年(1535)[※]美濃国米田村の住人清水八郎実次が折田定光寺より移建造立すると伝えられている。のち慶長3年(1598)3月伊勢山田、鹿喜左衛門家定が再建、以降元和3年(1617)、享保13年(1728)、享保16年(1731)、延享3年(1746)それぞれ修繕されたらしく棟札が保存されている」(『吾妻郡社寺録』／※引用ママ)。

薬師堂 (図110-2、表110-2、写110-2～110-7)

3間四方の堂である。外部は、粽付柱に台輪を廻し、組物を出組、中備なしの簡素な意匠としている。木鼻・台輪端部の縁型形状や、同心円によく巻いた渦文に禅宗様の手法がみられる。内部は背面から1間手前の柱列を境として、前方を外陣、後方を内陣に分けている。上部(小屋)の構造は、正面及び内陣境の中央2本の柱に虹梁を架し、虹梁上部四点に置いた板幕股に井桁を二重に架け、四方に垂木

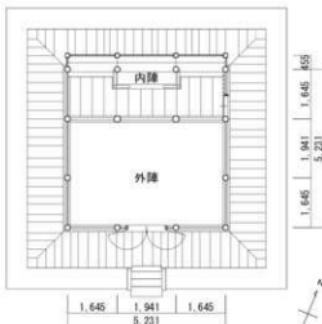


図110-2 平面図(薬師堂)

1. 本調査：寺院建築

を降ろす形式としている。井桁の上部は出組で受けた鏡板天井に水神が描かれている。板幕股は構造役割りを担い、肩が張った力強い形状をしている。内陣は背部を半間下屋で出し、金泥塗の来迎柱間に須弥壇を設け宮殿を備えている。宮殿の造立は棟札により天文6年(1537)である。薬師堂の建造年は棟札から慶長3年(1598)、各所に見る形式的特徴に時代性を見る事ができる。代々真田家で修復を加え、真田信幸は京銭百五十一文を、信吉は二百七十二文を寄進した。昭和42年(1967)に全面的な修理が行なわれた。県内最古の寺院建築である。

お籠り堂 (図110-3、表110-3、写110-8~110-10)

お籠り堂は、湯治客が病気平癒のため一定期間心身を清め、堂に籠もって「参籠祈願」をした。

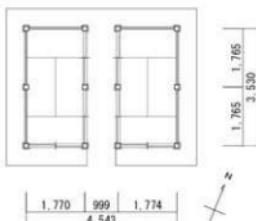


図110-3 平面図(お籠り堂)

表110-2 薬師堂

建造年代／根据	[薬師堂]慶長3年(1598)/棟札 [宮殿]天文6年(1537)/棟札	構造・形式	正面3間(5.23m)、側面3.5間(5.68m)、方形造、茅葺
工 匠	[大工]横尾継殷助、文藏、喜助 [鍛冶]源七郎	基 础	自然石基礎
軸 部	[外部]丸柱(棕付)、角柱(背面下屋)、長押、貫、台輪 [内部]角柱(内外陣境)、虹梁	組 物	[外部]出組(拳鼻) [内部]出組(拳鼻)
中 備	[外部]なし [内部]板幕股	軒	二軒、半繁垂木
妻 鮎	なし	柱 間 装 置	[外部]找唐戸、半蔀戸、板壁(竖板) [内部]格子(内外陣境)
縁・高欄・船脛子	四方切目縁	床	疊敷(当初拭板)
天 井	化粧屋根裏、鏡板	須弥壇・厨子・宮殿	須弥壇(禪宗様)、宮殿(禪宗様)
塗 装	[外部]素木 [内部]黒漆塗(丸柱)、朱漆塗(内陣丸柱)、金泥塗(来迎柱)、彩色(鏡板天井画)	飾 金 物 等	なし
繪 画	天井画(水神/龍)	材 质	杉
彫 刻	木鼻(渦文)、板幕股(渦文、植物)		



写110-2 全景



写110-3 背面・側面



写110-4 木鼻



写110-5 外陣正面



写110-6 内陣



写110-7 宮殿

表110-3 お籠り堂

建造年代／根据	17世紀前期／建築様式	構造・形式	正面4.54m、側面3.53m、寄棟造茅葺
工 匠	不明	基 础	自然石基礎
軸 部	角柱、貫、桁	組 物	なし
中 備	なし	軒	せがい造、板張
妻 飾	なし	柱 間 裝 置	格子戸、板壁
縁・高欄・船脛子	なし	床	疊敷
天 井	井 格天井	須弥壇・扇子・宮殿	なし
塗 装	素木・古色塗	飾 金 物 等	なし
絵 画	なし	材 質	杉
彫 刻	なし		



写110-8 正面



写110-9 側面



写110-10 中央通路

期間中は、読経、称名念佛、題目をし、また断食や水垢離などの荒行も行われた。現在は社務所として使用されている。建物は中央部を通路・入口とし両脇を部屋とした平面構成を取り、通路を抜けると薬師堂正面となっている。軒は四方をせがい造として寄棟の茅葺屋根載せている。昭和42年に薬師堂の復原修復が行われ、その年の12月に落慶法要が営まれるに際し、境内内の東側に疋家された。その後、昭和59年に修復工事で元の位置に復原された。明治22年「四万村誌」には慶長19年(1619)建立と記されている。年代指標に欠くが17世紀前期と推測する。

まとめ

日向見薬師堂は、群馬県内に残る最も古い室町末期の寺院建築であり、禅宗様建築の様式を今に伝える建造物として貴重な文化財である。さらに、お籠り堂とともに温泉地の宗教的特質を示している。昭和42年の解体工事は写真・図面のみを記録する冊子が存在する。その工事内容は『真田氏ゆかりの日向

見薬師堂の歴史』に概要を見ることができる。薬師堂の落慶法要は淨土宗總本山知恩院の法主を招いて盛大に執り行われた。その際にお籠り堂は東に一時移築、その後現在の場所に復原しており、宗本寺の管理書類から経緯をひもとかせて頂いた。明治期の旧保護法下で国宝とされた貴重な文化財建造物であり、指定が早いゆえに現代に見る形式の建築調査報告書がなく、附指定の宮殿、町指定のお籠り堂も含めて文献史料と併せてのさらなる総合的な研究が望まれる。

(岡田敦志、小池志津子、長井淳一)

【参考文献】

- 『中之条町誌1・2・3卷』中之条町誌編纂委員会 昭和51~53年
- 『吾妻地方の文化財』群馬県教育委員会 昭和53年
- 『吾妻郡社寺録』昭和53年
- 『上州のお宮とお寺寺院編』近藤義雄 昭和53年
- 『真田氏ゆかりの日向見薬師堂の歴史』中之条町教育委員会 昭和60年

111 宗本寺【そうほんじ】

表111-1

寺院名	福水山壽谷院宗本寺	所在地	吾妻郡中之条町下沢渡494
宗派	浄土宗	所有者・管理者	宗教法人 宗本寺
主本尊	阿弥陀如来	仏事	修正会(1/1)、念仏会(3月第2日曜)、日向見葉師堂大祭(4/8)、施餓鬼会(8/14)、十夜会(11/28)
創立・沿革	康應六年(1394)開山真譽誓故創立後、寛文元年(1661)灰燼シ当寺十五主諒海教密再建、又延享元年(1744)正月十三日焼失ス、拾八主高譽哲秀寛延二年(1749)三月再築(『上野国吾妻郡寺院明細帳』より他)		
文化財指定	宗本寺の欄間(町重文 平成12年3月)、宗本寺の宝鏡印塔(県重文 昭和32年4月)、絹本着色二十五菩薩來迎図(県重文 昭和56年5月 県立歴史博物館収藏)		

位置・配置(図111-1、写111-1)

四万川の東岸、美野原台地に位置する。四万街道国道353号線を四万方面に向かい、沢渡・六合方面に分岐する地点から数百メートル進んだ右手に冠木門が置かれ。これをくぐり石段を上ると境内となる。西向き斜面を造成した高台に本堂、開山堂、庫裡を並べて配す。開山堂は沢渡氏の持仏堂を移築したと伝わる。右手坪庭を廻り込むと庫裡の玄関となる。境内西側には六合村入山に移築した銀山寺跡、

墓地には14世紀の宝鏡印塔他多数の石造物が散在し歴史の古さを示している。

由来および沿革

『上野国吾妻郡寺院明細帳』によれば「康應六年(1394)開山真譽誓故創立後、寛文元年(1661)灰燼シ当寺十五主諒海教密再建、又延享元年(1744)正月十三日焼失ス、拾八主高譽哲秀寛延二年(1749)三月再築、安部弥之作像」とする。ただし『中之条町誌』では康應は2年しかないことを指摘、6年は応永6年(1399)とする。また町誌資料編では開山は天正11年(1583)晚蓮社真譽上人誓放大和尚としている。なお宗本寺によれば、天正11年は真譽上人の歿年であり、永祿7年(1564)を開山としている。



図111-1 配置図



写111-1 境内全景

本堂(図111-2、表111-2、写111-2～111-7)

正面8間、側面7間、軒唐破風付、入母屋造銅板

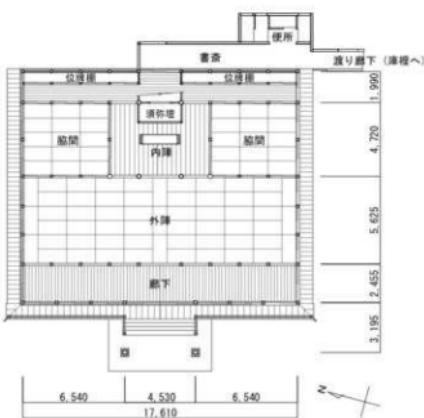


図111-2 平面図(本堂)

葺（当初茅葺）の堂宇である。身舎外部は貫見せ漆喰壁、出組、一軒疎垂木と簡素な意匠である。これに比し向拝は虹梁から上部が細密な彫刻で飾られ、後世に付されたものと推測される。間取りは、前列に幅8尺の廊下を配し、中列に51畳の外陣、後列中央に幅3間の内陣を取り、両脇に脇間を配し、背面に廊下と位牌棚を備えている。外陣の両妻壁から1

間内側には虹梁が架けられ、廊下が巡っていたと推測される。各室境には、厚肉彫り極彩色の欄間彫刻を25枚嵌め込み、内陣正面（来迎柱筋）は特に華やかである。彫刻の裏面には、墨書で彫師銘と年号〔花輪村 高瀬忠七・享和元年(1801)、米野 萩原平蔵・天保13年(1842)、定運・天保13年〕が記されている。建造年は棟札により寛延3年(1750)とある。

写111-2 本堂

建造年代／根拠	寛延3年(1750)／棟札	構造・形式	正面8間(17.61m)、側面7間(14.70m)、入母屋造、平入、向拝1間、軒唐破風付、銅板葺(当初茅葺)
工 匠	[棟梁]群馬郡和田山村松本吉右衛門、福田源六、演名善兵衛、園田嘉七、田村藤藏、青柳文次郎、田口林藏ほか／棟札、[彫物師]花輪村 高瀬忠七(享和元年)、米野 萩原平蔵(天保13年)、定運(天保13年)／彫刻裏面墨書き	基 础	[身舎]切石基礎、自然石基礎 [向拝]切石基礎、礎盤
輪 部	[身舎外部]角柱、土台、貫、長押、虹梁 [身舎内部]角柱(、内陣)丸柱棕付、虹梁、台輪 [向拝]角柱、虹梁	組 物	[身舎]出組 [向拝]出組
中 備	[身舎]轍股 [向拝]彫刻	軒	[身舎]-軒疎垂木 [向拝]-軒繁茨垂木
妻 飾	[身舎]木連格子 [向拝]虹梁、大瓶束	柱 間 装 置	[身舎]硝子戸、障子、漆喰壁
幕・高欄・脇障子	三方縁、擬宝珠高欄	床	壇、拭板
天 井	[身舎]竿縁天井、鏡板格天井 [向拝]鏡板格天井	簷彌縫・扇子・宮殿	須弥壇(禅宗様)
塗 装	[身舎]彫刻：極彩色、天井絵：彩色 [向拝]素木、天井絵：彩色	飾 金 物 等	なし
繪 画	[身舎]天井絵(動植物)、板襖(植物・中国故事)融堂等落款有 [向拝]天井絵(動植物)	材 質	[身舎]禪、杉 [向拝]禪
彫 刻	[身舎]欄間彫刻(獅子、中国故事、天女他)、虹梁(若葉)、板支輪(水紋に菊)、幕股(植物、天女、龍) [向拝]虹梁(菊の渦・若葉)、木鼻(獅子、象)、中備(龍、鬼)、肘木(渦)、妻飾(中国故事)、兎の毛通(黄安仙人)		



写111-2 全景



写111-3 背面・側面



写111-4 向拝正面見上げ



写111-5 外陣正面



写111-6 内陣



写111-7 外陣・廊下境 彫刻欄間(中央)

内部の拳鼻・虹梁の唐草は彫りが浅く簡素な形状を取るなど、他の建築様式と合わせて、棟札の年代を示している。

まとめ

江戸中期の浄土宗寺院である。建造から半世紀後に欄間彫刻が取付けられはじめ、その後40年を超える期間をかけ寄進され続いている。彫師の一人は花輪村の初代石原吟八郎の弟子とされる高瀬万之助の子の忠七など彫り物師の銘と年代が明らかである。高瀬親子は東吾妻町の應永寺も手掛けるなど地域における彫刻の伝播を知ることができる。

(岡田敦志、小池志津子、長井淳一)

【参考文献】

- 『中之条町誌1・2・3卷』中之条町誌編纂委員会 昭和51～53年
- 『吾妻郡寺社録』西毛新聞社 昭和53年
- 『吾妻地方の文化財』群馬県教育委員会 昭和53年
- 『上州のお宮とお寺寺院編』近藤義雄 昭和53年
- 『群馬県歴史散歩101号』群馬県歴史散歩の会 平成2年

113 常林寺（じょうりんじ）

表113-1

寺院名	龍燈山常林寺	所在地	吾妻郡長野原町応桑547
宗派	曹洞宗	所有者・管理者	宗教法人 常林寺
主本尊	紙迦如來	仏事	涅槃会（3/15）、大般若・花祭（鎌原觀音堂から念仏勸誦 5/8）、天明浅間焼供養（7/8）、盆供養（8/15）等
創立・沿革	開基は鎌原城主15世大和守正重または14世重實、鎌原氏は滋野源氏、海野氏の一族である。開山は南蛇井の曹洞宗最興寺2世無庵正慧で、最興寺末となる。現在の住職は30世である。弘治元年は中興の年であり、「螺恋村誌」では当初の開山を南北朝初期の1331年頃と推察している。無庵正慧以前の前住7世（7氏）は、朝夕名称札拂がされており、この間約200年の宗旨は不明である。		
文化財指定	常林寺の梵鐘（長野原町重文 昭和53年2月 やんば天明泥流ミュージアム収藏）、享禄の經筒（螺恋村重文昭和51年6月）		

位置・配置（図113-1、写113-1）

螺恋村芦生田集落から長野原町応桑集落方面に南下する県道・螺恋応桑線に面した山腹に東面して境内を構える。標高約810m、東側には小宿川が東流する。かつての境内は小宿川の少し上流の対岸に位置していたが、天明3年（1783）の浅間噴火による錆



図113-1 配置図

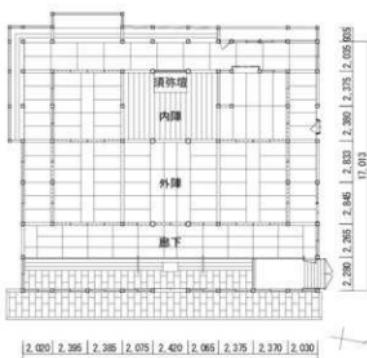


写113-1 境内全景

原土石なだれで堂宇全てを流し、現在の位置に復興された。境内は堂宇を含む部分を長野原町、西側部分を螺恋村に属する。間口（南北）約150m、東西約100m、東西高低差約20mの敷地で、北側道路より下段部の駐車場及び上段部の堂宇敷地に至る。敷地南北の中央に東面して本堂が建ち、右手に庫裡を接続し、左手に鐘楼を置く。本堂の西側背面は急峻な地形となっており、復興時に堂宇建築のため切土造成されたと思われる。明治30年代に台風による裏山の土砂崩れで西側にあった僧堂を失い現在は跡地に石碑を残す。

由来および沿革

開基は鎌倉末期の鎌原城主15世大和守正重または14世重實、鎌原氏は滋野源氏、海野氏の一族である。開山は南蛇井の曹洞宗最興寺2世無庵正慧で、



写113-2 平面図(本堂)

最興寺末となる。現在の住職は30世である。弘治元年は中興の年であり、「嬬恋村誌」では当初の開山を南北朝初期の1331年頃と推定している。嬬恋村大筆無量院、軽井沢町追分泉洞寺は末寺、管理の堂宇は嬬恋村干俣円通殿、鎌原觀音堂等である。

天明3年の被災時、小宿村では鎌原土石なだれにより、常林寺も含めた全戸が流出した。寺は被災直後6年を寒風激しい草庵で過ごし、寛政年間は今井村内の仮堂で禮務にあたる。文化6年(1806)、流出した旧寺院の小宿川対岸である現在地に帰住、文政

7年(1824)22世法泉和尚の代に伽藍の再建を果たすまで40余年を要した。被災により流出した梵鐘は127年後の明治43年(1910)下流20kmの川原畑で、また龍頭は200年後の昭和58年(1983)に2km下流の今井で発見されている。

本堂 (図113-2、表113-2、写113-2~113-7)

常林寺は天明3年の浅間押しで被災し文政7年(1824)に再建された。本堂は南を正面とし、前面土間(一部板張改修)8室の平面形式を取り、中央左

表113-2 本堂

建造年代／根拠	文政7年(1824)／上棟銘	構造・形式	正面19.47m、側面15.20m、入母屋、平入、造銅板葺(当初茅葺)
工 匠	[工匠]大棟梁 信州上諏訪矢ヶ崎国太郎、後見 全 善司昭方／上棟銘 [彫師]仏師 原田定慶、萩原米藏、信州諏訪方 矢寄豈前櫟昭方	基 础	切石基礎
軸 部	角柱、土台、貫、虹梁(正面)、台輪 [内部] 角柱、丸柱(内外陣、来迎柱)、虹梁、長押、台輪	組 物	[外部]平三斗、出三斗(隅部)、舟肘木 [内部] 出組(拳鼻)
中 備	[外部]本幕股(縁抜) [内部]本幕股(縁抜)	軒	二軒、疎垂木
妻 鮒	虹梁大瓶束(二重)、本幕股(縁抜)、木連格子	柱 間 裝 置	漆喰壁、硝子戸
緋・高欄、脇障子	なし	床	疊敷、拭床、石敷
天 井	折上格天井、格天井、棹縁天井、鏡板天井、化粧星根裏天井、板支輪(彫刻)	須弥壇・厨子・宮殿	須弥壇(禅宗様)、前机
塗 装	素木(欄間彫刻)、楓彩色(欄間彫刻)	飾 金 物 等	なし
繪 画	天井画(草花、花木、鳥、動物)、板戸絵(虎)	材 質	檜
彫 刻	[外部]木鼻(絵様)、虹梁(若葉絵様)、幕股(雲文) [内部]木鼻(絵様)、虹梁(若葉絵様)、欄間彫刻(龍、故事、牡丹・鳥)、支輪(水文)、前机(龍)		



写113-2 全景



写113-3 側面



写113-4 土間・廊下・外陣全景



写113-5 外陣正面



写113-6 外陣廊下境欄間彫刻(中央)



写113-7 外陣・内陣境欄間彫刻(中央)

寄りに外陣、内陣、須弥壇を配す。外陣の正面欄間には檜素木の彫刻、側面及び内陣欄間には極彩色の彫刻が嵌められている。

上棟銘に記される大棟梁信州上諏訪矢崎国太郎(二代善司 矩慶)・後見矢崎善司昭方は、大隅流の系譜に属し、昭方は下仁田諏訪神社を手掛けている。欄間彫刻の裏面には、文政8及び9年(1825・1826)原田定慶藤原朝房・萩原米蔵喜重、及び信州諏訪方矢寄豊前櫻昭方(棟梁後見、上棟銘に同じ)の銘が彫られ年代・彫工名が明らかである。原田定慶藤原朝房の系譜は詳らかでないが、同じく浅間押し後に再建された雲林寺の彫刻にも同銘があり、地域における彫工の系譜を知る上で貴重といえる。

絵画は、外陣2段に折上げられた格天井に彩色の禽獸と墨の龍、内陣に彩色の禽獸が描かれている。旧庫裏へ通じる板戸に有川興等筆の虎図、寺伝では狩野派と伝わる。天井画の龍は、安中市曹洞宗長源寺住職寿昌和尚78歳時の作である。

まとめ

天明3年以前の伽藍は小宿川の対岸にあった。檀家信徒1,000余名が大事業に奉仕し現地に再建した。また文政6年(1823)常林寺納所から伝えられた「石材木人足積触帳」に再建について全檀家に割り当てた取立・人夫手間が記録される。さらに文政3年(1820)から3年間にわたり全戸毎日2文ずつ掛取立をすると十八カ村懇意連印で申し合せの文書も残る。再建に尽力した法泉大和尚は22世、欄間に名を残す。令和元年(2019)台風19号による裏山土砂崩れにより本堂北面が破損、石積よう壁の一部が崩壊し、改修を行った。地域の災害史も伝える寺院である。

(岡田敦志、小池志津子、長井淳一)

【参考文献】

『吾妻地方の文化財』群馬県教育委員会 昭和53年

『吾妻郡社寺録』西毛新聞社 昭和53年

『長野原町誌 上・下巻』長野原町誌編纂委員会 昭和51年

『嬬恋村誌 上・下巻』嬬恋村誌編集委員会 昭和52年

松島栄治『嬬恋村の自然と文化』嬬恋郷土資料館 平成17年

115 (常林寺)円通殿 ((じょうりんじ)えんつうでん)

表115-1

寺院名	(常林寺)円通殿	所在地	吾妻郡嬬恋村干俣1320
宗派	曹洞宗	所有者・管理者	宗教法人 常林寺
主本尊	薬師如来他諸仏あり	仏事	念仏(4月から10月、8日と10日)
創立・沿革	常林寺は、北甘楽郡南蛇井の最奥寺の末寺として正慧和尚により開設されたもので、これには鎌原大和守が中興開基として記録されている。曹洞宗常林寺は以来豊かな資料を持っているが、この弘治年間以前にいわゆる常林寺先住なる僧の存在が数人あった。そのうちの一人「旭邦本禪和尚」が永正年間(1504頃)に円通庵を結び、この地に閑居したと常林寺文書にある。和尚はここで村の子弟を教化して、この地で遷化している。		
文化財指定	円通殿(村重文 昭和48年12月)		

位置・配置 (図115-1、写115-1)

干俣地区は標高1,000m盆地状の裾野に開け、吾妻川支流の干俣川が貫流する。真田支配の後は幕府領であった。堂宇は小高い地形の西斜面に南西向きに建つ。境内からは右手眼下に干俣集落、遠く長野県境山並みをのぞむ。境内にはアララギの古大木が3本茂り、樹下には石像の慈母観音(子育て観音)が置かれ、周囲には石造物が集められ置かれている。

由来および沿革

常林寺(№113)によれば、円通は觀音菩薩を意味する。円通殿は禅宗の言い方で淨土宗では觀音堂ともいう。地域では干俣觀音堂とも呼ばれている。

かつて庵が隣接していたとの伝承があり、常林寺先住の和尚ほか名を遺す僧侶の居住した記録が残されている。隠居の庵のほか、寺外施設としての機能を持っていたと伺える。

4月から10月は毎月2回、上組と下組が各々日を決めて念仏の伝統を継承している。

円通殿(図115-2、表115-2、写115-2~115-7)

正面3間、側面変則3間、軒唐破風付向拝を付けた方形造銅板葺(当初茅葺)の三間堂である。堂内は手前の奥行2間を外陣、背部の奥行3尺を須弥壇とする。三間形式の須弥壇は禅宗様を用い各間に仏が安置される。身舎外部は柱に台輪を截せ大斗肘木とする。拳鼻や虹梁の渦文様は単純な形状であり、台輪木鼻とともに鈴を付けている。向拝の意匠は少し複雑な様相を呈し、虹梁には波形文様を付け、木鼻は丸彫の獅子・象鼻とする。内部は外周同様に大斗

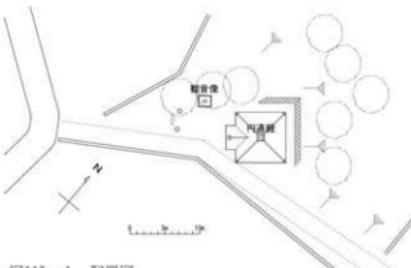


図115-1 配置図



写115-1 境内全景

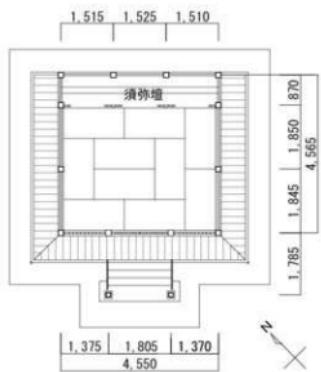


図115-2 平面図(円通殿)

肘木とし渦文様である。須弥壇境は少し意匠が変わり、虹梁に草花が彫られ、中備ともに出組としている。これらから、向拝及び須弥壇廻りは後世の増築または改修によるものと推測される。当堂宇は、18世紀中頃から19世紀後半に隣接した庵に所属した仏殿とされている。身舎における形式・意匠的特徴から18世紀後期と推定される。

まとめ

円通殿は構造・技法・意匠・名称共に、禪宗様の影響を色濃く残している。「この山里に禪宗風の文化が開花したことを示すと共に、これが信仰と文化的拠点であったことを物語っている。」(『嬬恋の自

然と文化』より)。堂内の和讃歌詞には寒冷地と災害による厳しい生活の様子が残るが、貞享3年(1686)の検帳に名の残る干川家は天明3年浅間焼けの際に私財を投じて難民救済に当たり、堂内には干俣小兵衛奉納した位牌が残る。4月から10月の間、毎月8日に下組、毎月10日に上組が念仏をあげている。

(岡田敦志、小池志津子、長井淳一)

[参考文献]

『嬬恋村誌 上・下巻』嬬恋村誌編集委員会 昭和52年
松島栄治『嬬恋村の自然と文化』嬬恋郷土資料館 平成17年
『嬬恋の民俗』群馬県教育委員会 昭和48年

写115-2 円通殿

建造年代／根柢	18世紀後期／建築様式	構 造	正面 3間(4.55m)、側面 变则 3間(4.56m)、方形造、向拝 1間、軒唐破風付、銅板瓦葺(当初茅葺)
工 匠	不明	基 础	【身舎】自然石基礎 【向拝】切石基礎、礎盤
輪 部	【身舎外部】角柱、土台、虹梁、貫、長押、台輪 【身舎内部】(来迎柱)丸柱 【向拝】角柱、水引虹梁、海老虹梁	組 物	【身舎外部】大斗肘木 【身舎内部】大斗肘木、出組(内陣境) 【向拝】出組、連三斗
中 備	【身舎外部】なし 【身舎内部】詰組(内陣境) 【向拝】本蘿股	軒	【身舎】二軒半繁扇垂木 【向拝】二軒半繁扇垂木
妻 鋲	【身舎】なし	柱 間 妻 鋲	【身舎】棟唐戸、格子戸、板壁
縁・高欄・檻障子	【身舎】三方切目縁 【向拝】木階 3級	床	骨
天 井	【身舎】格天井	須弥壇・扇子・宮殿	須弥壇(禪宗様)
塗 裝	朱塗、黒塗	飾 金 物 等	なし
絵 画	なし	材 質	不明、禪(来迎柱)
彫 刻	【身舎外部】大斗肘木(満)、拳鼻(満・若葉)、虹梁(満・若葉) 【身舎内部】大斗肘木(満)、虹梁(満・若葉・草花)、板支輪(水紋) 【向拝】木鼻(獅子・象)、虹梁(波文)		



写115-2 全景



写115-3 側面



写115-4 向拝



写115-5 向拝側面



写115-6 内部 正面



写115-7 旧千俣小学校校庭より

116 鎌原観音堂（かんばらかんのんどう）

表116-1

寺院名	鎌原誠音堂	所在地	吾妻郡嬬恋村鎌原492
宗派	敷地を管理する常林寺は曹洞宗	所有者・管理者	敷地は常林寺所属 鎌原観音堂奉仕会が管理する
主本尊	十一面觀音菩薩	仏事	浅間山噴火と大和讚の和諒奉納は毎月2回、夏季の5回のみ観音堂で実施。春彼岸の3月18日には人型のみ団子を供物とする。5月8日花祭で常林寺に念仏奉納。
創立・沿革	古者の言い伝えには、大同元年には存置されたという。三原谷34番札所の第8番で鎌原始まっての靈場とされる。天明3年7月8日、浅間山大爆発の際にこの堂に逃げ上った者九十余名が助かり、四百七十余名は人家牛馬と共に押流された（「嬬恋村誌（下）」より）。		
文化財指定	天明三年浅間やけ遺跡（県史跡 昭和31年6月）、延命寺石標（村史跡 昭和51年6月）		

位置・配置（図116-1、写116-1）

鎌原集落は浅間山麓北麓の村内最大の村で、標高900m、浅間山火口より12kmに位置する。舌状に突出する急崖上の平地は戦国時代に北信濃豪族海野氏の流れをくむ鎌原氏の居城であった鎌原城跡があり、集落はその町屋の集落として形成されたといわ



図116-1 配置図



写116-1 境内全景

れ、天明3年(1783)の浅間山噴火被災前は100戸五百数十名の宿場であった。噴火による土石なだれで埋没した集落の上に同様の地割をして復興し現在に至る。

観音堂は集落西側の高台に建っている。村道から石疊の参道を進むと太鼓橋に至り、これを渡り石段を上ると観音堂正面となる。石段上り口には埋没石段と記され、天明の浅間山噴火の泥流がここまで押し寄せたことを物語っている。観音堂は正面を南東に向き、右手に御籠り堂が矩手に隣接する。堂の西側には近隣から移築された地蔵堂が建ち、境内を囲うように石造諸仏が並んでいる。

由来および沿革

天明3年(1783)から240年近く経過するが、浅間噴火の大和讚は当時の様子を詳細に伝える。生存者は家格にこだわらず新しい家族を形成して埋没集落の上に再建をはかったが、その子孫を中心に追悼と語り継ぎが行われている。「堂の修復も奉加板からして、元禄、正徳、宝暦、文政、万延、明治、大正、昭和というように行われている」（「嬬恋村誌」）。近年では平成28年(2016)に本堂、平成29年(2017)にお籠り堂の屋根の茅の葺替を行った。

観音堂（図116-2、表116-2、写116-2～116-7）

正面3間、側面3間、寄せ棟造茅葺の堂宇である。2016年に屋根の葺替え、部分的修繕及び美装が行われた。軸部形式は自然石独立基礎・土台敷き・貫構造で、柱上の舟肘木に桁を廻し、四方に迫出したせがい梁で屋根を受けていた。堂内は正面に須弥壇を備え厨子が置かれる。櫛造・禪宗様の須弥壇は

宝曆12年(1762)の奉加寄進連名板札が残されている。ほか、元禄・聖徳・宝曆・文政・万延・明治・大正・昭和の年号の記された数多くの絵馬、参加札を残す。内部意匠は疊敷、板壁、棹縁天井と簡素な仕様である。正徳3年(1713)の棟札写し(安政7年以降の写し)が残されており、建築様式からもこれを建造年とする。

お籠り堂(図116-2、表116-3、写116-8~116-13)

正面6.41m、側面4.55m、寄せ棟造茅葺とする。2017年に屋根の葺替え、部分的修繕及び美装が行われた。軸部形式は自然石独立基礎・土台敷き・貫構造で、柱上に桁を廻し、茅葺屋根を載せる。内部は中央に囲炉裏が置かれ居住性を備えている。小屋裏がかなり煤けており、当初は屋根裏天井であったと



図116-2 平面図(観音堂・お籠り堂)

表116-2 観音堂

建造年代／根拠	正徳3年(1713)／棟札	構造・形式	正面3間(4.55m)、側面3間(4.56m)、方形造、茅葺
工 匠	大工大前村 宮崎与左衛門	基 础	自然石基礎
軸 部	土台、角柱、貫、長押、桁	組 物	舟肘木
中 備	なし	軒	せがい造、板張
妻 飾	なし	柱 間 装 置	格子組桟唐戸、板羽目
縁・高欄・脇障子	三方切目縁	床	疊
天 井	竿縁天井	須弥壇・扇子・宮殿	須弥壇(禪宗様)宝曆12年(1762)／棟札
塗 装	なし	飾 金 物 等	なし
絵 画	絵馬、額多数	材 贳	杉
彫 刻	なし		



写116-2 正面(南面)



写116-3 側面(西面)



写116-4 軒見上げ



写116-5 内部正面



写116-6 内部側面



写116-7 須弥壇

表116-3 お籠り堂

建造年代／根拠	江戸後期／建築様式	構造・形式	正面妻則4間(6.41m)、側面妻則4間(4.55m)、寄棟造、茅葺
工 匠	不明	基 础	自然石基礎
軸 部	角柱、土台、貫、丸桁	組 物	なし
中 備	なし	軒	茅屋根裏面
妻 飾	なし	柱 間 裝 置	格子組棟唐戸、土壁、腰板
縁・高欄・脇障子	正面切目縁	床	檻、拭板
天 井	格天井	須弥壇・扇子・宮殿	なし
塗 装	なし	飾 金 物 等	なし
絵 画	なし	材 質	杉
彫 刻	なし		



写真116-8 正面(西面)



写真116-9 南東面



写真116-10 南面



写真116-11 屋根



写真116-12 内部(北東面)



写真116-13 小屋裏

思われる。開口部等も改修されている。

近年まで彼岸には「みごだんごづくり」や男衆が集まり寝泊まりをする習慣があったという。現在は参拝者の接待、当番の詰め所として使用されている。年代指標に欠けるが、江戸後期の建造と推定される。四万の日向見薬師堂のお籠り堂も同様な関係性である。

まとめ

天明3年の浅間押しは我が国火山災害史上でも特筆すべきもので、最大の被害を被ったのが鎌原村で

あり、観音堂・お籠り堂はその象徴である。火山災害の教訓、災害復興の象徴として全国的から参拝者が訪れ、様々な分野での研究がなされている。現在は観音堂奉仕会が結成され、お籠り堂は来訪者の接待用施設としても活用されている。

(岡田敦志、小池志津子、長井淳一)

[参考文献]

- 『嬬恋村誌 上・下巻』嬬恋村誌編集委員会 昭和52年
- 松島栄治『嬬恋村の自然と文化』嬬恋郷土資料館 平成17年
- 『嬬恋の民俗』群馬県教育委員会 昭和48年

118 光泉寺 (こうせんじ)

表118-1

寺 院 名	草津山光泉寺	所 在 地	吾妻郡草津町草津甲446
宗 派	真言宗豊山派	所有者・管理者	宗教法人 光泉寺
主 本 尊	本堂(薬師堂) / 薬師如来、釈迦堂 / 釈迦如来	仏 事	花まつり(5/7・5/8)、弁天様御開帳(5/7・5/8・8/16・10/8)
創 立・沿革	源頼朝の狩を案内した細野御殿介が温泉を発見、湯本性を与えられ、草庵に薬師瑠璃光如来を祀り(「群馬の地名」より)。白根明神の別当寺として正治2年(1200)に草津領主湯本氏が再建したと言い伝えられている。「釈迦堂の建立にに関しては「日月堂縁起」なるもののが存在し、この中に釈迦堂建立に至る由緒が記されている。…中略…釈迦堂は元禄16年に建立された様である)(「吾妻地方の文化財」より)。		
文 化 財 指 定	釈迦堂並びに本尊(町重文 昭和49年2月)、近衛龍山誦薬師十二神法華十首和歌(県重文 平成30年2月)、法印銘塔2基(町重文 昭和49年10月)、芭蕉句碑(町重文 昭和61年12月)、魚藍觀音(町重文 昭和61年12月)、日月堂縁起(町重文 平成20年10月)		

位置·配置(图118-1、图118-2)

光泉寺は、白根山東麓、標高1,200mに位置する草津温泉の湯畠西の高台に鎮座する。湯畠から高低差十数mの石段を上り本堂前に達する。石段途中に山門、両脇に湯善堂・不動堂、鐘楼堂及び石造物を配している。本堂回りは平らに造成され、右手に糺迦堂、左に庫裡を置き、右手背面に墓地と駐車場を配している。

由来および沿革

光泉寺記録には草津温泉開湯伝説として行基、源頼朝らがあげられ、草津温泉の守護とされる本堂は薬師堂とも呼ばれる。江戸期は光泉寺薬師の春祭と秋祭の間が草津温泉開湯期であり、冬期は冬住として小雨村（六合地区）等で過ごす制度となっていた。東大寺公慶上人は永禄10年(1567)に焼失した東大寺大仏殿再建を江戸幕府に願上、全国を勧進した。积迦堂の本尊は大仏の内腹の骨木で作ったもので、交流のあった江戸の医師外嶋玄賀宗静に送ったと伝わる。医師は草津湯治の際に発願、元禄16年



写118-1 墓内全景

(1703)年に釈迦堂を建立した。元禄16年に釈迦堂建立の経緯を記した紙本墨書の日月堂縁起は木造切金の釈迦如来坐像とともに、平成17年(2005)の奈良国立博物館の調査により東大寺公慶上人ゆかりのものであることが判明した。

釈迦堂(図118-2、表118-2、写118-2～118-7)

正面、側面ともに3.97mの堂宇である。方形屋根の正面に寄せ棟唐破風付の向拝を付けている。大き



図118-1 配置区

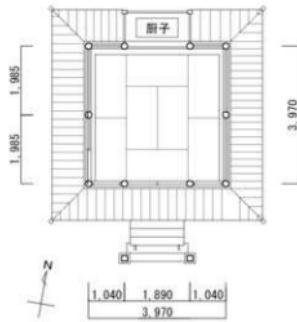


図118-2 平面図(祇迦堂)

く張出した茅葺き屋根は平成30年(2018)に葺き替えされた。身舎は、柱上三手先、詰組中備に蛇腹支輪、木鼻が拳鼻の形式を取る。禅宗様(尾垂木の反り形状・詰組)と和様(蛇腹支輪)がみられる折衷様である。向拝は出三斗2段組み、中備に彫刻を置き、虹梁木鼻には丸彫の獅子と額を付けるなど、身舎と形式の違いが見てとれる。内部は8畳の一空間であり背面に須弥壇を張出し本尊を安置している。組物は出組・拳鼻とされ中備はない。「吾妻地方の文化財」では、向拝及び背面下屋は当初無く後補及び改造、建造年は推定で縁起による元禄16年(1703)と記されている。身舎は、全般にわたり簡素な形式を取り、18世紀前期の建造と推定される。

まとめ

行基、源頼朝、武田信玄、近衛龍山、豊臣秀吉、

写118-2 积迦堂

建造年代／根据	18世纪前期／建築様式	構造・形式	
工 匠	不明	基 础	正面3間(3.97m)、側面2間(3.97m)、方形造、茅葺、向拝1間、軒唐破風付、背面下屋付
軸 部	[身舎]丸柱、土台、虹梁、台輪、貫、長押 [向拝]角柱、水引虹梁、海老虹梁	組 物	[身舎外部]三手先(尾垂木)、[身舎内部]出組(拳鼻) [向拝]出三斗2段、連三斗2段、手綴
中 備	[身舎]詰組 [向拝]彫刻	軒	[身舎]二軒繁垂木、蛇腹支輪 [向拝]茨繁垂木
要 飾	[身舎]なし [向拝]木幕股	柱 間 裝 置	[身舎]硝子入中折れ桟唐戸
縁・高欄・監障子	四方切目縁	床	[身舎]壇
天 井	[身舎]格天井		須弥壇・扇子・宮殿
塗 装	朱塗、黒塗		須弥壇・扇子有
絵 画	なし	飾 金 物 等	なし
彫 刻	木鼻(獅子、象)、虹梁(満・若葉)、拳(満)、向拝中備(鬼)	材 質	不明



写118-2 全景



写118-3 背面・側面



写118-4 向拝



写118-5 向拝側面見上げ



写118-6 内部正面



写118-7 向拝面

徳川吉宗等多くの歴史上の人物ゆかりの寺院であり、积迦堂に祀られている本尊の积迦如来像は平成17年の調査で公慶上人の作の伝承が事実であると証明されたことから「遷咲き如来」として参拝者を集めている。积迦堂の茅葺は平成30年に葺替えられ、維持されている。同年末のNHK「ゆく年くる年」では中継会場となつた。信仰及び歴史の面でも観光振興面でも地域の中核となる寺院である。

(岡田敦志、小池志津子、長井淳一)

[参考文献]

- 『草津温泉誌 1・2・3卷』草津町誌編纂委員会 昭和51～平成4年
- 『吾妻地方の文化財』群馬県教育委員会 昭和53年
- 近藤義雄「上州のお宮とお寺寺院編」上毛新聞社 昭和53年
- 「群馬県の地名」平凡社 昭和62年
- 奈良国立博物館 特別展東大寺公慶上人 江戸時代の大仏復興と奈良 平成17年 出品一覧及びHP

121 泉龍寺〔せんりゅうじ〕

表121-1

寺院名	熊野山泉照寺	所在地	吾妻郡高山村大字尻高甲1939
宗派	曹洞宗	所有者・管理者	宗教法人 泉龍寺
主本尊	般若如来	仏事	轉讀大般若(1/1~3)、涅槃會(2/15)、盂蘭盆會(8/13)、春秋披岸、除夜の鐘(12/31)、他
創立・沿革	同村内の真言宗の古寺龍開山泉照寺を当地に移し、慶長3年(1598)月夜野町内曹洞宗獄林寺の5世閑室伝察和尚が入寺して開山とする(高山村史)。		
文化財指定	泉竜寺のコウヤマキ(県天記 昭和29年3月)		

位置・配置(図121-1、写121-1)

泉龍寺は高山村西部尻高地区字北之谷に位置する曹洞宗寺院である。南から杉並木の参道を北に進み、元禄年間に建造されたと伝わる山門をくぐり、鐘楼を過ぎた正面に本堂が建つ。東に庫裏、蔵などを配置、本堂裏に樹齢800年を超える県指定天然記念物「泉竜寺のコウヤマキ」がある。庫裏裏には庭園池を残す。



写121-1 境内全景



図121-1 配置図

由来および沿革

由来記によると、大同年間(806~810)に弘法大師が開いたと伝わる真言宗の古刹龍開山泉照寺は、同村内字開田にあったが、天正11年(1583)落雷による焼失のため、文禄元年(1592)当地に移転し、慶長3年(1598)月夜野町内曹洞宗獄林寺の5世閑室伝察和尚を迎えて、旧名より泉と龍の字を取り泉龍寺と称し、改宗開山した。慶安2年(1649)に徳川三代将軍家光公より20石の御朱印を賜り、貞享5年(1688)本堂、元禄4年(1691)庫裏、鐘楼、山門を建立し、御朱印寺の面目を整えた。その後庫裏と鐘楼は改築されている。本寺には江戸参内時の籠と寛政2年(1790)境内絵図を含む御朱印関連の多数の古書を残す。

本堂(図121-2、表121-2、写121-2~121-7)

現在正面11間、側面8.5間の本堂は、昭和39年屋根を寄棟造茅葺から入母屋造鉄板葺に改修時、北面を増築している。内部は南から土間玄関と大縁(旧土間)、次に法堂と東2室、西1室、奥の内陣と東脇陣、室中、西開山堂など計8間取の規模となる。

改修された新座敷、東司、廊下、物置などの他、南西隅は小屋裏2階がある。組物は、外部を舟肘木で正面は雲形、内部大継の繫虹梁上の梁受は拳鼻付平三斗。内陣正面丸柱上を三手先、虹梁と頭貫間に透彫板欄間、上に幕股、両脇は篠欄間を置く。来迎柱上は象型と拳木鼻、拳鼻付二手先とし、中備に幕股を置く。軒は南面二軒疎垂木、背側面は茅葺屋根の造構せがい造に一軒疎垂木で、妻飾りは二重虹梁大瓶束に母屋受三斗、肘木付平三斗、幕股が加わる。彫刻は、外部雲形肘木の渦、内部虹梁の唐草絵様、象型と拳木鼻の渦、板欄間の透彫、幕股の三つ葉葵、橘紋と少なく、彩色もない。内陣と法堂の天井は平成12年に改修された鏡板張り格天井となっている。なお、中2階上の古い天井部分の吊り木に、割り竹が使用されているのは珍しい。

本堂の建築は棟札が残されており、貞享5年(1688)、棟梁は沼田當町 大河原堀四郎、大工は苗木兵右衛門 桑原堀太夫 大河原甚右衛門 宮崎次



図121-2 平面図(本堂)

郎左衛門 中崎平左衛門 飯塚仁兵衛 芦木茂兵衛
飯塚弥左衛門 中島門左衛門 高橋権兵衛 計10名
が書かれている。また、須弥壇裏と同高欄裏にも墨書があり、元禄2年(1689)と大河原銘を残す。本寺

表121-2 本堂

建造年代／根拠	貞享5年(1688)4月／棟札	構造・形式	正面20.40m、側面15.85m、入母屋造、平入、 鋼板平葺
工 匠	[大工]棟梁：沼田當町 大河原堀四郎 苗木 兵右衛門他9名	基 础	[外周]敷石基礎 [内部]自然石柱立
軸 部	[身舎]角柱、土台、差鶴居、丸柱(来迎・内 外陣正面2本)	組 物	[外部]舟肘木、正面雲形 [内部](大継)繫虹 梁上平三斗、(内陣正面)三手先、(来迎)拳木、 二手先
中 備	[内部](内陣法堂境)中央板幕股、(来迎柱)板幕 股	軒	(正面)二軒疎垂木、(背側面)せがい造一軒疎垂 木
妻 飾	二重虹梁大瓶束、母屋受出三斗、肘木付平三斗、 幕股	柱 間 装 置	引違戸 [外部]腰板壁
縁・高欄・脇障子	[東・西面]縁縁	床	疊敷、(内陣・大継)拭板
天 井	[脇陣]竿縁天井 [内陣・法堂]格天井 [大 継]竿縁天井、南側小屋表	須弥壇・扇子・宮殿	須弥壇(押宗様)
塗 装	素木	飾 金 物 等	[屋根]懸魚
繪 画	なし	材 質	檜、杉
彫 刻	[外部]雲形肘木(渦) [内部]虹梁(唐草絵様)、板彫刻(透彫)、象型・拳木鼻(渦)、拳鼻(渦)、板幕股(三つ葉葵、 橘紋)		



写121-2 南西面・コウヤマキ



写121-3 南面



写121-4 大継繫虹梁



写121-5 内陣・法堂



写121-6 内陣正面柱上組物



写121-7 来迎柱上組物

は彫刻などの装飾が少なく、大工が彫工を兼ねたと考える。虹梁の唐草の巻も強く、棊股も古風であるので、棟札年代通り17世紀後期の建物である。

まとめ

本堂は棟札や墨書きから、17世紀後期の造営年が判明する、県北部でも数少ない建物である。又、須弥壇高欄裏の墨書きは希少である。装飾が少なく、江戸時代初期の禅宗寺の様式を色濃く残す建物である。慶長10年(1605)・延享4年(1747)の御朱印写、寛政2年(1790)境内図、嘉永7年(1854)御朱印地控

等々、朱印寺に関する古文書を多く残す。明治期に始まった念仏講など、村民の信仰は厚く、樹齢800年を超える県指定の泉竜寺のコウヤマキと共に、親しみ深い古刹寺の建物である。

(岩崎謙治、貝磯博子)

【参考文献】

『高山村史』高山村 昭和47年

『高山の民家と宗教建築』高山村教育委員会 昭和53年

『たかやまの文化財』高山教育委員 平成7年、平成30年

『勢多郡東村誌 通史編』東村 平成10年

122 應永寺【おうえいじ】

表122-1

寺院名	福聚山應永寺	所在地	吾妻郡東吾妻町岩下1655
宗派	曹洞宗	所有者・管理者	宗教法人 應永寺
主本尊	般若如來	仏事	
創立・沿革	応永元年(1394)岩櫃城主斎藤行輝が真言宗青龍山應永寺を創建した。その後衰退し大永7年(1527)無庵正恵禪師が曹洞宗に改宗して再興した。天明3年(1783)に山門が落成し、天明6年(1786)火災により山門と鐘楼を残して堂塔が焼失した。その後庫裏を再建し、6年後の寛政4年(1792)には本堂が復興した(『岩島村誌』)。		
文化財指定	応永寺の傘松(町天記 昭和47年3月)		

位置・配置(図122-1、写122-1)

應永寺は国道145号線を中之条町から西に向かい、旧岩島中学校を過ぎてから北西方向の町道に入り、JR吾妻線の踏切を超えて更に町道を少し進むと右

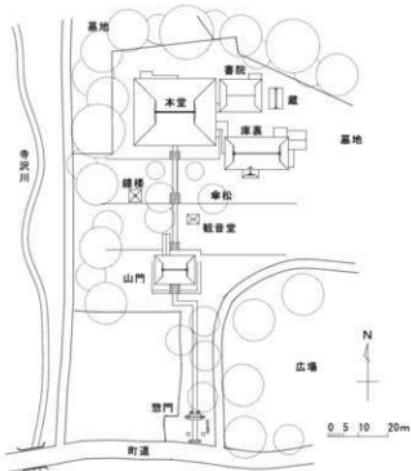


图122-1 配置図



写122-1 境内全景

手に惣門があり、石畳みの参道を登って二重門の山門を通りぬけると左手に鐘楼右手に町指定天然記念物の傘松があり、更に石段を登ると正面に本堂がある。本堂の右手に庫裏、その奥に書院が配置されている。背後は山地になっており、杉や檜の木立で囲まれている。境内には桜の木が多く、本堂脇には大きな枝垂桜がある。参道を振り返ると南の吾妻川に向かって眺望が開けている。

由来および沿革

『岩島村誌』によれば、応永元年(1394)岩櫃城主斎藤行輝が真言宗青龍山應永寺を創建したがその後戦国時代を経て衰退し、大永7年(1527)に最興寺(北甘楽郡南蛇井村)第4世の無庵正恵禪師が荒廃した寺を復興して福聚山應永寺と改め、曹洞宗に改宗して開山一世となったとある。寺伝によれば大永年間(1521~27)の火災により草創期の事は不詳であると江戸時代には概に云われている。天明3年(1783)には30余年の努力により山門が落成したが、その後には浅間山の大噴火が起きている。天明6年(1786)には近隣から発した火災により山門と鐘楼を残してほとんどの堂宇が焼失したが、その年に庫裏を再建して6年後の寛政4年(1792)には檀信徒の浄財により本堂が復興している。

本堂(図122-2、表122-2、写122-2~122-7)

建造年代は棟札により寛政4年(1792)である。正面10間、側面7間分の入母屋造銅板葺で平入である。外部は角柱で正面及び側面2間分までは拳付大斗肘木とし、軒は二軒半繁垂木である。来迎柱及び内陣と大間の境は丸柱で拳鼻付組とし、内陣は格天井、大間は折上格天井で共に彫刻板支輪としている。大縁から土間の上には繫虹梁が架かり、正面出入口部分には海老虹梁が架けられており、虹梁の中

央に組物を設けて母屋を受けている。妻飾りは木連格子で三つ花懸魚を付けている。平面は6間取りの東側に客寮、且過寮及び廊下が付き、南側には大縁と土間のある大規模な本堂である。内陣及び大間や大縁などの欄間には、林和靖、四睡、虎溪三笑等の人物や中国故事、昇龍・降龍、靈獸、植物、鳥類など29枚の彫刻がある。正面左右の欄間に裏に「清兵衛 太七良」の墨書があるが、これは施主名と思われる。彫刻に彫工師を特定する墨書等を見つけることができないが、棟札により彫工師は星整萬之助と同苗繁八である。この星整萬之助は、東吾妻町大柏

表122-2 本堂

建造年代／根拠	寛政4年(1792)／棟札	構造・形式	正面21.80m、側面17.70m、入母屋造、平入、銅板葺(当初寄棟茅葺)
工 匠	[大工]棟梁 室田 飯野友八、同苗長松、渡本 伊兵衛、武井定八、松木伴助、中嶋儀八、阿 久津伊三良、萩原政吉、當村 山野十太郎、町 田利吉、片貝治郎、山田(村)山口庄八、林村 小 林辰五良 [彫工]彫工師 星萬萬之助、同苗繁 八(棟札)	基 礎	基壇切石縁土間、切石布基礎
輪 部	[身舎]角柱、土台、貫、台輪、来迎柱(丸柱)	組 物	[身舎外部]拳鼻付大斗肘本(前面から2間分) [身舎内部]拳鼻付出組
中 備	[内部]内陣・大間)詰組	軒	二軒半繁垂木
妻 飾	木連格子、懸魚(三花)	柱 間 装 置	棟唐戸、舞良戸、板戸、ガラス戸
縁・高欄・脇障子	三方切目縁(側面背面)	床	[内陣・大縁]拭板張 [大間他]疊敷、土間
天 井	[内陣]格天井・板支輪(彫刻) [大間]折上格 天井 [和室・大縁]竿縁天井	須弥壇・扇子・宮殿	須弥壇(禅宗様)
塗 装	素木、極彩色(欄間、彫刻支輪)	飾 金 物	星根破風
絵 画	なし	材 質	檜
彫 刻	[身舎内部]来迎柱上虹梁・内陣と大間境虹梁・大綱上虹釧(彫刻)、須弥壇左右壁画(昇龍・降龍)、内陣・大間 欄間に林和靖・四睡・虎溪三笑等故事・人物・動物・植物・鳥類 計29面)、板支輪(菊水、雲)		



写122-2 全景



写122—3 背面



写122-4 內陣



写122-5 大間欄間・支輪



寫122-6 大綠虹梁・欄間影刻



写122-7 檻間影刻

木の三福寺欄間彫刻銘にある勢田郡小夜戸村の星野萬助と同一人物であると考えられる。

山門（図122-3、表122-3、写122-8～122-10）

建造年代は棟札により天明元年(1781)である。3間1戸二階二重門、入母屋造銅板葺（下層は瓦葺）で正面左右に仁王像を置き金剛垣を巡らせている。下層は基壇1段で切石の基礎と礎盤に丸柱を立てて虹梁と頭貫でつなぎ台輪をのせている。組物は拳鼻付組手先で中備は彫刻蔓股と詰組である。上層の組物は出組三手先で中備は彫刻蔓股と詰組である。木鼻の彫刻は丸彫獅子及び牡丹の籠彫で四方の隅木下には蟹の彫刻が施されており、棟札によれば彫工師は勢多郡花輪村住の高瀬万之助、同苗忠八と星野市良左衛門である。妻飾りは二重虹梁大瓶束とし蕉懸魚を付けている。下層の床は土間で、鏡天井には絵師と思われる墨書きがあり劣化して読み取れず不明であるが、龍と天女と迦陵頻伽の各2面の天井画が描かれている。上層は1室で正面に棚状の須弥壇を置き、中央に釈迦如来像と十六羅漢像、左手前に山門建立に力を尽くし棟札にも名前が記載されている直成圓心の像を置いている。格天井には人物、鳥、花など60枚の天井画が描かれているが絵師は不明である。山門の扁額は庭田前権大納言重嗣（天保2年(1831)没）の真跡とされている。

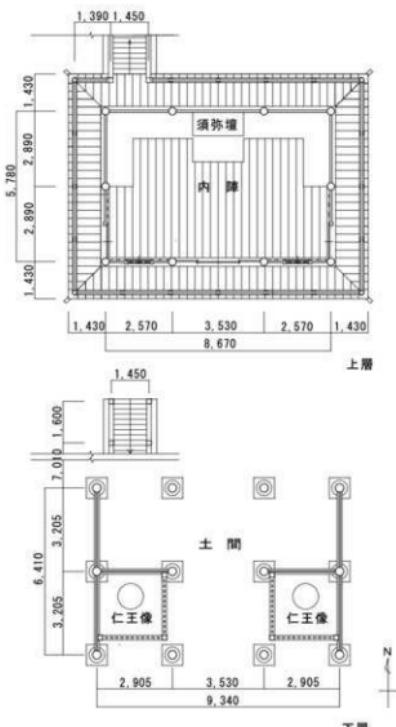


図122-3 平面図(山門)

表122-3 山門

建造年代／根拠	天明元年(1781)／棟札	構造・形式	3間1戸二階二重門(9.34m)、側面2間(6.41m)、入母屋造、平入、銅板葺(当初茅葺)
工 匠	[大工] 棟梁 上州群馬郡室田住 飯野友八、脇 棟梁 武井定八、渡本伊兵衛、松本助六、同苗伴助、飯野長松、武井政吉 [彫工] 當國勢多郡花輪住 高瀬万之助、同苗忠七、星野市良左衛門 [石工] 信益高遠住石工 清左衛門、新左衛門(棟札)	基 础	基壇、切石独立基礎、礎盤
軸 部	[上層] 丸柱、虹梁、貫、台輪 [下層] 丸柱、虹梁、貫、台輪	組 物	[上層外部] 三手先 [上層内部] 拳鼻付組 [下層外部] 二手先 [下層内部] 拳鼻付組
中 備	[上層] 本蔓股、詰組、撥束 [下層] 本蔓股、詰組、撥束	軒	[上層] 一軒繁重木、支輪 [下層] 一軒繁重木、支輪
妻 飾	二重虹梁、大瓶束、懸魚(蕉)	柱 間 裝 置	[上層] 栓唐戸、舞良戸、火灯窓、板壁 [下層] 板壁、金剛垣
縁・高欄・脇障子	[上層] 四方切目縁、擬宝珠高欄	床	[上層] 拹板張 [下層] 土間
天 井	[上層] 格天井 [下層] 鏡天井	須弥壇・扇子・宮殿	[上層] 須弥壇
塗 装	素木	飾 金 物 等	なし
繪 画	[上層] 天井画(花・鳥・動物・人物等60面) [下層] 天井画(龍、天女、迦陵頻伽 各2面)	材 質	檜
彫 刻	木鼻(獅子・竜彫)、支輪(花・鳥・水流)、本蔓股(花・鳥・動物)		



写122-8 全体



写122-9 組物三手先



写122-10 藤股・大斗・支輪

鐘樓 (图122-4、表122-4、写122-11~122-13)

建造年代は再建の棟札により天保3年(1832)である。正面1間、側面1間、方形造銅板葺で切石積み基壇の上にコンクリート基礎を築造している。土台から湾曲した柱と袴腰を設けて切目縁の床を載せ、周囲に擬宝珠高欄を設けている。床の中央の開口部には格子を設けて音響効果を高めている。柱の上部は頭貫がなく桁を直接架げており、組物や中備はない。桁の下に飛貫を設けて桁との間に筋交い状の格子を設けている。この鐘楼は参道の相向かいの傘松の近くにあったが、傘松が大きくなつて障害となるため昭和40年(1965)頃に現在地に移設し、その際にコンクリート製の基礎を設けている。また、平成27年(2015)には屋根を銅板葺に改修している。

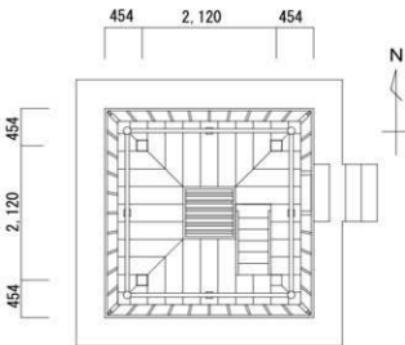


图122-4 平面图(鐘楼)

表122-4 鐘樓

建造年代／根据	天保3年(1832)／棟札	構造・形式	正面1間(2.30m)、側面1間(2.30m)、方形造、銅板葺(当初板葺)、袴腰付
工 匠	[大工]漆谷戸 山野初太郎、山野基蔵(棟札)	基	基壇、コンクリート布基礎
軸 部	角柱(腰下湾曲)、土台、桁	組 物	なし
中 備	なし	軒	母屋
妻 飾	なし	柱間裝置	筋交状欄間
縁・高欄・脇障子	擬宝珠高欄	床	拭板張
天 井	竿縁天井	須弥壇・扇子・宮殿	なし
塗 装	素木	飾金物等	[鋼木]木口金物
繪 画	なし	材質	檜
彫 刻	なし		



写122-11 全体



写122-12 筋交の欄間



写122-13 床下

まとめ

本堂は、曹洞宗本堂の形式を良く伝えている規模の大きな堂宇で、飾り気のない素朴な様相であるが、須弥壇の左右や内陣及び大間の欄間に中国故事や動植物を題材にした多くの彫刻が嵌め込まれている。山門も木鼻の丸彫りや籠彫りなど緻密な彫刻で、共に勢多郡花輪村の彫工師達の手によっており、高い技術が伝えられている。本堂と山門共に群馬郡室田住の飯野友八とその配下の大工達の手に

よって建立されており、こちらも高い技術である。幾度も災禍に見舞われた寺院であるが、檀信徒の浄財により立派な堂宇が建立されている事から、当時のこの地域の基幹産業である岩島麻（上州北麻）による繁栄や信仰の深さを窺い知ることができる。

（宮田賢二）

【参考文献】

『岩島村誌』岩島村誌編集委員会 昭和46年

124 凤仙寺 (ほうせんじ)

表124-1

寺院名	桐生山風祐寺	所在地	桐生市梅田町1-58
宗派	曹洞宗	所有者・管理者	宗教法人 鳳仙寺
主本尊	紙迦牟尼如來	仏事	厄除(1/1~5)、御施食供養(4/29)、秋葉三尺大祭(10/16)、三仏忌・降誕祭・鷲獨祭・成就会・涅槃会・座禅と朝粥の会(1/1を除く毎月1日)、鳳仙寺享経の会(春秋彼岸)他
創立・沿革	天正2年(1574)桐生城主由良成繁により由良家の菩提寺として開基、勅賜仏廣常照照押師により開山(『桐生市史別巻』)。		
文化財指定	鳳仙寺本堂(市重文 平成14年3月)、鳳仙寺の山門(市重文 昭和63年10月)、鳳仙寺輪藏(市重文 昭和54年8月)、鳳仙寺梵鐘(市重文 平成元年11月)、由良成繁の墓(市史跡 昭和46年2月)		

位置：配置（图124-1、图124-2）

桐生市街地から北に進み、梅田1丁目の県道を左折し、鳳仙寺沢に沿い西に入った緑深い山間に位置する。総門・勅使門跡を直進し山門を望みながら直進すると、右側に経蔵（輪藏）を置く。正面の石段を上ると、両脇の持国天・増上天が迎える。門の左脇に鐘楼を置き、石畳の参道を進み石段を上ると本堂正面である。左脇には平成年代に改修した常磐殿が繞き、右脇には表玄関・石染閣・書院と連なる。その奥に水屋・庫裡・茶室を置く。更に一段上ったところに由良成繁の墓並びに歴代住職の墓が置かれ、その奥に檀家の墓地が連なる。境内南は鳳仙寺沢を挟み桐生市街続く山地、北は道路を挟み急峻な山に続き遺徳の滝を配す、西は緩やかな登り坂が桐生アルプスの尾根の麓まで続く。

由来および沿革

戦国時代の末、天正元年(1573)桐生城主 桐生親綱との合戦に勝利した由良成繁は、天正2年(1574)嫡子の国繁に跡を継がせ隠居の後桐生に入部し、由

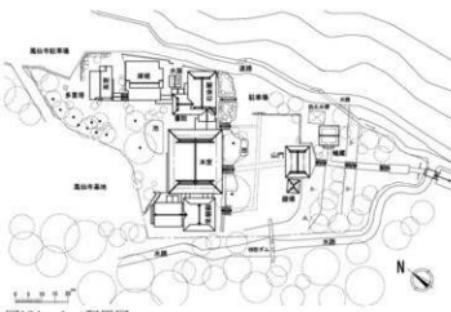


图124-1 配置图



写124-1 参道全景

良家の菩提寺鳳仙寺を勅賜仏広常照禪師の開山により鳳仙寺を開基した。その後、国繁は豊臣秀吉により常州牛久5000石に移封された。元禄元年(1688)寺社奉行より常法幢別格地の称号を許され地域の指導的寺院となる。当寺は永平寺第19世住持となった第3世大円門鶴大和尚・第3世總持寺独住となつた山瑾英禪師・「鳳仙寺版正法眼藏」を著した第16世乙堂喚丑禪師等多くの高僧を輩出した、常に40人ほどの雲水が参禅修行し教導を受ける一大道場で、末寺17か寺を持つ桐生最大の曹洞宗寺院であった。

現在でも、末寺14か寺を維持し、桐生地区の宗門の中心的役割を果たしている（明治34年「鳳仙寺之景」に当時の様子が描かれている）。

ほんどう
本堂(図124-2、表124-2、写124-2～124-7)

本堂は八室構成の大規模な曹洞宗本堂の形式をよく伝えている。前方の1間通りを土間と更に1間通りの縁があること。内陣は開放的に作られ後世の改修によるところであり来迎柱に痕跡が残っている。外陣と両脇間境には現在柱はないが、当初は1間毎に柱があったと考えられる。

床下にその痕跡が残る。東余間の内陣側には吊床となっているが、当初は普通の床の間であったと考えられる。

建造年代は建築様式から17世紀後期～18世紀初期と推定する。内外陣境欄間裏に「彫物 1枚 鶴松

施主 高橋小平治 享保11年(1726)」の墨書きがあり、そのことを裏付ける。全体的に素木を基調とするが、内外陣などに華やかな彩色を伴う彫刻を用いている。見どころは、彫刻は来迎柱上部の鳳凰等、天井画は内・外陣・縁の格天井の鏡板の天井画（林青山画とされる）、襖絵は愛新覚羅毓峋の銘がある。屋根は当初茅葺であったが数度の葺き替えの後、明治34年(1901)に瓦に葺き替え、現在は瓦型銅板葺となっている。伝統的な八室構成を取り入れた貴重な建物である。

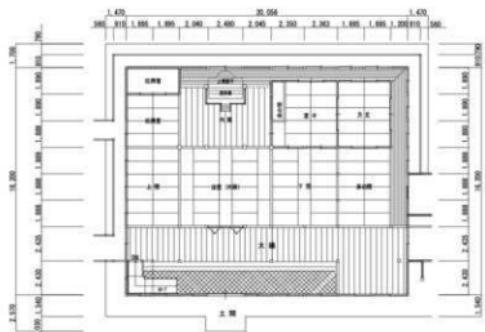


図124-2 平面図(本堂)

表124-2 本堂

建造年代／根拠	17世紀後期～18世紀初期／建築様式 外陣境欄間裏の墨書き[彫物 1枚 鶴松図 施主 高橋小平治 享保11年(1726)]	構造・形式	正面20.05m、側面16.20m、入母屋造、瓦型銅板葺、平家建、平入
工 匠	不明	基 础	自然石独立基礎(石場建)土台なし、一部玉石敷並べ基礎
軸 部	角柱、丸柱(来迎柱棕附)、内外陣境柱) [内部] 内法長押 [外部] 内法長押、台輪なし、肘木	組 物	[内外陣境柱上部・来迎柱上部]出組
中 備	[内外陣境・来迎柱間]幕股	軒	二軒垂木(平行)
妻 飾	鰯懸魚、連子格子(下地漆喰)	柱 間 裝 置	[外部]硝子戸、漆喰塗壁 [内部]襖戸、両間中折戸戸、戻欄間、彫刻欄間
縁・高欄・監障子	[西・北面]切目縁、木製擬宝珠高欄	床	[前面1間通]土間(石貼) [大縁]襖拭板張 [法堂・位牌堂上間・下間、茶の間・方丈・室内]疊敷 [内陣・廊下]拭板張
天 井	[法堂・内陣・大縁]絵入格天井 [土間]化粧垂木、化粧野地 [その他の部屋]竿縁天井	須弥壇・扇子・宮殿	禪宗様須弥壇、前机、本尊(积迦三尊像)厨子、両脇厨子
塗 装	素木、極彩色(彫刻)、(朱塗)丸柱	飾 金 物 等	両間中折戸戸(銅金物打、鍛鉄製格子嵌込、鉄製軸、軸受(薦座内))
繪 画	[大縁]格天井鏡板絵 [法堂]格天井鏡板絵 [内陣]格天井鏡板絵(林青山画) [襖絵](愛新覚羅毓峋画)	質 材	柱(杉)、円柱(柳)、床板(柳、松)、大床(桧)
彫 刻	欄間彫刻(内陣法堂境に3枚)、仏壇上部彫刻(鳳凰)		



写124-2 全景



写124-3 側面



写124-4 外陣



写124-5 漢絵

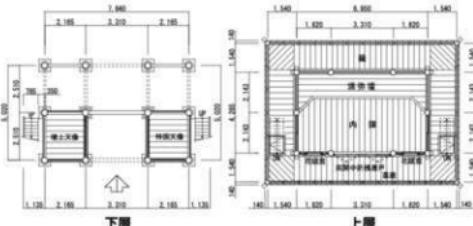


写124-6 天井絵



写124-7 須弥壇

豪壮な3間1戸楼門、入母屋造、棟瓦葺である。全体が素木であること、上下粽付の円柱、一部詰組の組物、木鼻、拳鼻、二軒扇繁縷、上層の両脇間の花窓、高欄四隅の擬宝珠柱頭部の逆蓮頭などに禅宗様建築の傾向が強く見られる。内陣は須弥壇を持ち、当初は十六羅漢が安置されていたが、廃仏毀釈の時に本堂の天井裏に隠されていたが、現在は本堂の内外陣脇間欄間位置に置かれている。上層正面中央両開き中折桟唐戸の一部には透かし彫りが施され、開閉は薬座を用いる。上部



写124-3 山門

表124-3 山門

建造年代／根柢	18世紀初期／建築様式、宝永元年(1704)「山門建立勅化簿」第11世曲外嶺松和尚代	構造・形式	3間1戸楼門(7.64m)、側面2間(5.02m)、入母屋造、平入、棟瓦葺
工 匠	不明	基 磐	独立基礎、木製礎盤、基壇(コンクリート打、緑自然石)
輪 部	〔下層〕主柱4本(丸柱粽付)、控柱8本(丸柱粽付)、腰貫、内法貫、頭貫、台輪、冠木 〔上層〕乗土台、柱(丸柱粽付)、頭貫、台輪	組 物	〔下層〕出三斗実肘木付、高欄受二手先 〔上層〕出組実肘木付
中 備	〔下層〕幕股 〔上層〕擴束(付擴束)	軒	二軒・扇繁縷
妻 飾	妻虹梁、幕股、鑄懸魚	柱 間 裝 置	〔下層〕板張壁 〔上層〕板張壁、両間中折桟唐戸、火灯窓(内障子付)、板戸
縁・高欄・脇障子	〔上層〕四方切目板張、禪宗様擬宝珠高欄	床	〔下層〕土間コンクリート(一部敷石)、板張 〔上層〕板張
天 井	〔下層〕上層床下表 〔上層〕格天井	須弥壇・厨子等	〔上層〕須弥壇(板張)、台座(板張)
塗 装	素木、檜彩色(幕股)	飾 金 物 等	〔構木、垂木木口〕銅板巻
絵 画	なし	材 質	礎版、柱(櫛)、腰貫、内法貫(桧)、その他不明
彫 刻	幕股(十二支彫刻)、両脇冠木上(雲水電彫刻)、床虹梁・虹梁・懸魚(絵様)、拳木鼻、側面両側(木製階段)		



写124-8 山門正面



写124-9 背面



写124-10 背面

に「桐生山」と書かれた山号額を置く。下層臺股は通路の両面上に各々2個、左右の脇間と側面に各1個の計12個が設けられそれぞれには干支が順次配され、通路上の巳、丑、子、亥は透かし彫りとし、簾彫り雲水龍が嵌め込まれている。

鐘樓（図124-4、表124-4、写124-11～124-13）

建造年代は打札より明和3年(1766)であり、現在は殆どの部材が修復されている、「鳳仙寺之景」によると当初茅葺であった屋根が、明治期には瓦葺に代わっている様子を見ることが出来る。全体に素木を用い装飾がないため、古風である。この形式の鐘楼は桐生市川内町の崇禪寺とよく似ている。当初の梵鐘は、寛永18年(1641)、江田讀岐守安重の作によるもので、県内でも有数の古さで、桐生市重要文化財

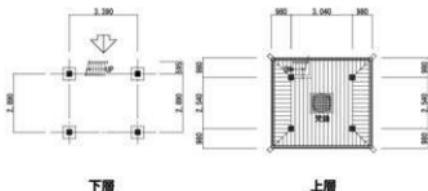


図124-4 平面図(鐘楼)

表124-4 鐘楼

建造年代／根拠	明和3年(1766)／打札	構造・形式	正面1間(3.39m)、側面1間(2.89m)、鐘樓、寄棟造、桟瓦葺
工 匠	不明	基 础	自然石切石独立基礎
軸 部	通柱(角柱、内軸)、腰貫、胴差、上層内法貫、桁	組 物	なし
中 備	なし	軒	一軒疊垂木(平行)
妻 鋸	なし	柱間装置	なし
縁・高欄・脇障子	[上層]四方禪宗様擬宝珠付高欄	床	[下層]土間 [上層]切目板張(音抜穴格子付)
天 井	[上層]化粧野地、垂木表し	須弥壇・扇子・宮殿	なし
塗 装	素木	飾 金 物 等	なし
絵 画	なし	材 質	桧、松
彫 刻	高欄擬宝珠(蓮花彫刻)		



写124-11 鐘楼正面



写124-12 背面



写124-13 鐘楼内部

「鳳仙寺梵鐘」に指定され現在は本堂に置かれている。現在の梵鐘はその後に鑄造されたものである。

輪藏（図124-5、表124-5、写124-14～124-16）

建造年代は細部の様式などにより18世紀末期と推測する。このことは寺伝に掲る天明3年(1783)ともほぼ一致する。厨子形式の輪藏は円柱を中心に経架八面を持ち(内一面は「双林大士」を安置する厨子)延宝7年(1679)板行の「鉄眼版一切経」6,956巻が蔵されている。経架の前面には差肘木の組物に支えられて博縁が巡り、禅宗様逆蓮頭擬宝珠付高欄とされる。現在でも円柱軸を中心に手押しで回転させることは可能であるが、柱脚部の柱の腐食、補強鉄輪の腐食(錆)が著しいため、早期の改修が望まれる。鞘堂(経蔵)は方三間白壁塗り蔵造り、本柱12本、間柱10本の構成で、切妻造棟瓦葺、向拝一間が付く。鞘堂は小屋組みの中央で輪藏の中心柱である回転軸を支えている。このため、輪藏と鞘堂は一体で、同時に建築したものである、軸を中心に描かれた天井画の意匠もそれを裏付けるものである。現在、本柱、間柱の柱脚の腐食を抑えるため、腰廻りはコンクリートで補強されている。尚、輪藏は桐生市重要文化財「鳳仙寺輪藏」として指定されている。

表124-5 輪藏

建造年代／根拠	18世紀末期／建築様式、寺伝	構造・形式	中心円柱輪回転式八角形八面絆架付厨子形式 輪藏(実測(絆架表面1辻0.92m、高欄芯々1辻1.58m)八注造、板葺)
工 匠	不明	基 础	花崗岩独立基礎
軸 部	丸柱	組 物	腰組(大仏様差肘木五手先、通肘木、縁草、腰支輪)
中 備		軒	二軒扇繁垂木
妻 飾		柱間装置	輪藏：両開棧唐戸
縁・高欄・脇障子		床	
天 井		須弥壇・扇子・宮殿	扇子
塗 装	黒(組物、柱、縁)、朱(丸柱、垂木、高欄、木鼻駒様)、素木(頭貫、屋根)	飾 金 物 等	棧唐戸角金物、丁番
繪 画	なし	材 質	桧、松、櫻
彫 刻	彫刻：腰支輪 絹掛：木鼻・実肘木		



写124-14 精堂全景



写124-15 多重肘木



写124-16 人面体

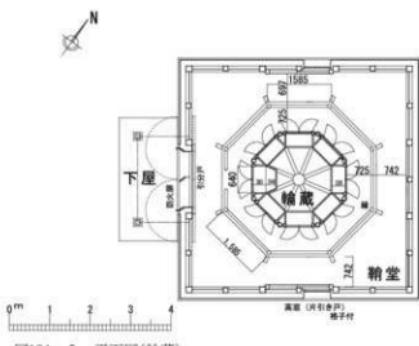


図124-5 平面図(輪藏)

まとめ

境内は、三方を山に囲まれ鬱蒼とした林の奥に少し開けた所にある。鳳仙寺は近世以来の堂宇を多く残す大伽藍を持つ桐生有数の大寺院で、修行寺として多くの高僧を輩出し、檀那寺として桐生新町の多くの有力者を含む人々と結びついてきた。これは、地理的に見て桐生新町から程良い距離を持つこと、緑深い森の内に広がる伽藍の配置と建物の意匠との調和による境内全域の持つ雰囲気が、人々の心に安らぎを与えることが出来、現在も近世禅宗寺院の様子を保ち、様々な催しに活用されているところにある。末寺17ヶ寺を持った、本山に次ぐ別格地として桐生における曹洞宗の中心寺院であり、風格のある貴重な建造物群である。

(飯山 繁)

【参考文献】

『桐生市史』桐生市史編纂委員会編 昭和33年

『上野国寺院明細帳』群馬県文化事業振興会 平成5年

125 淨運寺（じょううんじ）

表125-1

寺院名	由中山英照院淨運寺	所在地	桐生市本町6-398
宗派	浄土宗	所有者・管理者	宗教法人 淨運寺
主本尊	阿弥陀如来	仏事	お施餓鬼(8/15)、お十夜(10月)、除夜の鐘(12/31)
創立・沿革	天文年間に広沢の地に創設、天正8年(1580)頃新宿に移転。現在地に移転したのは慶長10年(1605)である。本堂位牌壇脇に掛けられた置札によると、宝曆3年(1753)の上棟とある。		
文化財指定	淨運寺本堂(市重文 平成11年8月)、淨運寺安土宗論記録(市重文 昭和38年3月)、紙本金地著色秋草花卉図酒井抱一筆 孔雀牡丹図 谷文亂筆(県重文 昭和54年10月 県立歴史博物館収藏)		

位置・配置(図125-1、写125-1)

県道桐生・伊勢崎線本町通り、本町6丁目市街地西側通り沿いに位置する。北には、桐生天満宮があり、立地、信仰と市民生活の各面から関わりのある寺院である。境内正面に本堂、本堂脇に社務所、庫裡、左手には閻魔堂(旧觀音堂)、右手に鐘楼が建つ。本堂左手には墓地が広がる。

由来および沿革

天文年中に広沢の地に玉念が庵室を持ったことに始まり、永禄元年(1558)に玉念を開山として哀愍寺



写125-1 境内全景

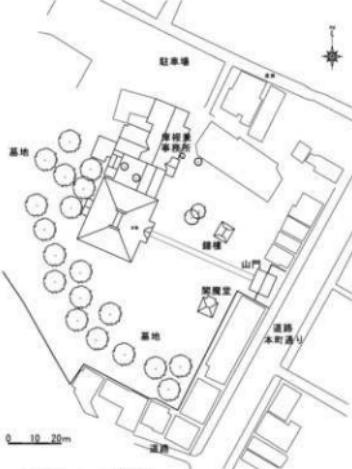


図125-1 配置図

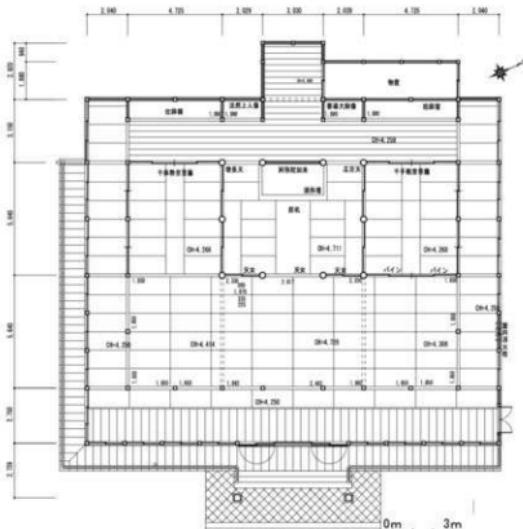


図125-2 平面図(本堂)

が創建。天正8年(1580)頃新宿に移転し、二世間炭の代に浄運寺と改められた。現在地に移転したのは慶長10年(1605)である。本堂位牌壇脇に掛けられた置札によると、宝暦3年(1753)の上棟とある。

はんどう 本堂(図125-2、表125-2、写125-2~125-7)

寄棟造平入 棱瓦葺(元茅葺)、桁行9間(20.53m)、梁間7間(16.65m)、向拝三間唐破風付、背面張出付 本堂は比較的大きな六室構成の方丈系本堂である。正面1間半、両側面及び背面に一間分の広縁を巡らす。正面外側一間通り及び内陣裏部分の

みが板敷で、他は疊敷きとなっている。内外陣境は現在開放的になっているが、以前は中敷居があり建具がはめ込まれていたことが内外陣境の柱の痕跡よりわかる。本堂位牌壇脇に掛けられた銘札によると、宝暦3年(1753)の上棟とある。慶応年間と明治10年代前半に修理と増改築、屋根は元茅葺であり、天保6年(1835)、明治19年(1886)に葺替えの記録あり、明治期の葺替えの際、茅葺から現在の棟瓦葺きに改められた。本堂は、建立から改修・改築の推移が墨書きや刻銘から判明しており、桐生新町の形成と発展に重要な係りをもった歴史的な重要な建物である。

表125-2 本堂

建造年代／根据	宝暦3年(1753)/銘札	構造・形式	寄棟造、平入り、千鳥破風、軒唐破風、向拝柱、地紋彫几帳面、柱脚ちまき部分金物、丸柱上部全てちまき
工 匠	花輪邑住、石原常八、同 改之助、同 鶴次郎、須弥壇裏刻銘あり、万延2年	基 础	当初石ば立て、現在コンクリート、基壇2段、当初土台なし現在は土台あり
軸 部	【身舎】角、円柱、地長押、内法長押、台輪 【向拝】方柱、水引虹梁、海老虹梁	組 物	【身舎】舟肘木絵様あり 【向拝】連三斗、実肘木付 【来迎柱上部、内外陣境】一手先
中 備	【身舎】水引虹梁絵様 【向拝】水引虹梁絵様の上龍の彫刻水引虹梁、台輪の上彫刻支輪、彫刻欄間	軒	正面二軒、疊、飛燕繁垂木、背面二軒
妻 飾	軒唐破風、兎の毛通し、桁隠し	柱間装置	外部アルミミサッシ、サッシ内側に木桟の格子付
緑・高欄・監障子	二大方床切目縁、登り高欄、擬宝珠高欄	床	疊、板張り
天 井	格天井、格間に板絵(慶応2年の墨書き)、格天井絵無し、竿縁天井	須弥壇・扇子・宮鏡	禅宗様、扇子あり、須弥壇前のお供物台に石原常八の刻あり
塗 装	支輪、宝暦の欄間、高欄(黒)、垂木小口(白)	飾 金 物 等	向拝柱柱脚部、棟唐戸、高欄部
絵 画	格天井、格間に板絵	材 质	不明
彫 刻	内陣脇(文久)、位牌壇上部、支輪、外陣おわり(宝暦)、来迎柱両脇欄間、向拝部、水引虹梁、舟肘木絵様		



写125-2 全景



写125-3 背面・側面



写125-4 向拝



写125-5 木鼻



写125-6 向拝虹梁



写125-7 内陣

庫裡（図125-3、表125-3、写125-8～125-10）

切妻造、桟瓦葺、正面31.9m奥行15.9m、角柱、屋根葺替え（平成5年（1993）11月から平成6年（1994）4月）瓦は200年前の三州瓦、鬼瓦は、写真

を元に忠実に再現、古い瓦は本堂軒下に保存している。本体改修工事平成23年（和室10帖4室、和室8帖2室、応接室、事務室、一間の広縁（廊下）、玄関（土間））に改修している。



図125-3 平面図(庫裡)

表125-3 庫裡

建造年代／根据	19世紀前期／建築様式	構造・形式	切妻造
工 匠	角、丸柱、内法長押	基 础	改修工事によりコンクリート基礎
軸 部	不明	組 物	不明
中 備	[身舎]幕股、差し鴨居、梁、絵様	軒	正面一軒、疎、背面一軒
妻 飾	玄関、懸魚	柱 間 裝 置	アルミサッシ、格子、玄間内部、格子戸+無良戸
縁・高欄・脇障子	不明	床	畳、板張り、フローリング
天 井	竿縁天井	須弥壇・扇子・宮殿	なし
塗 装	素地	飾 金 物 等	なし
絵 画	なし	材 質	桧
彫 刻	玄関水引虹梁(差鴨居、梁)に絵様、幕股に絵様		



写125-8 侧面



写125-9 妻面



写125-10 内部

寛永19年(1642)～承応2年(1653)庫裡建立寺伝によるとあるが、現在の遺構とは対応しないと考える。

尚、文化12年(1815)中長屋十一八間四尺が二階付きで建替え(これが現在の庫裡の建物である)、玄関の水引虹梁等から19世紀前期と推察する。

山門(図125-4、表125-4、写125-11～125-13)

1間1戸四脚門、切妻造平入、本瓦葺、親柱円柱、控柱角柱、禅宗様二手先、中備幕股、妻飾り二重虹梁組物、格天井、唐戸、山門は、規模の大きい

四脚門である。寺伝によれば享和3年(1803)建立であるが、虹梁絵様からは19世紀前期と考えられる。獅子鼻等の細部彫刻は優れているが、天井画以外は彩色がなく白木のままで立ちも高く素木であることから、19世紀的な特色を表していると考えられる(『桐生のまちと近代化遺産』より)。山門改修工事昭和60年(1985)9月着工、昭和61年(1986)5月完工、施工者 桐生建設株式会社(敷居側面に金属プレート)。

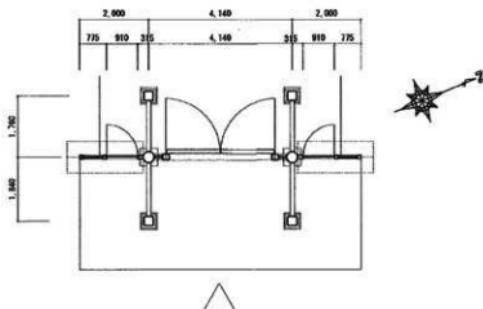


図125-4 平面図(山門)

表125-4 山門

建造年代／根拠	19世紀前期／建築様式	構造・形式	1間1戸四脚門、切妻造平入、本瓦葺、親柱円柱、控柱角柱
工 匠	不明	基 碇	礎石
輪 部	親柱0.36Φ、控柱0.27角ちまき、柱脚飾り金物	組 物	禅宗様二手先、尾垂木、こぶし鼻付
中 備	幕股、正面、大瓶東おい形付(透かし彫)	軒	正面(二軒、繁垂木)小口金物、支輪軒彫刻龍
妻 飾	支輪付、二重虹梁、大瓶東おい形付	柱 間 裝 置	唐戸金物付
縁・高欄・脇障子	不明	床	石畳
天 井	格天井、天井画あり	須弥壇・扇子・宮殿	なし
塗 装	正面の虹梁に色彩跡あり(白)1箇所のみ	飾 金 物 等	芳金物、小口、柱脚、金物隠し、建具、破風端
絵 画	なし	材 質	不明
影 刻	虹梁下、持送り(籠彫)		



写125-11 全景山門



写125-12 背面



写125-13 山門改修金属プレート

鐘樓堂（図125-5、表125-5、写125-14～125-16）

方一間、入母屋造、棟瓦葺、袴腰付、角柱、台輪、出三斗、中備幕股、四方切目縁高欄、一軒疊垂木。鐘樓堂、正保3年(1646)春建立（「積善 桐生の

お寺」桐生仏教会発行より）基礎は礎石造、高欄より下は、下見板張り、石積みに刻銘文政11年(1828)の彫りがある。

表125-5 鐘樓堂

建造年代／根拠	18世紀後期頃／建築様式	構造・形式	方一間、入母屋造、棟瓦葺き、袴腰付
工 匠	不明	基 础	礎石
軸 部	角柱、台輪	組 物	出三斗、高欄下持送り(コーナー)、袴腰、実肘木
中 備	幕股	軒	正面一軒疊垂木
要 飾	懸魚	柱 間 装 置	不明
緑、高欄、脇障子	擬宝珠高欄、四方切目縁高欄	床	板張り
天 井	2階竿縁天井	須弥壇・扇子・宮殿	なし
塗 裝	赤、白、袴(黒)、木鼻(緑)	飾 金 物 等	不明
繪 画	なし	材 質	不明
影 刻	墓股、実肘木、木鼻、持送り、全て絵様		



写125-14 全景鐘樓堂



写125-15 背面



写125-16 礎石

閻魔堂（図125-6、表125-6、写125-17～125-19）

閻魔堂（旧觀音堂）は、桁行三間梁間三間、寄棟造入母屋平入、向拝一間、角柱、絵様肘木、向拝柱上連三斗、二間疊垂木、向拝水引虹梁上幕股がある。淨運寺の遺構中最古と考えられる。水引虹梁、繁虹梁等の絵様より18世紀初期の建立と考えられる（「桐生のまちと近代遺産」より）。修理、改造は激しく建具は全てアルミサッシに変えられている。内部も仏壇周辺を除いては、当初の面影なし。修理時期不明。

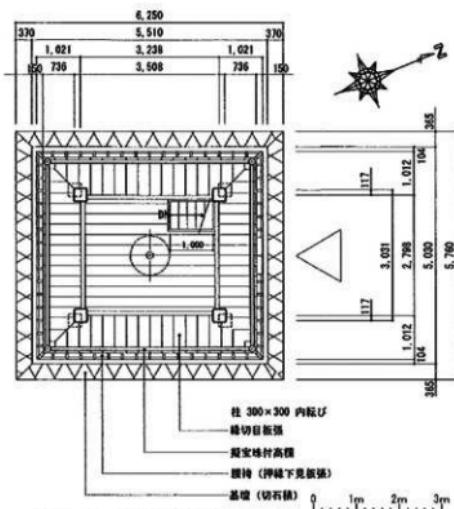


図125-5 平面図(鐘樓堂)

表125-6 間魔堂

建造年代／根据	18世紀初期／建築様式(幕板、木鼻にて推定)	構造・形式	檜行三間梁間三間、寄棟造平入、向拝一間
工 匠	不明	基 础	切石、自然石、基壇1段、土台(ねこ土台)
軸 部	0.115角柱、向拝柱0.145角、長押、切目、内法、台輪、来迎柱虹梁上	組 物	繪様透木、向拝柱上連三斗
中 備	長押(頭貫に付いている)向拝水引虹梁上幕板	軒	二軒疊垂木
妻 飾	向拝部桁隠し	柱 間 装 置	アルミサッシ、杉戸(折れ戸)
縁・高欄・監障子	なし	床	板張り
天 井	井 外陣竿縁天井、内陣竿縁天井、板張り	須弥壇・扇子・宮殿	あり
塗 装	朱	飾 金 物 等	鶴口(昭和59年)、向拝柱脚部
繪 画	なし	材 質	不明
彫 刻	木鼻は珍しい		



写真125-17 全景間魔堂



写真125-18 側面



写真125-19 向拝虹梁

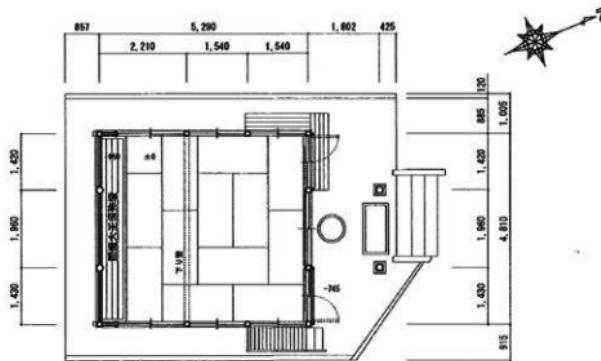


図125-6 平面図(間魔堂)

まとめ

境内には、本堂を含む5棟、山門、本堂、庫裡、間魔堂(旧觀音堂)、鐘樓堂、鎮守石祠等現存している。その他は、近世の遺構で、近世の境内が群として残されている極めて貴重な存在といえる。

(野口益一、飯山繁)

【参考文献】

- 『積善 桐生のお寺』桐生仏教會 平成7年
- 『桐生のまちと近代遺産』平成9年
- 『桐生市指定文化財指定書』平成11年

126 長泉寺（ちょうせんじ）

表126-1

寺院名	龍澤山長泉寺	所在地	桐生市梅田町4-21
宗派	曹洞宗	所有者・管理者	宗教法人 長泉寺
主本尊	般若半跏仏	仏事	六三大師、春秋彼岸会、盂蘭盆会
創立・沿革	開創については、桐生家4代在義（在後）の法名が長泉寺殿岩性白大禪定門であることから、元々は桐生在義の位牌所として文明8年（1476）建立されたという説が「桐生市史」にある。他に岩下平左衛門繁吉が文禄4年（1595）に建立という説（『梅田村郷土誌』）、鳳仙寺住職牛把禪師が寛永年間（1624～1643）に建立したとする説（『山田郡誌』）もある。現在は以前からあった寺を鳳仙寺の末寺として再興し、現在に至っていると考えられる。		
文化財指定	長泉寺本堂（市重文 平成14年3月）		

位置・配置（図126-1、写126-1）

県道桐生田沼線を北上し、梅田中学校を超えた西側斜面、桐生川右岸に位置する。県道からの入口角には1対の石柱が立ち、以前使用されていた梵鐘が置かれている。山に向かって進むと山門がある。本堂への参道はここで斜め左に曲折。石段を上ると境内、正面に本堂、並んで庫裏、右手前に鐘楼、左手に六三堂が建つ。本堂左手奥には墓地が広がる。

由来および沿革

開創については、桐生家4代在義（在後）の法名

が長泉庵殿岩性白大禪定門であることから、元々は桐生在義の位牌所として文明8年（1476）建立されたという説が「桐生市史」にある。他に、岩下平左衛門繁吉が文禄4年（1595）に建立という説（『梅田村郷土誌』）、鳳仙寺住職牛把禪師が寛永年間（1624～1643）に建立したとする説（『山田郡誌』）もある。現在は以前からあった寺を鳳仙寺の末寺として再興したと考えられている。当寺第15世大察亮禪大和尚は、明治の少し前から明治14年（1881）に学校ができるまで寺子屋を開き、近隣の幼童に読み書きを教えていたといふ。

境内の六三堂は老朽化により改築、昭和61年（1986）に建立し現在に至る。

本堂（図126-2、表126-2、写126-2～126-7）

本堂は正面17.86m、側面14.91m、入母屋造平入、銅板葺、六室構成方丈形式、向拝は設げず簡素な外観である。茅葺であった屋根を昭和54年（1979）に銅板葺に変更している。本堂正面のガラス戸を開

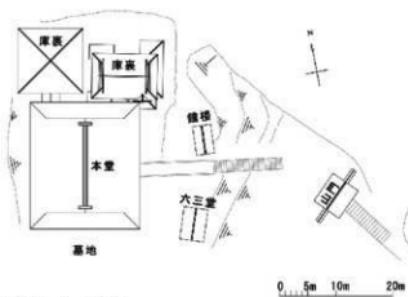


図126-1 配置図



写126-1 山門

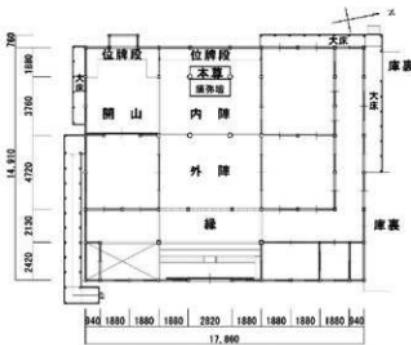


図126-2 平面図(本堂)

写126-2 本堂

建造年代／根据	正徳2年(1712)／本堂内掛札	構造・形式	正面17.86m、側面14.91m、入母屋造、銅板葺
工 匠	【彫工】石原吟八、板橋伊平次	基 磡	東石コンクリート、基礎
軸 部	【本柱】角柱　【来迎柱・内外陣境柱】丸柱　【外 隊廊下境柱】角柱、内法長押、台輪	組 物	【外部】舟肘木　【来迎柱上部・内外陣境】出組
中 備	【来迎柱上部】幕股　【内外陣境】彫刻欄間(3枚)の上幕股	軒	二軒疊垂木
妻 飾	懸魚(キツネ格子の跡あり)	柱 間 裝 置	両引ガラス戸・ガラス障子
締・高欄・船縁子	高欄　【大床】南・西・北・各一部	床	疊敷・板張
天 井	【外陣】格天井　【他】竿縁天井、天井支輪	須弥壇・扇子・宮殿	須弥壇(唐様)、扇子
塗 装	素木・檜彩色(幕股、彫刻欄間)	飾 金 物 等	隅木・垂木(鼻)に銅版巻
繪 画	なし	材 質	桧・檜
彫 刻	【内外陣境】3枚彫刻欄間(刻銘あり)　【外陣廊下境】彫刻欄間、幕股、虹梁(絵様)		

けると土間になっており両脇に柱を立て、側柱と外陣正面側の柱の両者を虹梁でつないでいる。当初からの仕様ではないかと推測する。現在土間部分北側には寺務所、収納、南側は縁の部分と同じ高さに疊を敷き、上部は物入となっている。外部は大床を正面以外の三方向に回していたと推測するが、現在は北面庫裏との間、西面は北西の部屋前、南は開山部分にあり、その東側はスロープで内部に入れるよう改修されている。

内陣は床が檜の無目板で敷居にて一段切り上げられている。須弥壇上部の押込板に、「押込壇作料施主 町家 中島文六 明和九辰夏(1772) 祐外代」の墨書、内外陣境と外陣正面中央には欄間彫刻がある。内外陣境の欄間彫刻の裏面には「右三枚 石原吟八彫之 板橋伊平次」の刻銘がある。組物は内外陣境柱筋と来迎柱筋の各柱上に出組を組む。内陣左の柱に止付けられた掛札には「客殿建立 正徳

二壬辰歳(1712)極月十日棟上 繁山嶺苗代」とある。客殿は本堂と読み替えるので、この本堂の建造年代と判断した。開山堂位牌壇下板戸には「奉書納櫛子松花絵 狩野法橋大雪 □□ 享保三戊丙(1718)」の墨書が残されている。

まとめ

当本堂は、方丈形式の本堂では古式を示す部分を残す建物として重要である。屋根の変更以外の改修部分は本来の形に復元できる範囲であり、内陣位牌壇部分は建立時のままで残っている。また、彫刻欄間には彫刻師の名が彫り込まれており、彫刻の資料としても価値が高い。

(久保田眞理子)

【参考文献】

- 『桐生のまちと近代遺産』桐生市教育委員会 平成9年
- 『桐生市史 別巻』桐生市史別巻編集委員会編 昭和46年
- 『桐生市指定重要文化財(建造物)指定書』



写126-2 本堂全景



写126-3 側面



写126-4 内陣彫刻



写126-5 内陣



写126-6 掛札



写126-7 彫刻裏面印

128 鷹林寺（ようりんじ）

表128-1

寺院名	猿澤山鷹林寺	所在地	桐生市梅田町4-528
宗派	曹洞宗	所有者・管理者	宗教法人 鷹林寺
主本尊	般若如来、聖觀世音菩薩	仏事	北向観音大祭（9月中旬萩の開花時）
創立・沿革	寺伝に據ると、かつては桂林と云い桐生領梅田の里二渡村鷺の谷の山林に庵室があったが、由良成繁が豊臣秀吉により減ばされた後、成繁の正室の働きにより、牛久に移封された。太田から桐生に移されていた新田義貞の菩提寺である金龍寺はそれに伴い牛久の得月院におかれた。その関係で、牛久金龍寺の僧 宝山宗珍が元和元年(1615)現在地に鷹林寺を開いた。その後、寛文2年(1662)由良成繁の菩提寺である桐生鳳仙寺第6世応山牛喰大和尚により伝法開山した。		
文化財指定	鷹林寺山門(市重文 平成11年8月)		

位置・配置（図128-1、写128-1）

桐生市街地から桐生川に沿って北上し、桐生川ダムに向かう新道と、旧道の分岐点左手前奥に位置する。北西に向かう緩やかな坂道を進むと正面に山門が建つ。その左脇に新築したばかりの庫裡を兼ねた仮本堂が並ぶ。直進すると階段を上り平坦な場所左に北向き観音堂を置き、毎年9月中旬の萩の開花に合わせた北向観音大祭には、多くの信者で賑わう。更に階段を登ると、正面が旧本堂である。現在は老朽化し、又、背面の傾斜地が砂防地域として指定され危険であるため、使用不可となっている。境内は東南向きの穏やかな斜面で、日当たりも良好で、緑あふれる静な霧因気に包まれている。

由来および沿革

寺伝に據ると、かつては桂林庵と云い、桐生領梅



写128-1 参道

田の里二渡村鷺の谷の山林に庵室があった。元和3年(1617)桐生から牛久に移転し得月院に置かれていた金龍寺の徒弟宗珍により、現在地に庵室を移すと共に猿澤山鷹林寺として開いた。その後、寛文2年(1662)由良成繁の菩提寺である桐生鳳仙寺第6世応山牛喰大和尚により伝法開山し鳳仙寺の末寺と

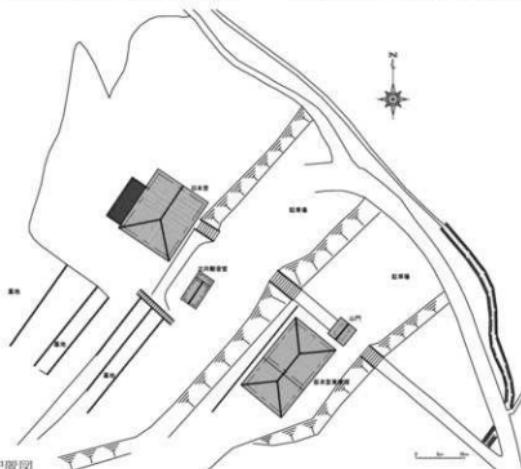


図128-1 配置図

なった。宗派は曹洞宗である。当初本尊は、聖觀世音菩薩とされていたが、現在は釈迦如来と両尊としている。旧本堂は当時の本堂が火災により焼失したため、客殿を本堂として使用していたものである。

図128-2 山門（図128-2、表128-2、写128-2～128-4）

山門は、正面1間(2.73m)、両袖1間(1.32m)、側面(2.17m)の1間1戸の四脚門である。屋根は当初茅葺であった。近年、樋から上の小屋組は改修されて、屋根は桟瓦葺に変えられているが、軸部は創建当初のものを残している。構造は親柱と控え柱を腰貫、頭貫で繋ぎ、台輪を載せ、平三斗組状に虹

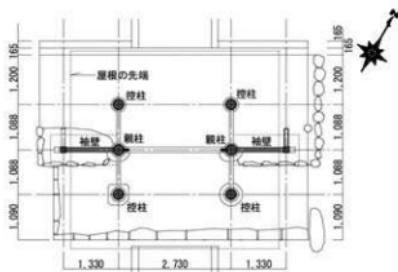


図128-2 平面図(山門)

表128-2 山門

建造年代／根据	享保17年(1732)／頭貫刻銘	構造・形式	正面1間(2.73m)、両袖1間(1.32m)、側面(2.17m)の1間1戸の四脚門。屋根は当初茅葺
工 匠	巧司・森下勘兵衛	基 础	自然石独立基礎(石場建)土台なし
軸 部	親柱・控柱(円柱0.26m)、柱脚柱頭共柱付、櫛板、袖柱(方柱0.10m)、腰貫頭貫、台輪、虹梁	組 物	出三斗実肘木付、平三斗実肘木付
中 備	親柱中央に幕板(実肘木付)・詰組	軒	二軒吹寄樋、平行
妻 鋸	なし	柱 間 裝 置	なし
縁・高欄・脇障子	なし	床	なし
天 井	なし	須弥壇・扇子・宮殿	なし
塗 装	柱に朱・黒の塗装痕が残る、他は素木	飾 金 物 等	なし
絵 画	なし	材 质	檜、松
彫 刻	虹梁、幕板、実肘木、懸魚、木鼻に絵様		



写128-2 全景



写128-3 背面



写128-4 側面

梁、太瓶束を組む。樋は吹寄樋としているが、棟木の樋欠きに変更の痕がないので、これは当初からの仕様である。細部に禪宗様の要素が生かされていることが特徴で、木製礎版、柱の粽、台輪、詰組といった要素が見られる。柱に朱、黒を塗られた痕が残っている。尚、頭貫刻銘に「享保龍蟄人足當壇中寄進／奉建造門一宇與修理料都合而ニ親爲施主逸仙／壬子仲秋巧司森下勘兵衛」とあり、享保17年(1732)建築であることが判明している。

まとめ

桐生市の寺院の山門で、建造年代の判明している観音寺山門、鳳仙寺山門に次いで古い年代の山門であり、小規模ではあるが均整のとれた形態に禪宗様の様式が調和した優れた建物である。経年変化により、基礎の不等沈下による傾き、礎版の腐朽等修復が必要と思われる部分がみられるため、修復計画を立て、順次修復を行い、その価値を維持管理したい。

(飯山 繁)

【参考文献】

- 『桐生市史 別巻』桐生市史別巻編集委員会編 昭和46年
- 『梅田村郷土史』明治43年
- 『猿澤山 鷹林寺 年代署記』

129 (川内) 観音寺 ((かわうち)かんのんじ)

表129-1

寺院名	木老山薬師院觀音寺	所在地	桐生市川内町5-584
宗派	天台宗	所有者・管理者	宗教法人 観音寺
主本尊	薬師如来(脇立不動明王、懸觀大師)	仏事	薬師如來縁日厄除け大護摩行(毎年1/8)、檀信徒各家庭安全祈願護摩供養(毎月8日)
創立・沿革	寛永4年(1627)本山延暦寺の僧実呼が廃絶同様であった旧寺を再興した。境内地にある石幢により永正9年(1512)には尼寺又は庵が建立されていたことがうかがえるが、寺名・庵裡、石幢を置く、正面に本堂がある。北は山が迫り東は墓地の背後に山が連なる、西は山田川に面する斜面で緑に囲まれた静寂な環境である。		
文化財指定	観音寺石幢(市重文 昭和41年2月)、観音寺山門(市重文 平成3年4月)		

位置・配置 (図129-1、写129-1)

県道342号線を北上し県道338号線と交わる手前300mの山田橋右側に位置し、境内左側は山田川に接し右側と奥は山に囲まれ緑豊かである。石幢の銘文は、「奉為逆修功德主妙春靈位」、右側「大日本国上野國山田郡須永郷仁田山庵住」左側「千時永正9庚申3月5日敬白」とあり、1512年に建立されたものであり、当地に庵があったと思われる。主な行事は、1月8日薬師如來厄除護摩供養、秋彼岸施餓鬼供養、桜を見る会、紅葉の会等を行い、檀信徒をはじめ地域の人々との繋がりを重視している。

由来および沿革

寛永4年(1627)9月比叡山延暦寺の権大僧都実呼和尚(中興開山とする)により廃絶同様であった旧寺を再興した。翌寛永5年(1628)4月17日山門三院執行探題上野寛永寺大僧正天海(慈眼大師)によりこの寺を不老山薬師院觀音寺と称すべしとの補任状を賜った。安永元年(1772)徳川十代將軍家治公よ



写129-1 境内全景

り寺領14石2斗と山林を下賜された。天明元年(1781)火災により本堂などは焼失したが山門は類焼を免れたようである。尚、觀音寺は寛永年間の開山としているが、境内にある觀音寺石幢には、永正9年(1512)3月5日の銘文があり、その頃から尼寺又は庵があったことがうかがえる。寺名・宗派・開基については不明である(『上野國寺院明細帳』、『桐生市史別巻』による)。

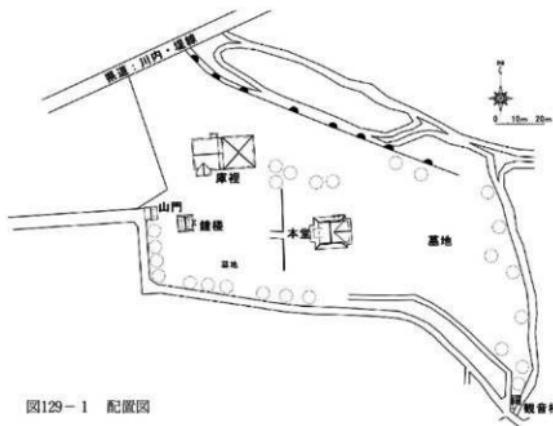


図129-1 配置図

山門 (図129-2、表129-2、写129-2～129-7)

1間1戸変形四脚門切妻造平入り茅葺屋根、棟の両端は稚児棟とし鳥衾を付け棟木の他に棟押えもある

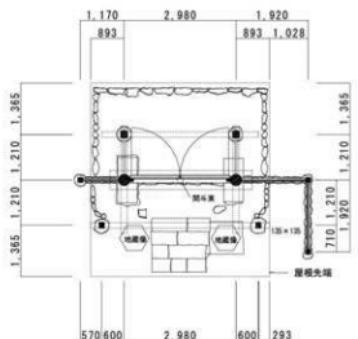


図129-2 平面図(山門)

表129-2 山門

建造年代／根据		17世紀前期／建物様式	構造・形式	1間1戸四脚門(2.93m)、側面2間(2.39m) 切妻造、平入、茅葺
工	匠	不明	基	礎 自然石独立基礎、木製角形礎盤
軸	部	丸柱(主柱)、角柱(控柱、前方控柱)	組物	平斗、実肘木
中	備	なし	軒	一軒疊重木
妻	飾	幕股(実肘木付)、破風板、三つ花懸魚 [棟両端]稚児棟とし鳥衾付、棟木の他に棟押えあり	柱間装置	両開板扉
縁・高欄・脇障子	なし		床	なし
天	井	なし	須弥壇・扇子・宮殿	なし
塗	装	素木	飾金物等	八双金具・鍛頭金具(扉)
絵	画	[冠木上板小壁] 桧彩色の正面龍 [背面]虎の絵	材質	檼、他
彫	刻	懸魚(絵様)、幕股(絵様)		



写129-2 全景



写129-3 背面



写129-4 幕股



写129-5 絵画



写129-6 八双金具



写129-7 柱脚

る。化粧垂木は取り換えの痕跡があり、大正の改修で銅板葺に改めた時のものと思われる。正面前方の控え柱は当初のものではなく、後補のものと考えられる。妻飾りに三つ花懸魚、疊垂木が見られる。間き扉には入り八双金具が付けられている。

まとめ

山門以外の建物は全て昭和・平成に建てられたものであるが、山門だけが唯一建造年代がわかる建物で、寛永4年(1627)に建立(幕文絵様から17世紀前期と推定)。桐生地区で最も古い山門として価値がある。

(野口益一、飯山繁)

[参考文献]

『上野国寺院明細帳5』群馬県文化事業振興会 平成8年
『桐生市史別巻』桐生市史別巻編集委員会編 昭和46年
『桐生市指定重要文化財指定書』平成3年